

第Ⅱ部 資料編

資料編 内容

- (1) GATB の各適性能得点の高低による群間比較
- (2) GATB 適性能プロフィールの個人内での相対的凹凸に関する検討
 - A：相対的凹凸の大きさ（山と谷の深さ）に関する分析
 - B：相対的凹凸で特徴的に現れている適性能に着目した分析
- (3) 相談特徴の有無と適性検査結果との関連性に関する分析

<結果の表記について>

○網かけは群間で有意差のあったペアを示している。群間有意差があっても網かけのないセルは、そのセルと他群とに有意差が得られていないことを意味する。

○表はすべて、「行の%（観測数）」で記述されている。

○n.s.という表記は、各群間で得られた数値の差について、一見するとどちらかが大きいように見えたとしても、統計上有意と言える差ではないという意味である。本当に差がないのか、誤差が混ざったために差が検出できなかったのか、有意差を得るために必要な要因が別にある、それを分析者がコントロールできなかったために有意差が検出できなかったのか等、様々な原因が考えられる。しかし現時点のデータ分析では、この差を統計的に説明できる手段がない（現時点ではわからない、解釈できない）という意味に捉えていただきたい。

(1) GATB の各適性能得点の高低による群間比較

<小括>

●全体として、ある適性能領域の1つの得点が高得点であると他の適性能も総じて高い傾向があった。特に、認知機能群の言語能力(V)、数理能力(N)、書記的知覚(Q)に関しては、得点が高い人は、他の適性能得点も総じて高く、逆に得点が高い人は他の適性能得点も総じて低い。したがって、グラフをみると高得点層、中得点層、低得点層というような明確な三層構造に分かれる傾向がみられた。

●GATB 適性能得点の高低と YG 検査とは、一部の適性能(運動共応)を除いて特に大きな関連性が見出されなかった。すなわち、GATB で測定される能力特徴と、YG 検査で測定される性格特徴との間には、直接的な関連性はなく、能力と性格とは別物であると結論づけられる。同様に、GATB と相談特徴との関連性についても、「動きの遅さ」等といった、運動や作業の状況を示す指標で若干の関連性がみられたものの、対人関係や性格特徴面、その他の行動面等については特に大きな関連性は見出されなかった。数理能力(N)や書記的知覚(Q)に関しては、低得点群において、動きの遅さや、指示に従わない傾向等が確認されている。

●運動共応(K)の高低と YG 検査および相談特徴との間に様々な関連性が現れた。特に、次の二つの側面において影響が現れていた。一つは、運動や作業の状況を直接示す指標と運動共応(K)の高低との関連性である。例えば、「動きの遅さ」、「手先の器用さ」といった相談特徴は、運動共応(K)の高低と直接連動することが自然に想像できるが、実際にその仮説を裏付けるような結果が得られている。もう一つは、運動や作業の様子とは直接関連しないが、二次的な影響が現れたとみられる指標群である。例えば、運動共応(K)の低得点群では、相談の中で本人の不活発な傾向、非社交的な様子が観察される傾向、うつや精神疾患に言及される傾向が多くみられた。この背景として推測されるのは、運動共応が不得意な個人には、普段から「動きの遅さ」や「手先の不器用さ」がみられ、そのことを本人が思い悩んでいる場合に、人との交わりを避けたいという不活発性として現れるという可能性が考えられる。あるいは、本人の本来の性質としては運動共応がそれほど不得意でなかったとしても、うつや精神疾患等にかかったことで一時的に活動量が落ちてしまい、てきぱき動くことが苦手となってしまったために、GATB という制限時間内のパワー検査において実力を発揮できず、得点が伸びなかった可能性も考えられる。

1. 言語能力 (V)

概要

言語能力 (V) の得点 120 点以上を「高得点群」、80 点以下を「低得点群」、それ以外を「中得点群」として、適性検査結果 (GATB、YG) と相談特徴の違いを検討した。各群の人数と性別の内訳は、低得点群 70 名 (男性 46、女性 21、不明 3)、中得点群 221 名 (男性 133、女性 86、不明 2)、高得点群 70 名 (男性 29、女性 38、不明 3) であった。

適性検査結果の特徴について

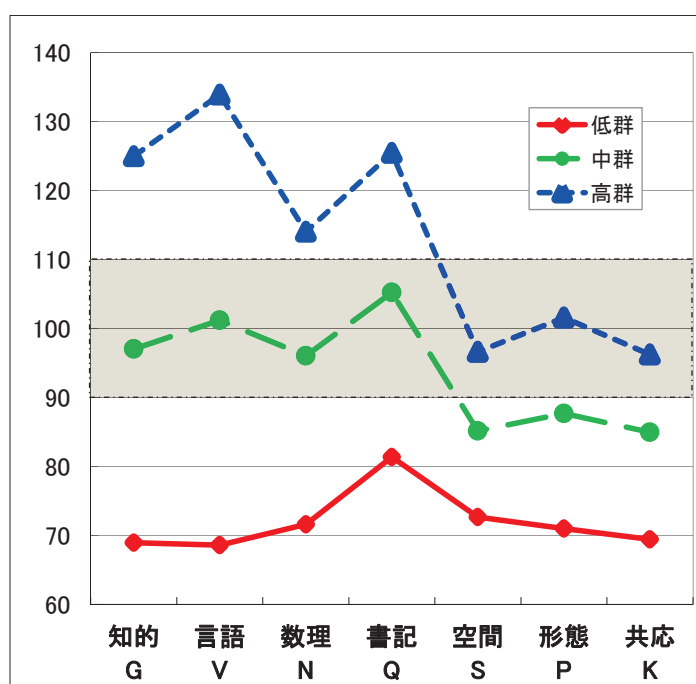
■言語能力 (V) の高さによる比較：GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
低群	70	68.96	68.60	71.63	81.39	72.69	71.00	69.46	45.00
中群	221	97.04	101.21	96.06	105.24	85.16	87.71	84.96	49.85
高群	70	125.00	133.93	114.03	125.46	96.61	101.60	96.24	59.87
群間有意差		**	**	**	**	**	**	**	**

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

言語能力 (V) の「高得点群」、「中得点群」、「低得点群」の 3 群は、他の適性能においても概ね同様の得点差が生じていることが明らかとなった。すなわち、言語能力 (V) の高得点群は、他の適性能においても有意に得点が高く、低得点群は同様に有意に得点が高い傾向がある。特に、左 4 つの認知機能に関する適性能群 (G,V,N,Q) ではその差異が著しく大きい傾向がみられる。

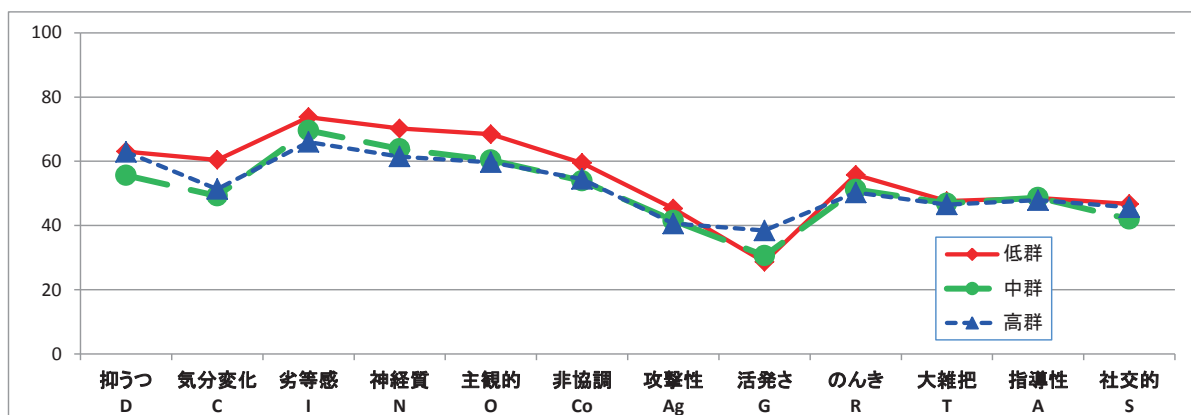
それに対し、右 3 つの空間判断力 (S)、形態知覚 (P)、運動共応 (K) については 3 群の点数差の開きがそれほど大きくはないが、それでも統計的に有意な差がみられている。



■言語能力（V）の高さによる比較：Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
低群	56	63.04	60.41	73.74	70.20	68.43	59.47
中群	174	55.64	49.21	69.60	63.85	60.37	53.87
高群	48	62.92	51.35	66.00	61.47	59.70	54.47
群間有意差		n.s.	*	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社交的 S
低群	45.28	28.65	55.78	47.58	48.58	46.68
中群	41.55	30.61	51.25	46.93	48.66	41.98
高群	40.61	38.46	50.29	46.53	47.88	45.65
群間有意差	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.



言語能力（V）の得点と YG 検査結果を比較したところ、3 群とも類似した傾向を示しており、特に大きな差は現れていない。

唯一、有意差がみられたのは気分変化（C）の得点のみであった。すなわち、低得点群は中得点群と比較して、有意に気分変化が大きい（例えば、感情的で、些細なことに驚きやすい等）という傾向が見られたことを意味する。逆に、中得点群は低得点群と比べて気分が安定的で、落ち着いていることを意味する。

■言語能力（V）の高さによる比較：相談特徴

<対人関係面>

	対人苦手・いじめ	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	78.6% (55)	21.4% (15)
中群	80.5% (178)	19.5% (43)
高群	81.4% (57)	18.6% (13)

有意差

n.s.

	対人不安・自信なし	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	91.4% (64)	8.6% (6)
中群	87.8% (194)	12.2% (27)
高群	92.9% (65)	7.1% (5)

有意差

n.s.

	対人不信	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	75.7% (53)	24.3% (17)
中群	82.8% (183)	17.2% (38)
高群	85.7% (60)	14.3% (10)

有意差

n.s.

続いて、相談特徴と言語能力（V）との関係について検討した。

まず、対人関係面のキーワード（対人苦手、対人不安、対人不信）については、言語能力（V）の高～低得点による違いは観察されなかった。すなわち、言語能力（V）の得点の良し悪しと、対人関係面に関する相談特徴の有無とは連動しないことが確認された。

次に、性格特徴面のキーワードとの関連性を検討した。「プライドの高さ」について、言語能力（V）低得点群では、中得点群と比べて言及や兆候が少ない傾向がみられた。

その他の性格特徴面のキーワードに関しては、言語能力（V）の得点の良し悪しとは特に関係しないことが明らかとなった。

<性格特徴面>

	他責的	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	85.7% (60)	14.3% (10)
中群	88.2% (195)	11.8% (26)
高群	91.4% (64)	8.6% (6)

有意差

n.s.

	不遇感・劣等感	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	64.3% (45)	35.7% (25)
中群	63.8% (141)	36.2% (80)
高群	68.6% (48)	31.4% (22)

有意差

n.s.

	衝動的	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	90.0% (63)	10.0% (7)
中群	91.0% (201)	9.0% (20)
高群	88.6% (62)	11.4% (8)

有意差

n.s.

	社会へ出ることへの不安	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	91.4% (64)	8.6% (6)
中群	93.2% (206)	6.8% (15)
高群	92.9% (65)	7.1% (5)

有意差

n.s.

	プライド高い	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	92.9% (65)	7.1% (5)
中群	80.5% (178)	19.5% (43)
高群	85.7% (60)	14.3% (10)

有意差

*

	思い込みが強い	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	72.9% (51)	27.1% (19)
中群	60.6% (134)	39.4% (87)
高群	68.6% (48)	31.4% (22)

有意差

n.s.

	社交性・社会性		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	20.0% (14)	71.4% (50)	8.6% (6)
中群	16.7% (37)	71.9% (159)	11.3% (25)
高群	14.3% (10)	68.6% (48)	17.1% (12)

有意差

n.s.

	温厚さ・おだやかさ・快活さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	5.7% (4)	81.4% (57)	12.9% (9)
中群	5.9% (13)	76.9% (170)	17.2% (38)
高群	7.1% (5)	75.7% (53)	17.1% (12)

有意差

n.s.

<行動・現状面>

●運動・体力、作業面

	体力・運動の得意さ	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	90.0% (63)	10.0% (7)
中群	95.0% (210)	5.0% (11)
高群	90.0% (63)	10.0% (7)

有意差

n.s.

	動きの遅さ	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	65.7% (46)	34.3% (24)
中群	85.5% (189)	14.5% (32)
高群	87.1% (61)	12.9% (9)

有意差

**

	手先器用、コツコツする作業の得意さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	10.0% (7)	87.1% (61)	2.9% (2)
中群	10.4% (23)	85.5% (189)	4.1% (9)
高群	11.4% (8)	82.9% (58)	5.7% (4)

有意差

n.s.

最後に、行動・現状面のキーワードとの関連性を検討した。3つのパート別に説明する。まず、「運動・体力・作業面」について検討すると、「動きの遅さ」に関しては、言語能力（V）の低得点群においては、中得点群と比較して言及や兆候が多く観察された。つまり、言語能力（V）が低得点の場合、相談特徴の中に動きの遅さを表すような言動やエピソードが数多くみられ、中得点群ではその頻度が減る傾向が示されていた。高得点群については低得点群との間に有意差は検出されなかったが、数値をみると概ね中得点群と類似した傾向を示している。

次に「言語、指示理解、情報処理」について検討したが、どの項目においても言語能力（V）の高中低の得点とは関連がみられなかった。例えば、言語能力（V）と一見関連の深そうな「言語理解に苦労する」、「TPO・場に合った言動の苦手さ」といった相談特徴についても、低得点群に言及・兆候ありの頻度がやや多くみられるものの、統計的有意差はなかった。

最後に、「精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況」について検討したが、どの相談特徴においても、言語能力（V）の高中低の得点と関連のあるものはみられなかった。

●言語・指示理解、情報処理

	言語理解に苦労	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	88.6% (62)	11.4% (8)
中群	91.4% (202)	8.6% (19)
高群	97.1% (68)	2.9% (2)

有意差

n.s.

	指示覚えられない等のミス	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	94.3% (66)	5.7% (4)
中群	91.0% (201)	9.0% (20)
高群	91.4% (64)	8.6% (6)

有意差

n.s.

	関心の範囲・視野が狭い	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	92.9% (65)	7.1% (5)
中群	88.2% (195)	11.8% (26)
高群	88.6% (62)	11.4% (8)

有意差

n.s.

	設問指示に従わない傾向	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	88.6% (62)	11.4% (8)
中群	94.1% (208)	5.9% (13)
高群	94.3% (66)	5.7% (4)

有意差

n.s.

	同時処理が苦手	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	92.9% (65)	7.1% (5)
中群	91.9% (203)	8.1% (18)
高群	87.1% (61)	12.9% (9)

有意差

n.s.

	段取りに苦労	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	92.9% (65)	7.1% (5)
中群	91.0% (201)	9.0% (20)
高群	94.3% (66)	5.7% (4)

有意差

n.s.

	凡ミス、うっかりミス	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	94.3% (66)	5.7% (4)
中群	91.4% (202)	8.6% (19)
高群	91.4% (64)	8.6% (6)

有意差

n.s.

	マニュアル等覚えられない	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	95.7% (67)	4.3% (3)
中群	97.3% (215)	2.7% (6)
高群	97.1% (68)	2.9% (2)

有意差

n.s.

	将来(職業選択等)に対し混乱状態	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	88.6% (62)	11.4% (8)
中群	80.5% (178)	19.5% (43)
高群	78.6% (55)	21.4% (15)

有意差

n.s.

	マイペースな態度に叱責を受ける	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	75.7% (53)	24.3% (17)
中群	75.6% (167)	24.4% (54)
高群	78.6% (55)	21.4% (15)

有意差

n.s.

	TPO・場にあった言動の苦手さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	12.9% (9)	62.9% (44)	24.3% (17)
中群	16.7% (37)	67.4% (149)	15.8% (35)
高群	22.9% (16)	58.6% (41)	18.6% (13)

有意差

n.s.

●精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況

	うつ、精神疾患等	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	74.3% (52)	25.7% (18)
中群	78.3% (173)	21.7% (48)
高群	78.6% (55)	21.4% (15)

有意差

n.s.

	不活発、不登校/ひきこもり経験	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	84.3% (59)	15.7% (11)
中群	90.0% (199)	10.0% (22)
高群	91.4% (64)	8.6% (6)

有意差

n.s.

	職を転々と・・・		
	「しない」	言及なし	「する」
低群	7.1% (5)	88.6% (62)	4.3% (3)
中群	12.7% (28)	80.5% (178)	6.8% (15)
高群	11.4% (8)	80.0% (56)	8.6% (6)

有意差

n.s.

2. 数理能力 (N)

概要

数理能力 (N) の得点 120 点以上を「高得点群」、80 点以下を「低得点群」、それ以外を「中得点群」として、適性検査結果 (GATB、YG) と相談特徴の違いを検討した。各群の人数と性別の内訳は、低得点群 110 名 (男性 66、女性 39、不明 5)、中得点群 198 名 (男性 109、女性 88、不明 1)、高得点群 53 名 (男性 33、女性 18、不明 2) であった。

適性検査結果の特徴について

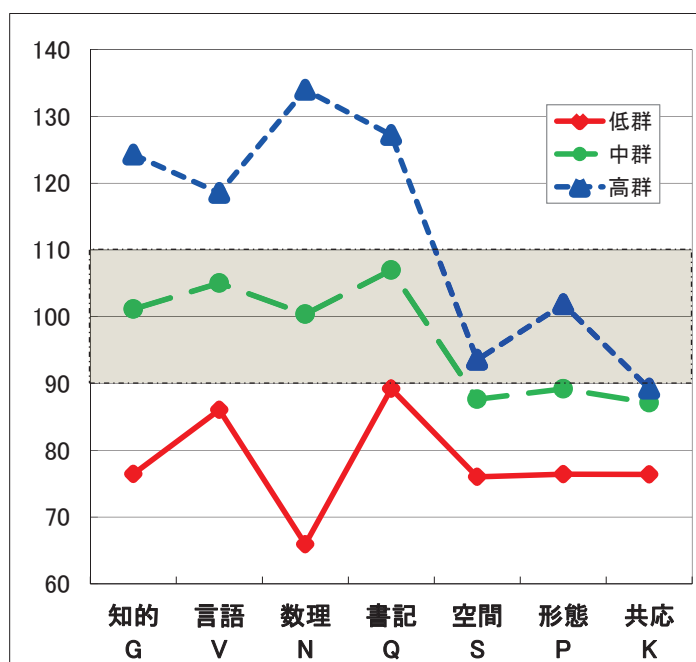
■数理能力 (N) の高さによる比較 : GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
低群	110	76.45	86.06	65.93	89.23	76.03	76.42	76.37	47.22
中群	198	101.15	105.03	100.37	106.96	87.63	89.20	87.11	49.39
高群	53	124.26	118.53	133.96	127.21	93.55	101.85	89.21	63.85
群間有意差		**	**	**	**	**	**	**	**

n.s.	有意差なし
†	p<.10の有意傾向
*	p<.05の有意差あり
**	p<.01の有意差あり

数理能力 (N) の「高得点群」、「中得点群」、「低得点群」の3群は、他の適性能においても概ね同様の得点差が生じていることが明らかとなった。すなわち、数理能力 (N) の高得点群は、他の適性能においても有意に得点が高く、低得点群は同様に有意に得点が高い傾向がある。特に、左4つの認知機能に関する適性能群 (G, V, N, Q) ではその差異が著しく大きい傾向がみられる。

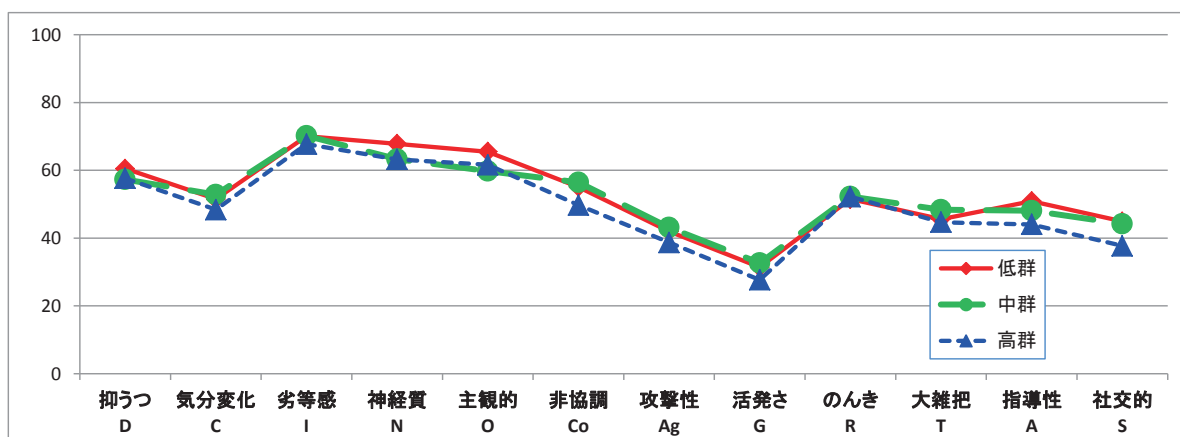
それに対し、右3つの空間判断力 (S)、形態知覚 (P)、運動共応 (K) については3群の点数差の開きがそれほど大きくはないが、それでも統計的に有意な差がみられている。



■ 数理能力（N）の高さによる比較：Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
低群	92	60.49	51.50	70.04	67.82	65.48	55.08
中群	150	57.29	52.86	70.19	63.28	59.78	56.42
高群	36	57.61	48.39	67.72	63.22	61.61	49.72
群間有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社交的 S
低群	41.99	31.39	51.51	45.59	50.91	44.92
中群	43.15	32.68	52.24	48.38	48.07	44.19
高群	38.68	27.68	52.20	44.66	44.03	37.69
群間有意差	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.



数理能力（N）の得点と YG 検査結果を比較したところ、3 群とも類似した傾向を示しており、YG 検査において有意差が検出された項目は一つもなかった。

■ 数理能力（N）の高さによる比較：相談特徴

< 対人関係面 >

	対人苦手・いじめ	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	79.1% (87)	20.9% (23)
中群	82.3% (163)	17.7% (35)
高群	75.5% (40)	24.5% (13)

有意差

n.s.

	対人不安・自信なし	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	90.9% (100)	9.1% (10)
中群	89.4% (177)	10.6% (21)
高群	86.8% (46)	13.2% (7)

有意差

n.s.

	対人不信	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	79.1% (87)	20.9% (23)
中群	81.3% (161)	18.7% (37)
高群	90.6% (48)	9.4% (5)

有意差

n.s.

続いて、相談特徴と数理能力（N）との関係について検討した。

まず、対人関係面のキーワード（対人苦手、対人不安、対人不信）については、数理能力（N）の高～低得点による違いは観察されなかった。すなわち、数理能力（N）の得点の良し悪しと、対人関係面に関する相談特徴の有無とは連動しないことが確認された。

次に、性格特徴面のキーワードとの関連性を検討した。ここでもほぼ全ての特徴において、数理能力（N）との関連性は示されなかった。唯一、弱い傾向（有意に近い傾向）が確認されたのは「他責的」という特徴に関してで、低得点群において、他人のせいにするような他責的言及や兆候が比較的多くみられる傾向があるが、それは必ずしも中・高得点群と比べて明確な有意差が出ているわけではない。

<性格特徴面>

	他責的	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	82.7% (91)	17.3% (19)
中群	91.4% (181)	8.6% (17)
高群	88.7% (47)	11.3% (6)

有意差

†

	不遇感・劣等感	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	59.1% (65)	40.9% (45)
中群	67.7% (134)	32.3% (64)
高群	66.0% (35)	34.0% (18)

有意差

n.s.

	衝動的	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	89.1% (98)	10.9% (12)
中群	89.4% (177)	10.6% (21)
高群	96.2% (51)	3.8% (2)

有意差

n.s.

	社会へ出ることへの不安	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	90.9% (100)	9.1% (10)
中群	93.4% (185)	6.6% (13)
高群	94.3% (50)	5.7% (3)

有意差

n.s.

	プライド高い	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	87.3% (96)	12.7% (14)
中群	82.3% (163)	17.7% (35)
高群	83.0% (44)	17.0% (9)

有意差

n.s.

	思い込みが強い	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	64.5% (71)	35.5% (39)
中群	64.1% (127)	35.9% (71)
高群	66.0% (35)	34.0% (18)

有意差

n.s.

	社交性・社会性		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	18.2% (20)	74.5% (82)	7.3% (8)
中群	18.2% (36)	65.2% (129)	16.7% (33)
高群	9.4% (5)	86.8% (46)	3.8% (2)

有意差

n.s.

	温厚さ・おだやかさ・快活さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	5.5% (6)	80.0% (88)	14.5% (16)
中群	6.6% (13)	76.3% (151)	17.2% (34)
高群	5.7% (3)	77.4% (41)	17.0% (9)

有意差

n.s.

＜行動・現状面＞

●運動・体力、作業面

	体力・運動の得意さ	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	94.5% (104)	5.5% (6)
中群	92.4% (183)	7.6% (15)
高群	92.5% (49)	7.5% (4)

有意差

n.s.

	動きの遅さ	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	71.8% (79)	28.2% (31)
中群	86.9% (172)	13.1% (26)
高群	84.9% (45)	15.1% (8)

有意差

**

	手先器用、コツコツする作業の得意さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	11.8% (13)	83.6% (92)	4.5% (5)
中群	8.6% (17)	86.9% (172)	4.5% (9)
高群	15.1% (8)	83.0% (44)	1.9% (1)

有意差

n.s.

最後に、行動・現状面のキーワードとの関連性を検討した。3つのパート別に説明する。

まず、「運動・体力・作業面」について検討すると、「動きの遅さ」に関して、数理能力（N）の低得点群は中得点群と比べて、言及や兆候が多く観察された。すなわち、数理能力（N）が低得点の場合、相談特徴の中に動きの遅さを表すような言動やエピソードが数多くみられ、中得点ではその頻度が減る傾向が示されていた。ただし、高得点群と低得点群のペアでは有意差は確認されていない。数理能力（N）と一見関連のなさそうな「動きの遅さ」に有意差がみられたことには意外性があるが、必ずしも数理能力の高低が「動きの遅さ」に直接影響を与えたとは考えにくい。むしろ、数理能力と連動する他の運動性の能力が、「動きの遅さ」という相談特徴に影響を与えたのではないかと考える方が自然であろう。

次に「言語、指示理解、情報処理」について検討した。低得点群では、「設問指示に従わない傾向」が、高得点群と比べて多くみられることが確認された。それ以外の相談特徴については、数理能力（N）の高中低との関連性はみられなかった。

最後に、「精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況」について検討した。大きな有意差はみられなかったが、「うつ、精神疾患等」の言及・兆候に関しては、各得点群の間に弱い傾向（有意に近い傾向）がみられた。数理能力（N）低得点群では言及・兆候が多くみられ、その次に多くみられたのは高得点群、最も少なかったのが中得点群であった。その原因について、数理能力の多寡がうつや精神疾患等の直接的原因になるとは考えにくく、あくまでも「見かけ上の関連性」と考えることが現実的な解釈と思われるが、現時点では弱い傾向であるため深入りした解釈は避けるべきかと思われる。

●言語・指示理解、情報処理

	言語理解に苦労	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	90.0% (99)	10.0% (11)
中群	92.9% (184)	7.1% (14)
高群	92.5% (49)	7.5% (4)

有意差

n.s.

	指示覚えられない等のミス	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	93.6% (103)	6.4% (7)
中群	91.9% (182)	8.1% (16)
高群	86.8% (46)	13.2% (7)

有意差

n.s.

	関心の範囲・視野が狭い	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	88.2% (97)	11.8% (13)
中群	88.9% (176)	11.1% (22)
高群	92.5% (49)	7.5% (4)

有意差

n.s.

	設問指示に従わない傾向	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	88.2% (97)	11.8% (13)
中群	93.9% (186)	6.1% (12)
高群	100.0% (53)	0.0% (0)

有意差

*

	同時処理が苦手	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	94.5% (104)	5.5% (6)
中群	90.9% (180)	9.1% (18)
高群	84.9% (45)	15.1% (8)

有意差

n.s.

	段取りに苦労	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	92.7% (102)	7.3% (8)
中群	91.9% (182)	8.1% (16)
高群	90.6% (48)	9.4% (5)

有意差

n.s.

	凡ミス、うっかりミス	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	94.5% (104)	5.5% (6)
中群	89.9% (178)	10.1% (20)
高群	94.3% (50)	5.7% (3)

有意差

n.s.

	マニュアル等覚えられない	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	95.5% (105)	4.5% (5)
中群	97.5% (193)	2.5% (5)
高群	98.1% (52)	1.9% (1)

有意差

n.s.

	将来(職業選択等)に対し混乱状態	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	84.5% (93)	15.5% (17)
中群	79.8% (158)	20.2% (40)
高群	83.0% (44)	17.0% (9)

有意差

n.s.

	マイペースな態度に叱責を受ける	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	73.6% (81)	26.4% (29)
中群	77.8% (154)	22.2% (44)
高群	75.5% (40)	24.5% (13)

有意差

n.s.

	TPO・場にあった言動の苦手さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	14.5% (16)	68.2% (75)	17.3% (19)
中群	18.2% (36)	63.1% (125)	18.7% (37)
高群	18.9% (10)	64.2% (34)	17.0% (9)

有意差

n.s.

●精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況

	うつ、精神疾患等	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	70.9% (78)	29.1% (32)
中群	81.8% (162)	18.2% (36)
高群	75.5% (40)	24.5% (13)

有意差

†

	不活発、不登校/ひきこもり経験	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	89.1% (98)	10.9% (12)
中群	87.4% (173)	12.6% (25)
高群	96.2% (51)	3.8% (2)

有意差

n.s.

	職を転々と・・・		
	「しない」	言及なし	「する」
低群	11.8% (13)	83.6% (92)	4.5% (5)
中群	11.6% (23)	80.8% (160)	7.6% (15)
高群	9.4% (5)	83.0% (44)	7.5% (4)

有意差

n.s.

3. 書記的知覚 (Q)

概要

書記的知覚 (Q) の得点 120 点以上を「高得点群」、80 点以下を「低得点群」、それ以外を「中得点群」として、適性検査結果 (GATB、YG) と相談特徴の違いを検討した。各群の人数と性別の内訳は、低得点群 58 名 (男性 43、女性 13、不明 2)、中得点群 212 名 (男性 117、女性 91、不明 4)、高得点群 91 名 (男性 48、女性 41、不明 2) であった。

適性検査結果の特徴について

■ 書記的知覚 (Q) の高さによる比較 : GATB 平均値

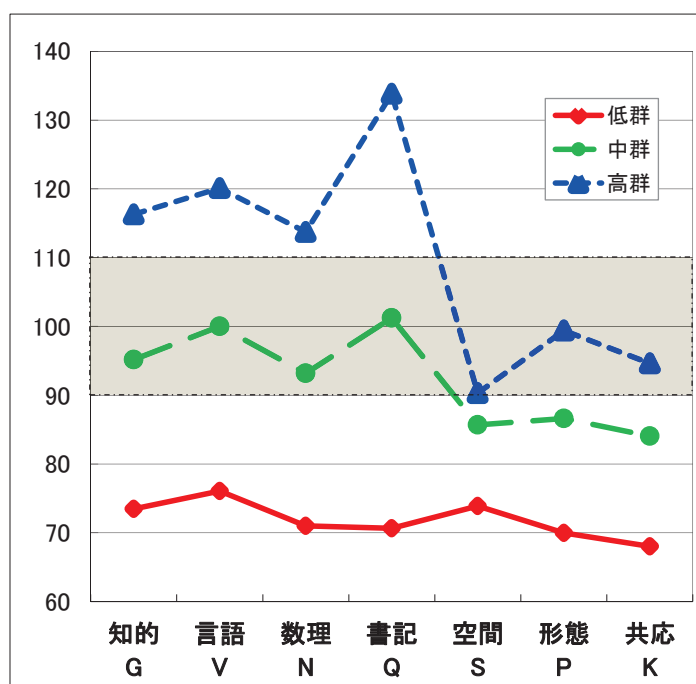
	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
低群	58	73.48	76.07	71.00	70.67	73.90	69.98	68.03	45.34
中群	212	95.18	100.02	93.19	101.23	85.70	86.61	84.05	47.32
高群	91	116.29	120.09	113.74	133.80	90.30	99.40	94.64	62.58

群間有意差

** ** * ** ** ** **

n.s.	有意差なし
†	p<.10の有意傾向
*	p<.05の有意差あり
**	p<.01の有意差あり

書記的知覚 (Q) の「高得点群」、「中得点群」、「低得点群」の3群は、他の適性能においても概ね同様の得点差が生じていることが明らかとなった。すなわち、書記的知覚 (Q) の高得点群は、他の適性能においても有意に得点が高く、低得点群は同様に有意に得点が低い傾向がある。特に、左4つの認知機能に関する適性能群 (G, V, N, Q) ではその差異が著しく大きい傾向がみ



られる。それに対し、右3つの空間判断力 (S)、形態知覚 (P)、運動共応 (K) については3群の点数差の開きがそれほど大きくはないが、それでも統計的に有意な差がみられている。

■ 書記的知覚 (Q) の高さによる比較 : Y-G 性格検査平均値

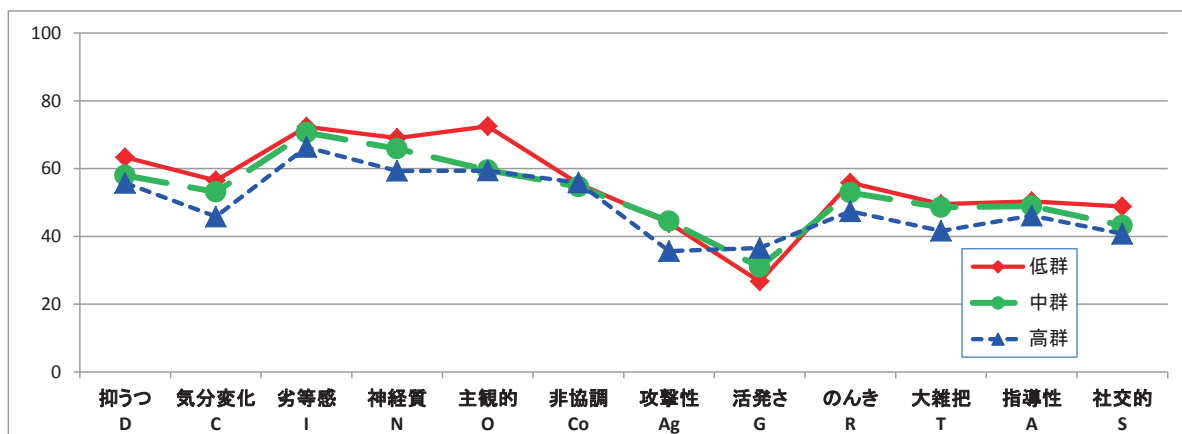
	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
低群	50	63.34	56.49	72.37	69.02	72.50	55.52
中群	157	58.01	53.09	70.60	65.84	59.58	54.67
高群	71	55.73	45.83	66.35	59.34	59.39	55.86

群間有意差

n.s. † n.s. n.s. * n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社交的 S
低群	43.94	26.68	55.84	49.51	50.33	48.80
中群	44.45	30.94	52.93	48.61	48.96	43.23
高群	35.64	36.56	47.39	41.61	46.12	40.74

群間有意差 n.s. n.s. n.s. n.s. n.s. n.s.



書記的知覚 (Q) の得点と YG 検査結果を比較したところ、3 群とも類似した傾向を示していた。

有意差がみられたのは主観的 (O) の得点であった。すなわち、低得点群は中・高得点群と比較して、主観的な思考に支配される傾向 (例えば、空想が多かったり、過敏な性質がある等) が見られたことを意味する。逆に、中・高得点群では低得点群と比べて客観的、現実的に物事を考える傾向があることを意味する。気分変化 (C) についても弱い傾向 (有意に近い傾向) はみられており、特に高得点群では気分が安定的、理性的な傾向として現れている。

■ 書記的知覚 (Q) の高さによる比較：相談特徴

< 対人関係面 >

	対人苦手・いじめ	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	79.3% (46)	20.7% (12)
中群	81.6% (173)	18.4% (39)
高群	78.0% (71)	22.0% (20)

有意差 n.s.

	対人不安・自信なし	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	91.4% (53)	8.6% (5)
中群	88.7% (188)	11.3% (24)
高群	90.1% (82)	9.9% (9)

有意差 n.s.

	対人不信	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	79.3% (46)	20.7% (12)
中群	81.1% (172)	18.9% (40)
高群	85.7% (78)	14.3% (13)

有意差 n.s.

続いて、相談特徴と書記的知覚（Q）との関係について検討した。

まず、対人関係面のキーワード（対人苦手、対人不安、対人不信）については、書記的知覚（Q）の高～低得点による違いは観察されなかった。すなわち、書記的知覚（Q）の得点の良し悪しと、対人関係面に関する相談特徴の有無とは連動しないことが確認された。

次に、性格特徴面のキーワードとの関連性を検討したが、書記的知覚（Q）の得点の良し悪しとは特に連動しないことが明らかとなった。

<性格特徴面>

	他責的	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	89.7% (52)	10.3% (6)
中群	86.8% (184)	13.2% (28)
高群	91.2% (83)	8.8% (8)

有意差

n.s.

	不遇感・劣等感	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	60.3% (35)	39.7% (23)
中群	66.0% (140)	34.0% (72)
高群	64.8% (59)	35.2% (32)

有意差

n.s.

	衝動的	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	86.2% (50)	13.8% (8)
中群	92.0% (195)	8.0% (17)
高群	89.0% (81)	11.0% (10)

有意差

n.s.

	社会へ出ることへの不安	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	91.4% (53)	8.6% (5)
中群	92.9% (197)	7.1% (15)
高群	93.4% (85)	6.6% (6)

有意差

n.s.

	プライド高い	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	89.7% (52)	10.3% (6)
中群	83.5% (177)	16.5% (35)
高群	81.3% (74)	18.7% (17)

有意差

n.s.

	思い込みが強い	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	63.8% (37)	36.2% (21)
中群	63.2% (134)	36.8% (78)
高群	68.1% (62)	31.9% (29)

有意差

n.s.

	社交性・社会性		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	19.0% (11)	72.4% (42)	8.6% (5)
中群	17.5% (37)	69.8% (148)	12.7% (27)
高群	14.3% (13)	73.6% (67)	12.1% (11)

有意差

n.s.

	温厚さ・おだやかさ・快活さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	5.2% (3)	79.3% (46)	15.5% (9)
中群	7.1% (15)	74.5% (158)	18.4% (39)
高群	4.4% (4)	83.5% (76)	12.1% (11)

有意差

n.s.

＜行動・現状面＞

●運動・体力、作業面

	体力・運動の得意さ	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	93.1% (54)	6.9% (4)
中群	92.9% (197)	7.1% (15)
高群	93.4% (85)	6.6% (6)

有意差

n.s.

	動きの遅さ	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	70.7% (41)	29.3% (17)
中群	82.1% (174)	17.9% (38)
高群	89.0% (81)	11.0% (10)

有意差

*

	手先器用、コツコツする作業の得意さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	22.4% (13)	72.4% (42)	5.2% (3)
中群	6.6% (14)	89.6% (190)	3.8% (8)
高群	12.1% (11)	83.5% (76)	4.4% (4)

有意差

*

最後に、行動・現状面のキーワードとの関連性を検討した。3つのパート別に説明する。

まず、「運動・体力・作業面」について検討すると、「動きの遅さ」に関しては、書記的知覚(Q)の得点が低くなるほど言及や兆候が多く観察された。つまり、書記的知覚(Q)が低得点の場合、相談特徴の中に動きの遅さを表すような言動やエピソードが数多くみられ、高得点ではその頻度が減る傾向が示されていた(ただし、中得点群と低得点群との間には有意差はみられていない)。また、「手先の器用さやコツコツする作業の得意さ」に関しても、低得点群は、中得点群と比べて「手先が不器用」であったり、「コツコツする作業が不得意」であることを示す言動やエピソードが多くみられる傾向にあった。ただし、高得点群については、低・中得点群との間の統計的に有意な違いはみられなかった。

次に「言語、指示理解、情報処理」について検討した。「設問指示に従わない傾向」について、低得点群は高得点群と比較すると、その言動や兆候が多くみられることが確認された(ただし、中得点群との関係については統計的な関連性はみられていない)。その他の情報処理系の特徴について、統計的に有意な傾向はみられていない。

最後に、「精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況」について検討したが、どの特徴も書記的知覚(Q)の得点との関連性はみられなかった。

●言語・指示理解、情報処理

	言語理解に苦勞	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	86.2% (50)	13.8% (8)
中群	92.0% (195)	8.0% (17)
高群	95.6% (87)	4.4% (4)

有意差

n.s.

	指示覚えられない等のミス	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	91.4% (53)	8.6% (5)
中群	92.0% (195)	8.0% (17)
高群	91.2% (83)	8.8% (8)

有意差

n.s.

	関心の範囲・視野が狭い	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	94.8% (55)	5.2% (3)
中群	86.8% (184)	13.2% (28)
高群	91.2% (83)	8.8% (8)

有意差

n.s.

	設問指示に従わない傾向	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	84.5% (49)	15.5% (9)
中群	93.4% (198)	6.6% (14)
高群	97.8% (89)	2.2% (2)

有意差

**

	同時処理が苦手	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	93.1% (54)	6.9% (4)
中群	90.6% (192)	9.4% (20)
高群	91.2% (83)	8.8% (8)

有意差

n.s.

	段取りに苦勞	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	91.4% (53)	8.6% (5)
中群	92.0% (195)	8.0% (17)
高群	92.3% (84)	7.7% (7)

有意差

n.s.

	凡ミス、うっかりミス	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	86.2% (50)	13.8% (8)
中群	92.0% (195)	8.0% (17)
高群	95.6% (87)	4.4% (4)

有意差

n.s.

	マニュアル等覚えられない	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	98.3% (57)	1.7% (1)
中群	95.8% (203)	4.2% (9)
高群	98.9% (90)	1.1% (1)

有意差

n.s.

	将来(職業選択等)に対し混乱状態	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	87.9% (51)	12.1% (7)
中群	81.6% (173)	18.4% (39)
高群	78.0% (71)	22.0% (20)

有意差

n.s.

	マイペースな態度に叱責を受ける	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	67.2% (39)	32.8% (19)
中群	77.4% (164)	22.6% (48)
高群	79.1% (72)	20.9% (19)

有意差

n.s.

	TPO・場にあった言動の苦手さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	12.1% (7)	62.1% (36)	25.9% (15)
中群	15.6% (33)	68.4% (145)	16.0% (34)
高群	24.2% (22)	58.2% (53)	17.6% (16)

有意差

n.s.

●精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況

	うつ、精神疾患等	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	67.2% (39)	32.8% (19)
中群	80.7% (171)	19.3% (41)
高群	76.9% (70)	23.1% (21)

有意差

†

	不活発、不登校/ひきこもり経験	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	84.5% (49)	15.5% (9)
中群	90.6% (192)	9.4% (20)
高群	89.0% (81)	11.0% (10)

有意差

n.s.

	職を転々と・・・		
	「しない」	言及なし	「する」
低群	5.2% (3)	86.2% (50)	8.6% (5)
中群	12.7% (27)	83.0% (176)	4.2% (9)
高群	12.1% (11)	76.9% (70)	11.0% (10)

有意差

n.s.

4. 空間判断力 (S)

概要

空間判断力 (S) の得点 120 点以上を「高得点群」、80 点以下を「低得点群」、それ以外を「中得点群」として、適性検査結果 (GATB、YG) と相談特徴の違いを検討した。各群の人数と性別の内訳は、低得点群 144 名 (男性 79、女性 61、不明 4)、中得点群 199 名 (男性 117、女性 79、不明 3)、高得点群 18 名 (男性 12、女性 5、不明 1) であった。

適性検査結果の特徴について

■空間判断力 (S) の高さによる比較 : GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
低群	144	83.29	95.13	86.45	99.74	63.52	75.56	81.02	54.68
中群	199	104.49	104.41	99.74	106.46	96.81	93.28	86.65	47.22
高群	18	124.17	114.89	107.11	121.56	125.56	112.33	81.44	60.33

群間有意差

**

**

**

**

**

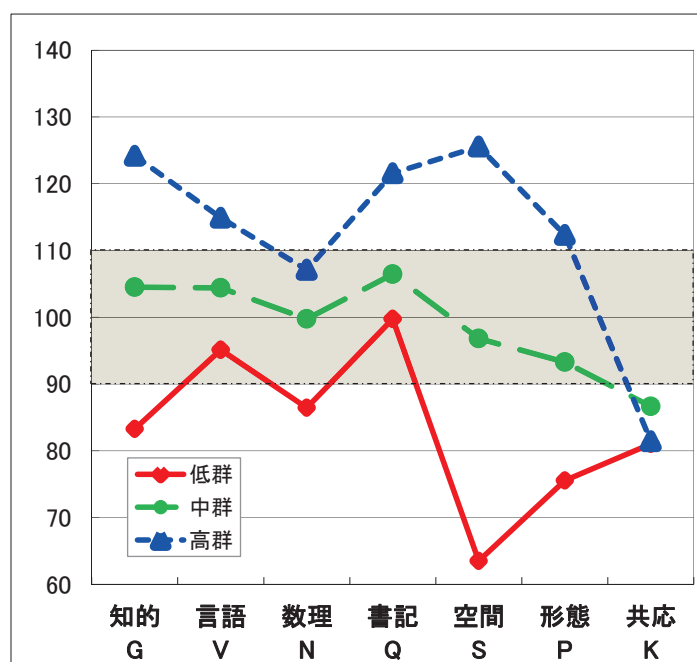
**

†

**

n.s.	有意差なし
†	p<.10の有意傾向
*	p<.05の有意差あり
**	p<.01の有意差あり

空間判断力 (S) の「高得点群」、「中得点群」、「低得点群」の3群は、運動共応 (K) を除き、他の適性能においても概ね同様の得点差が生じていることが明らかとなった。特に、認知機能群 (G, V, N, Q) よりも、同じ知覚機能群の一つである形態知覚 (P) と類似して、得点差が大きく広がっている傾向にある。運動共応 (K) については例外で、中得点群と高得点群の位置が逆転しており、弱い傾向 (有意に近い傾向) が検出されている。



■空間判断力 (S) の高さによる比較 : Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
低群	114	59.12	52.86	71.26	68.09	61.56	54.37
中群	155	58.89	51.67	69.33	63.05	62.44	56.40
高群	12	45.08	44.25	62.08	57.36	58.33	46.96

群間有意差

n.s.

n.s.

n.s.

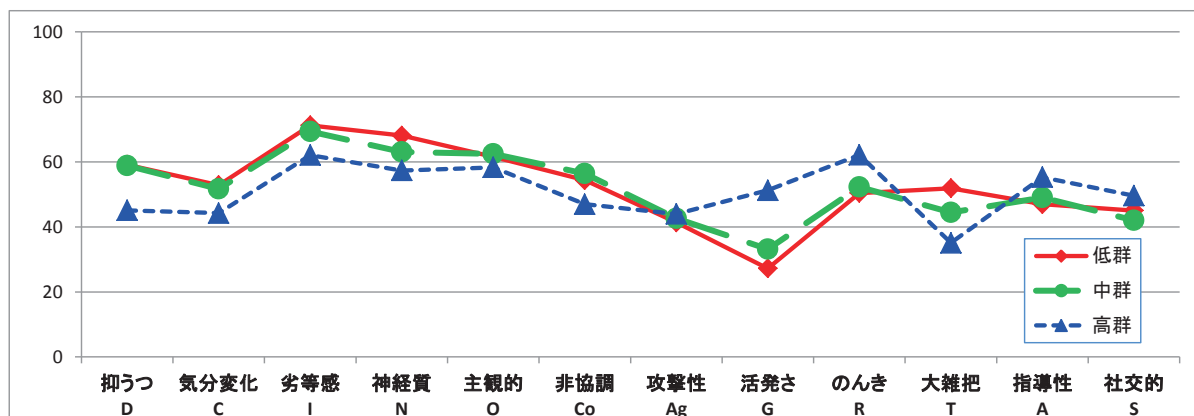
n.s.

n.s.

n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社交的 S
低群	41.38	27.22	50.41	51.88	46.98	45.03
中群	42.58	33.17	52.31	44.45	49.05	42.02
高群	44.00	51.25	62.15	35.08	55.31	49.62

群間有意差 n.s. ** n.s. * n.s. n.s.



空間判断力 (S) の得点と YG 検査結果を比較したところ、活発さ (G) において、低得点群と高得点群との間に有意差がみられ、低得点群では非活発で消極的な性質が、高得点群ではテキパキとして自信に満ちた傾向がみられた。同様に、大雑把 (T) についても群間の有意差が検出されたが、どの群とどの群との間に有意差があるのかについては検出されなかった。ただ、傾向をみると、低得点群では大雑把で楽天的な考え方を持つ性質、高得点群では思慮深く、考え込む性質が示されている。なお、本研究のサンプルでは、空間判断力 (S) の高得点者が 12 人分しか観測されていないことにも十分配慮する必要があり、今後、高得点者が多く観察されることにより、統計的有意差の傾向が変わる可能性もあり得る。

■空間判断力 (S) の高さによる比較：相談特徴

<対人関係面>

	対人苦手・いじめ	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	81.9% (118)	18.1% (26)
中群	77.9% (155)	22.1% (44)
高群	94.4% (17)	5.6% (1)

有意差 n.s.

	対人不安・自信なし	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	89.6% (129)	10.4% (15)
中群	89.4% (178)	10.6% (21)
高群	88.9% (16)	11.1% (2)

有意差 n.s.

	対人不信	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	83.3% (120)	16.7% (24)
中群	79.9% (159)	20.1% (40)
高群	94.4% (17)	5.6% (1)

有意差 n.s.

続いて、相談特徴と空間判断力（S）との関係について検討した。

まず、対人関係面のキーワード（対人苦手、対人不安、対人不信）については、空間判断力（S）の高～低得点による違いは観察されなかった。すなわち、空間判断力（S）の得点の良し悪しと、対人関係面に関する相談特徴の有無とは連動しないことが確認された。

次に、性格特徴面のキーワードとの関連性を検討したが、空間判断力（S）の得点の良し悪しとは特に関係しないことが明らかとなった。

<性格特徴面>

	他責的	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	88.9% (128)	11.1% (16)
中群	87.4% (174)	12.6% (25)
高群	94.4% (17)	5.6% (1)

有意差

n.s.

	不遇感・劣等感	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	66.0% (95)	34.0% (49)
中群	64.8% (129)	35.2% (70)
高群	55.6% (10)	44.4% (8)

有意差

n.s.

	衝動的	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	93.1% (134)	6.9% (10)
中群	87.9% (175)	12.1% (24)
高群	94.4% (17)	5.6% (1)

有意差

n.s.

	社会へ出ることへの不安	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	91.0% (131)	9.0% (13)
中群	94.5% (188)	5.5% (11)
高群	88.9% (16)	11.1% (2)

有意差

n.s.

	プライド高い	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	86.8% (125)	13.2% (19)
中群	82.4% (164)	17.6% (35)
高群	77.8% (14)	22.2% (4)

有意差

n.s.

	思い込みが強い	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	68.1% (98)	31.9% (46)
中群	63.3% (126)	36.7% (73)
高群	50.0% (9)	50.0% (9)

有意差

n.s.

	社交性・社会性		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	16.7% (24)	75.0% (108)	8.3% (12)
中群	17.1% (34)	69.8% (139)	13.1% (26)
高群	16.7% (3)	55.6% (10)	27.8% (5)

有意差

n.s.

	温厚さ・おだやかさ・快活さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	5.6% (8)	81.3% (117)	13.2% (19)
中群	7.0% (14)	73.9% (147)	19.1% (38)
高群	0.0% (0)	88.9% (16)	11.1% (2)

有意差

n.s.

＜行動・現状面＞

●運動・体力、作業面

	体力・運動の得意さ	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	94.4% (136)	5.6% (8)
中群	92.5% (184)	7.5% (15)
高群	88.9% (16)	11.1% (2)

有意差

n.s.

	動きの遅さ	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	77.1% (111)	22.9% (33)
中群	85.4% (170)	14.6% (29)
高群	83.3% (15)	16.7% (3)

有意差

n.s.

	手先器用、コツコツする作業の得意さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	12.5% (18)	84.0% (121)	3.5% (5)
中群	9.0% (18)	87.4% (174)	3.5% (7)
高群	11.1% (2)	72.2% (13)	16.7% (3)

有意差

n.s.

最後に、行動・現状面のキーワードとの関連性を検討した。3つのパート別に説明する。

まず、「運動・体力・作業面」については、どの特徴においても空間判断力（S）の得点の良し悪しとは特に関係しないことが明らかとなった。

次に「言語、指示理解、情報処理」について検討した。ほとんどの相談特徴において空間判断力（S）の得点と大きく関連のあるものはなかった。唯一、「関心の範囲・視野の狭さ」に関しては、中得点群においてその言動・兆候がやや多く、高得点群ではその言動・兆候が確認されないという傾向がみられたが、有意差までは検出されていない。

最後に、「精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況」について検討した。「不活発、不登校／ひきこもり経験」に関しては、空間判断力（S）の低得点群において言及・兆候が多くみられ、中得点群では少ないという統計的傾向が明らかになった。この点について、不活発さ等といった客観的状況と特定の能力との直接的で単純な因果関係を想定することは難しく、結論を出すには今後のケース収集によるさらなる精査が必要と考えられる。

●言語・指示理解、情報処理

	言語理解に苦勞	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	89.6% (129)	10.4% (15)
中群	93.0% (185)	7.0% (14)
高群	100.0% (18)	0.0% (0)

有意差

n.s.

	指示覚えられない等のミス	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	91.7% (132)	8.3% (12)
中群	91.0% (181)	9.0% (18)
高群	100.0% (18)	0.0% (0)

有意差

n.s.

	関心の範囲・視野が狭い	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	91.7% (132)	8.3% (12)
中群	86.4% (172)	13.6% (27)
高群	100.0% (18)	0.0% (0)

有意差

†

	設問指示に従わない傾向	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	91.0% (131)	9.0% (13)
中群	94.5% (188)	5.5% (11)
高群	94.4% (17)	5.6% (1)

有意差

n.s.

	同時処理が苦手	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	92.4% (133)	7.6% (11)
中群	89.4% (178)	10.6% (21)
高群	100.0% (18)	0.0% (0)

有意差

n.s.

	段取りに苦勞	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	91.7% (132)	8.3% (12)
中群	91.5% (182)	8.5% (17)
高群	100.0% (18)	0.0% (0)

有意差

n.s.

	凡ミス、うっかりミス	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	93.1% (134)	6.9% (10)
中群	92.0% (183)	8.0% (16)
高群	83.3% (15)	16.7% (3)

有意差

n.s.

	マニュアル等覚えられない	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	96.5% (139)	3.5% (5)
中群	97.0% (193)	3.0% (6)
高群	100.0% (18)	0.0% (0)

有意差

n.s.

	将来(職業選択等)に対し混乱状態	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	81.9% (118)	18.1% (26)
中群	82.9% (165)	17.1% (34)
高群	66.7% (12)	33.3% (6)

有意差

n.s.

	マイペースな態度に叱責を受ける	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	77.8% (112)	22.2% (32)
中群	73.4% (146)	26.6% (53)
高群	94.4% (17)	5.6% (1)

有意差

n.s.

	TPO・場にあった言動の苦手さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	13.2% (19)	68.8% (99)	18.1% (26)
中群	20.6% (41)	61.8% (123)	17.6% (35)
高群	11.1% (2)	66.7% (12)	22.2% (4)

有意差

n.s.

●精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況

	うつ、精神疾患等	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	75.7% (109)	24.3% (35)
中群	77.9% (155)	22.1% (44)
高群	88.9% (16)	11.1% (2)

有意差

n.s.

	不活発、不登校/ひきこもり経験	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	84.0% (121)	16.0% (23)
中群	93.0% (185)	7.0% (14)
高群	88.9% (16)	11.1% (2)

有意差

*

	職を転々と・・・		
	「しない」	言及なし	「する」
低群	9.0% (13)	83.3% (120)	7.6% (11)
中群	12.6% (25)	81.4% (162)	6.0% (12)
高群	16.7% (3)	77.8% (14)	5.6% (1)

有意差

n.s.

5. 形態知覚 (P)

概要

形態知覚 (P) の得点 120 点以上を「高得点群」、80 点以下を「低得点群」、それ以外を「中得点群」として、適性検査結果 (GATB、YG) と相談特徴の違いを検討した。各群の人数と性別の内訳は、低得点群 136 名 (男性 84、女性 47、不明 5)、中得点群 194 名 (男性 109、女性 83、不明 2)、高得点群 31 名 (男性 15、女性 15、不明 1) であった。

適性検査結果の特徴について

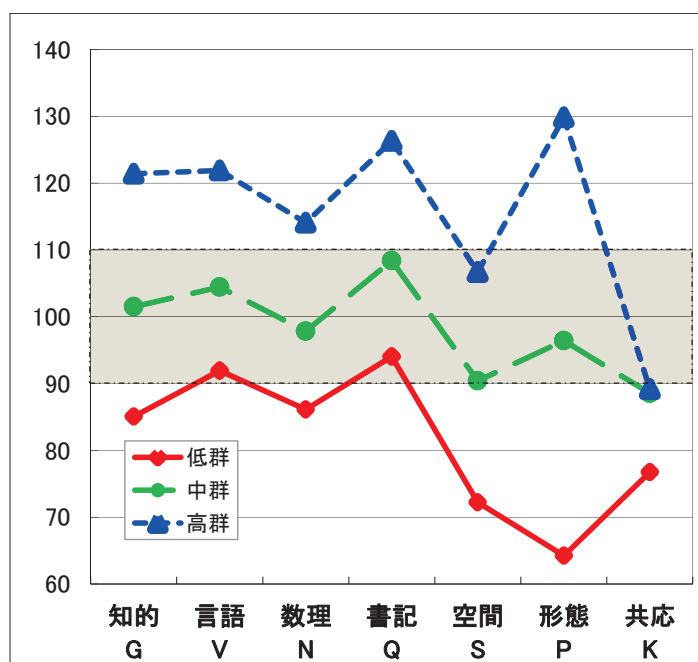
■形態知覚 (P) の高さによる比較 : GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
低群	136	85.06	91.93	86.10	94.04	72.23	64.24	76.74	51.64
中群	194	101.51	104.44	97.83	108.40	90.42	96.41	88.53	48.49
高群	31	121.39	121.90	114.06	126.32	106.68	129.84	89.16	62.13

群間有意差 ** ** ** ** ** ** ** **

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

形態知覚 (P) の「高得点群」、「中得点群」、「低得点群」の3群は、運動共応 (K) を除き、他の適性能においても概ね同様の得点差が生じていることが明らかとなった。特に、認知機能群 (G, V, N, Q) よりも、同じ知覚機能群の一つである空間判断力 (S) と類似して、得点差が大きく広がっている傾向にある。運動共応 (K) については例外で、高得点群と中得点群とがほぼ同様の値となっている。ただし、低得点群と中・高得点群との間には有意差が検出されている。

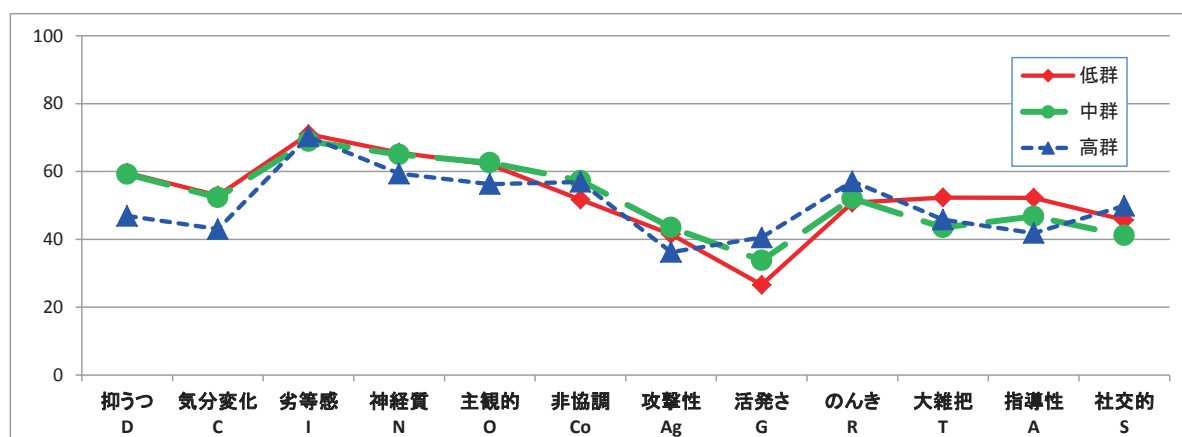


■形態知覚 (P) の高さによる比較 : Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
低群	107	59.60	52.93	70.96	65.54	62.10	51.72
中群	149	59.21	52.36	68.92	65.02	62.60	57.30
高群	22	46.91	43.00	70.30	59.36	56.27	56.91

群間有意差 n.s. n.s. n.s. n.s. n.s. n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社交的 S
低群	41.49	26.56	50.78	52.31	52.26	45.69
中群	43.47	33.79	52.04	43.48	46.77	41.12
高群	36.25	40.52	57.08	45.79	41.83	49.87
群間有意差	n.s.	*	n.s.	†	n.s.	n.s.



形態知覚 (P) の得点と YG 検査結果を比較したところ、活発さ (G) において各群の間に有意な差があることは確認されたが、どのペアについての有意差があるかまでは確認されなかった。傾向をみると、低得点群では非活発で消極的な性質が、高得点群ではテキパキとして自信に満ちた傾向が現れている。同様に、大雑把 (T) についても各群間に有意な差が現れる傾向が確認されており、傾向をみると、低得点群では大雑把で楽天的な考え方を持つ性質、中・高得点群では思慮深く、考え込む性質が示されている。以上の傾向は、空間判断力 (S) と YG 検査との関連性と非常に類似している点が特徴的である。

■形態知覚 (P) の高さによる比較：相談特徴

<対人関係面>

	対人苦手・いじめ	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	81.6% (111)	18.4% (25)
中群	79.4% (154)	20.6% (40)
高群	80.6% (25)	19.4% (6)

有意差

n.s.

	対人不安・自信なし	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	89.7% (122)	10.3% (14)
中群	89.7% (174)	10.3% (20)
高群	87.1% (27)	12.9% (4)

有意差

n.s.

	対人不信	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	82.4% (112)	17.6% (24)
中群	79.9% (155)	20.1% (39)
高群	93.5% (29)	6.5% (2)

有意差

n.s.

続いて、相談特徴と形態知覚（P）との関係について検討した。

まず、対人関係面のキーワード（対人苦手、対人不安、対人不信）については、形態知覚（P）の高～低得点による違いは観察されなかった。すなわち、形態知覚（P）の得点の良し悪しと、対人関係面に関する相談特徴の有無とは連動しないことが確認された。

次に、性格特徴面のキーワードとの関連性を検討した。ほとんどの特徴に関して、形態知覚（P）との関連性はみられなかった。例外的に、「プライドの高さ」について、各群間に差があるとする弱い傾向（有意に近い傾向）が確認されているが、個別のペアでの有意差までは検出されていない。中得点群ではプライドの高さに関する言及や兆候が比較的多く観測されているが、その原因が何かまでは、現時点で結論づけることは難しいと考える。

<性格特徴面>

	他責的	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	86.0% (117)	14.0% (19)
中群	89.2% (173)	10.8% (21)
高群	93.5% (29)	6.5% (2)

有意差

n.s.

	不遇感・劣等感	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	64.0% (87)	36.0% (49)
中群	64.4% (125)	35.6% (69)
高群	71.0% (22)	29.0% (9)

有意差

n.s.

	衝動的	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	91.9% (125)	8.1% (11)
中群	88.1% (171)	11.9% (23)
高群	96.8% (30)	3.2% (1)

有意差

n.s.

	社会へ出ることへの不安	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	91.9% (125)	8.1% (11)
中群	94.3% (183)	5.7% (11)
高群	87.1% (27)	12.9% (4)

有意差

n.s.

	プライド高い	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	89.7% (122)	10.3% (14)
中群	79.9% (155)	20.1% (39)
高群	83.9% (26)	16.1% (5)

有意差

†

	思い込みが強い	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	64.7% (88)	35.3% (48)
中群	63.4% (123)	36.6% (71)
高群	71.0% (22)	29.0% (9)

有意差

n.s.

	社交性・社会性		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	15.4% (21)	73.5% (100)	11.0% (15)
中群	18.0% (35)	69.1% (134)	12.9% (25)
高群	16.1% (5)	74.2% (23)	9.7% (3)

有意差

n.s.

	温厚さ・おだやかさ・快活さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	6.6% (9)	77.2% (105)	16.2% (22)
中群	5.2% (10)	78.4% (152)	16.5% (32)
高群	9.7% (3)	74.2% (23)	16.1% (5)

有意差

n.s.

＜行動・現状面＞

●運動・体力、作業面

	体力・運動の得意さ	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	93.4% (127)	6.6% (9)
中群	92.3% (179)	7.7% (15)
高群	96.8% (30)	3.2% (1)

有意差

n.s.

	動きの遅さ	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	77.9% (106)	22.1% (30)
中群	85.6% (166)	14.4% (28)
高群	77.4% (24)	22.6% (7)

有意差

n.s.

	手先器用、コツコツする作業の得意さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	16.2% (22)	81.6% (111)	2.2% (3)
中群	7.7% (15)	87.6% (170)	4.6% (9)
高群	3.2% (1)	87.1% (27)	9.7% (3)

有意差

**

最後に、行動・現状面のキーワードとの関連性を検討した。3つのパート別に説明する。

まず、「運動・体力・作業面」について検討すると、「手先の器用さやコツコツする作業の得意さ」に関して、形態知覚（P）の低得点群は、中・高得点群と比べて「手先が不器用」であったり、「コツコツする作業が不得意」であることを示す言動やエピソードが多くみられる傾向にあった。

次に「言語、指示理解、情報処理」について検討したが、特に形態知覚（P）の得点と関連性のある相談特徴は検出されなかった。

最後に、「精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況」についても検討したが、形態知覚（P）の得点の多寡と関連性のある相談特徴はみられなかった。

●言語・指示理解、情報処理

	言語理解に苦労	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	88.2% (120)	11.8% (16)
中群	93.8% (182)	6.2% (12)
高群	96.8% (30)	3.2% (1)

有意差

n.s.

	指示覚えられない等のミス	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	91.9% (125)	8.1% (11)
中群	92.8% (180)	7.2% (14)
高群	83.9% (26)	16.1% (5)

有意差

n.s.

	関心の範囲・視野が狭い	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	89.7% (122)	10.3% (14)
中群	87.6% (170)	12.4% (24)
高群	96.8% (30)	3.2% (1)

有意差

n.s.

	設問指示に従わない傾向	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	91.2% (124)	8.8% (12)
中群	94.3% (183)	5.7% (11)
高群	93.5% (29)	6.5% (2)

有意差

n.s.

	同時処理が苦手	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	91.2% (124)	8.8% (12)
中群	91.2% (177)	8.8% (17)
高群	90.3% (28)	9.7% (3)

有意差

n.s.

	段取りに苦労	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	90.4% (123)	9.6% (13)
中群	92.8% (180)	7.2% (14)
高群	93.5% (29)	6.5% (2)

有意差

n.s.

	凡ミス、うっかりミス	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	93.4% (127)	6.6% (9)
中群	90.7% (176)	9.3% (18)
高群	93.5% (29)	6.5% (2)

有意差

n.s.

	マニュアル等覚えられない	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	95.6% (130)	4.4% (6)
中群	97.9% (190)	2.1% (4)
高群	96.8% (30)	3.2% (1)

有意差

n.s.

	将来(職業選択等)に対し混乱状態	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	81.6% (111)	18.4% (25)
中群	82.0% (159)	18.0% (35)
高群	80.6% (25)	19.4% (6)

有意差

n.s.

	マイペースな態度に叱責を受ける	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	72.8% (99)	27.2% (37)
中群	77.3% (150)	22.7% (44)
高群	83.9% (26)	16.1% (5)

有意差

n.s.

	TPO・場にあった言動の苦手さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	14.7% (20)	66.9% (91)	18.4% (25)
中群	19.6% (38)	61.3% (119)	19.1% (37)
高群	12.9% (4)	77.4% (24)	9.7% (3)

有意差

n.s.

●精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況

	うつ、精神疾患等	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	75.0% (102)	25.0% (34)
中群	78.4% (152)	21.6% (42)
高群	83.9% (26)	16.1% (5)

有意差

n.s.

	不活発、不登校/ひきこもり経験	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	90.4% (123)	9.6% (13)
中群	89.2% (173)	10.8% (21)
高群	83.9% (26)	16.1% (5)

有意差

n.s.

	職を転々と...		
	「しない」	言及なし	「する」
低群	8.8% (12)	83.8% (114)	7.4% (10)
中群	12.4% (24)	82.0% (159)	5.7% (11)
高群	16.1% (5)	74.2% (23)	9.7% (3)

有意差

n.s.

6. 運動共応 (K)

概要

運動共応 (K) の得点 120 点以上を「高得点群」、80 点以下を「低得点群」、それ以外を「中得点群」として、適性検査結果 (GATB、YG) と相談特徴の違いを検討した。各群の人数と性別の内訳は、低得点群 162 名 (男性 106、女性 52、不明 4)、中得点群 171 名 (男性 86、女性 81、不明 4)、高得点群 28 名 (男性 16、女性 12) であった。

適性検査結果の特徴について

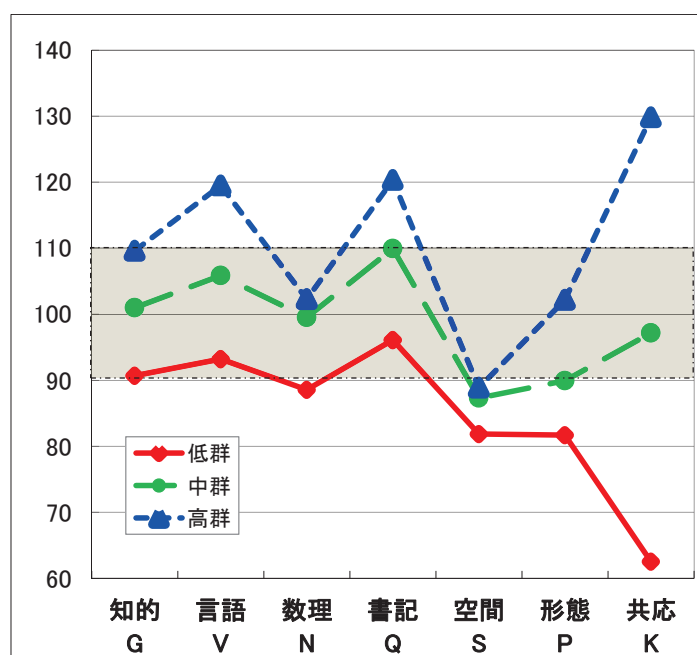
■運動共応 (K) の高さによる比較：GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
低群	162	90.67	93.19	88.54	96.09	81.83	81.67	62.52	53.59
中群	171	100.97	105.86	99.52	109.94	87.29	89.90	97.15	47.08
高群	28	109.61	119.50	102.25	120.32	88.86	102.18	129.82	58.04
群間有意差		**	**	**	**	†	**	**	**

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

運動共応 (K) の「高得点群」、「中得点群」、「低得点群」の 3 群は、他の適性能においても概ね同様の得点差が生じていることが明らかとなった。例えば、運動共応 (K) の低得点群は、言語能力 (V) や数理能力 (N) 等においても、他群よりも得点が有意に低い。つまり、運動共応の低得点者は、他の適性能においても概ね低得点者であることが多い。ただし、空間判断力 (S)

に関しては、3 群における違いが他の適性能と比べて大幅に小さく、統計的に有意な差としては検出されていない。

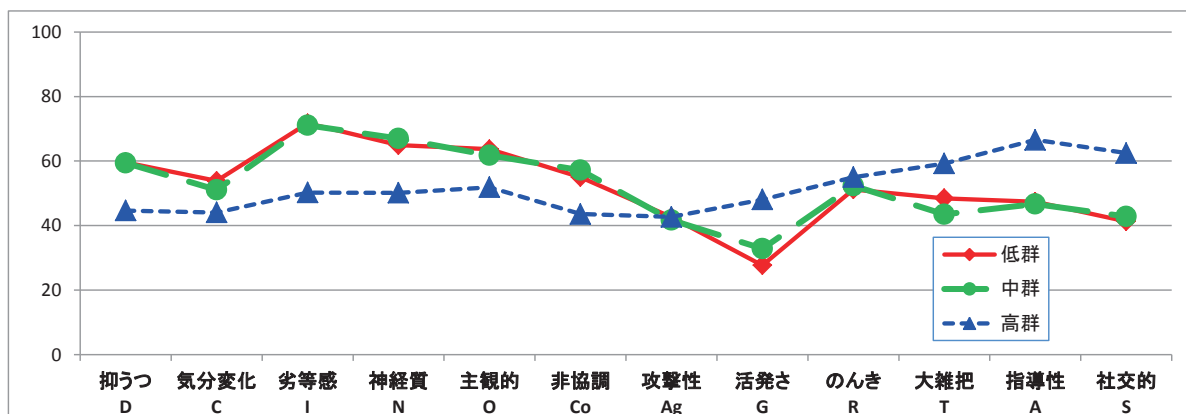


■運動共応 (K) の高さによる比較：Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
低群	130	59.61	53.86	71.71	64.95	63.68	54.99
中群	127	59.41	51.06	71.06	66.98	61.75	57.15
高群	21	44.67	44.05	50.24	50.14	51.86	43.57
群間有意差		n.s.	n.s.	**	*	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社交的 S
低群	42.60	27.70	51.19	48.45	47.36	41.31
中群	41.67	32.86	52.34	43.48	46.70	42.78
高群	42.67	48.10	55.00	59.24	66.57	62.48

群間有意差 n.s. ** n.s. † ** *



運動共応 (K) の得点と YG 検査結果を比較したところ、中得点群と低得点群は類似した傾向を示すが、高得点群は中・低得点群とは全く傾向が異なっていた。その背景として、運動共応 (K) の高得点者が 21 人分しか観測されなかったことによる影響も十分考慮しなければならない。しかしながら、統計的有意差がみられたものを検討すると、高得点者は、中・低得点者と比べて、「劣等感が低く」、「神経質傾向が低く」、「活発さがあり」、「人の上に立つ指導性や社交性も高い」という傾向が見受けられた。

■運動共応 (K) の高さによる比較：相談特徴

<対人関係面>

	対人苦手・いじめ	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	79.6% (129)	20.4% (33)
中群	80.1% (137)	19.9% (34)
高群	85.7% (24)	14.3% (4)

有意差 n.s.

	対人不安・自信なし	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	88.9% (144)	11.1% (18)
中群	88.3% (151)	11.7% (20)
高群	100.0% (28)	0.0% (0)

有意差 n.s.

	対人不信	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	82.7% (134)	17.3% (28)
中群	80.7% (138)	19.3% (33)
高群	85.7% (24)	14.3% (4)

有意差 n.s.

続いて、相談特徴と運動共応（K）との関係について検討した。

まず、対人関係面のキーワード（対人苦手、対人不安、対人不信）については、運動共応（K）の高～低得点による違いは観察されなかった。すなわち、運動共応（K）の得点の良し悪しと、対人関係面に関する相談特徴の有無とは連動しないことが確認された。

次に、性格特徴面のキーワードとの関連性を検討した。「社交性・社会性」について、運動共応（K）低得点群では、「社会性・社交性あり」と判断された言及や兆候が、中・高得点群と比べて少ない傾向がみられた。また、統計的な有意差は確認できなかったが、弱い傾向（有意に近い傾向）がみられたものとして、「社会へ出ることの不安」に関する言及や兆候が、低得点群では中・高得点群よりも多くみられた。さらに、「思い込みの強さ」の言及・兆候に関しても、高得点群は低・中得点群と比較して少ない傾向にあった。

その他の性格特徴面のキーワードに関しては、運動共応（K）の得点の良し悪しとは特に関係しないことが明らかとなった。

<性格特徴面>

	他責的	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	89.5% (145)	10.5% (17)
中群	86.0% (147)	14.0% (24)
高群	96.4% (27)	3.6% (1)

有意差

n.s.

	不遇感・劣等感	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	66.0% (107)	34.0% (55)
中群	62.6% (107)	37.4% (64)
高群	71.4% (20)	28.6% (8)

有意差

n.s.

	衝動的	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	90.1% (146)	9.9% (16)
中群	90.6% (155)	9.4% (16)
高群	89.3% (25)	10.7% (3)

有意差

n.s.

	社会へ出ることへの不安	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	89.5% (145)	10.5% (17)
中群	94.7% (162)	5.3% (9)
高群	100.0% (28)	0.0% (0)

有意差

†

	プライド高い	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	87.0% (141)	13.0% (21)
中群	80.7% (138)	19.3% (33)
高群	85.7% (24)	14.3% (4)

有意差

n.s.

	思い込みが強い	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	66.7% (108)	33.3% (54)
中群	59.6% (102)	40.4% (69)
高群	82.1% (23)	17.9% (5)

有意差

†

	社交性・社会性		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	19.8% (32)	72.8% (118)	7.4% (12)
中群	15.2% (26)	70.2% (120)	14.6% (25)
高群	10.7% (3)	67.9% (19)	21.4% (6)

有意差 *

	温厚さ・おだやかさ・快活さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	4.9% (8)	79.0% (128)	16.0% (26)
中群	8.2% (14)	73.7% (126)	18.1% (31)
高群	0.0% (0)	92.9% (26)	7.1% (2)

有意差 n.s.

<行動・現状面>

●運動・体力、作業面

	体力・運動の得意さ	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	95.1% (154)	4.9% (8)
中群	91.8% (157)	8.2% (14)
高群	89.3% (25)	10.7% (3)

有意差 n.s.

	動きの遅さ	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	72.2% (117)	27.8% (45)
中群	88.9% (152)	11.1% (19)
高群	96.4% (27)	3.6% (1)

有意差 **

	手先器用、コツコツする作業の得意さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	15.4% (25)	81.5% (132)	3.1% (5)
中群	7.0% (12)	87.7% (150)	5.3% (9)
高群	3.6% (1)	92.9% (26)	3.6% (1)

有意差 *

最後に、行動・現状面のキーワードとの関連性を検討した。3つのパート別に説明する。

まず、「運動・体力・作業面」について検討すると、「動きの遅さ」に関しては、運動共応（K）の得点が低くなるほど言及や兆候が多く観察された。つまり、運動共応（K）が低得点の場合、相談特徴の中に動きの遅さを表すような言動やエピソードが数多くみられ、中・高得点であるほどその頻度が減る傾向が示されていた。また、「手先の器用さやコツコツする作業の得意さ」に関しても、低得点群は、中・高得点群と比べて「手先が不器用」であったり、「コツコツする作業が不得意」であることを示す言動やエピソードが多くみられる傾向にあった。

次に「言語、指示理解、情報処理」について検討した。低得点群は、「言語理解に苦勞する」エピソードが、中・高得点群と比べて多くみられた。「関心の範囲・視野の狭さ」に関する言及や兆候は、中得点群の方が低得点群と比べて多くみられた。一方で、高得点群は低・中得点群の中間的な値となっており、現時点の結果について解釈することは難しい。「同時処理の

「苦手さ」に関する言動や兆候も、中得点群だけが低・高得点群と異なる傾向を示しており、この点においても現時点での解釈は難しいと考える。

最後に、「精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況」について検討した。特筆すべきなのは、運動共応（K）が低得点になるほど、「うつ、精神疾患等」の言及・兆候が多くみられたことである。「不活発、不登校/ひきこもり経験」についても、運動共応（K）低得点群において兆候・言動が多くみられている。ただし、この結果は、本人の生来の運動共応（K）能力が低いからこうなったと解釈するよりも、逆に、うつや精神疾患等にかかったことで、本人の活動レベルが下がり、活発さが失われ、「一時的に」運動共応（K）の得点が下がってしまったことが原因ではないかと推察される。

●言語・指示理解、情報処理

	言語理解に苦労	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	88.3% (143)	11.7% (19)
中群	94.2% (161)	5.8% (10)
高群	100.0% (28)	0.0% (0)

有意差

*

	指示覚えられない等のミス	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	92.6% (150)	7.4% (12)
中群	90.1% (154)	9.9% (17)
高群	96.4% (27)	3.6% (1)

有意差

n.s.

	関心の範囲・視野が狭い	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	93.8% (152)	6.2% (10)
中群	84.8% (145)	15.2% (26)
高群	89.3% (25)	10.7% (3)

有意差

*

	設問指示に従わない傾向	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	92.6% (150)	7.4% (12)
中群	93.0% (159)	7.0% (12)
高群	96.4% (27)	3.6% (1)

有意差

n.s.

	同時処理が苦手	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	92.6% (150)	7.4% (12)
中群	88.3% (151)	11.7% (20)
高群	100.0% (28)	0.0% (0)

有意差

†

	段取りに苦労	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	89.5% (145)	10.5% (17)
中群	93.0% (159)	7.0% (12)
高群	100.0% (28)	0.0% (0)

有意差

n.s.

	凡ミス、うっかりミス	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	93.8% (152)	6.2% (10)
中群	90.1% (154)	9.9% (17)
高群	92.9% (26)	7.1% (2)

有意差

n.s.

	マニュアル等覚えられない	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	96.3% (156)	3.7% (6)
中群	97.1% (166)	2.9% (5)
高群	100.0% (28)	0.0% (0)

有意差

n.s.

	将来(職業選択等)に対し混乱状態	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	83.3% (135)	16.7% (27)
中群	78.9% (135)	21.1% (36)
高群	89.3% (25)	10.7% (3)

有意差

n.s.

	マイペースな態度に叱責を受ける	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	73.5% (119)	26.5% (43)
中群	77.2% (132)	22.8% (39)
高群	85.7% (24)	14.3% (4)

有意差

n.s.

	TPO・場にあった言動の苦手さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
低群	17.3% (28)	61.7% (100)	21.0% (34)
中群	17.0% (29)	67.8% (116)	15.2% (26)
高群	17.9% (5)	64.3% (18)	17.9% (5)

有意差

n.s.

●精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況

	うつ、精神疾患等	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	69.1% (112)	30.9% (50)
中群	82.5% (141)	17.5% (30)
高群	96.4% (27)	3.6% (1)

有意差

**

	不活発、不登校/ひきこもり経験	
	言及なし	言及・兆候あり
低群	84.0% (136)	16.0% (26)
中群	93.6% (160)	6.4% (11)
高群	92.9% (26)	7.1% (2)

有意差

*

	職を転々と・・・		
	「しない」	言及なし	「する」
低群	13.0% (21)	80.9% (131)	6.2% (10)
中群	9.4% (16)	82.5% (141)	8.2% (14)
高群	14.3% (4)	85.7% (24)	0.0% (0)

有意差

n.s.

(2) GATB 適性能プロフィールの個人内での相対的凹凸に関する検討

A：相対的凹凸の大きさに関する分析

<小括>

●本節では凹凸の大きさ（つまり、個人の適性能プロフィールの山と谷と深さ）に関する分析を行った。凹凸の大きさは、YG 検査や相談特徴との関連性があまり多くみられなかったが、本分析で確認できた結果は以下の点である。

●GATB プロフィールの相対的凹凸が大きい個人は、GATB で平均的に高得点をとる傾向があり、何らかの能力が突出して大きい一方で、突出して低い能力も併せ持つために、凹凸の大きさが広がっていることが明らかとなった。例えば、認知機能群（G, V, N, Q）で非常に高い得点をとっているのだが、知覚機能群（S, P）や運動機能群（K）で著しく低い得点があり、結果として凹凸が大きくなっているというのが典型的な事例である。このような傾向は、GATB 適性能得点の各群平均値のグラフにおいても明確に示されている。また凹凸が大きい個人についての相談特徴は明確には現れなかったが、YG 検査結果と総合して考察すると、気分変化が少なく沈着冷静で、安定的、協調的な性格であることが示されている。

●凹凸が小さい（なだらかな）個人は、凹凸の大きい個人と必ずしも真逆の傾向を示しているわけではないことも示された。凹凸がなだらかな個人は、凹凸の大きい個人と比べて GATB 適性能得点が全般に低い傾向がある一方で、性格面や相談特徴においては、関心や視野が狭いという報告も少なく、設問指示に従う傾向を示す等、社会において適応的な行動がみられた。

●一方で、その中間に位置する群（凹凸中群）は、神経質で非協調的な傾向、指示に従わない傾向等がみられる。この原因を推測することは難しいが、凹凸の極端に大きい個人、極端に小さい（なだらかな）個人を除くと、中群には多種多様な属性の個人が含まれており、適性能得点の相対的凹凸の大きさだけで明確な結論を得るような分析が難しいことを示しているのではないかと思われる。したがって、資料編（2）B のような、相対的にどの適性能が高いか（低い）かといった分析を別途行うことで、中群に含まれる多様な個人を適切に分析できるものと思われる。

(2) GATB 適性能プロフィールの個人内での相対的凹凸に関する検討

A : 相対的凹凸の大きさに関する分析

概要

GATB 適性能プロフィールでは、各個人の得意・不得意によって適性能得点による凹凸が描き出されるが、その最大値と最小値の差の凹凸が大きい個人もいれば、小さい（なだらかな）個人もいる。本分析では、この適性能得点の最大値と最小値の差（高低差）に着目し、それが 40 点以下の個人を「なだらか」群、60 点以上の個人を「凹凸大群」、その中間の得点（41 点以上 60 点未満）を持つ個人を「凹凸中群」とし、この 3 群について、適性検査結果（GATB、YG）と相談特徴との関係性を検討した。各群の人数と性別の内訳は、なだらか群 112 名（男性 59、女性 51、不明 2）、凹凸中群 147 名（男性 100、女性 46、不明 1）、凹凸大群 102 名（男性 49、女性 50、不明 3）であった。

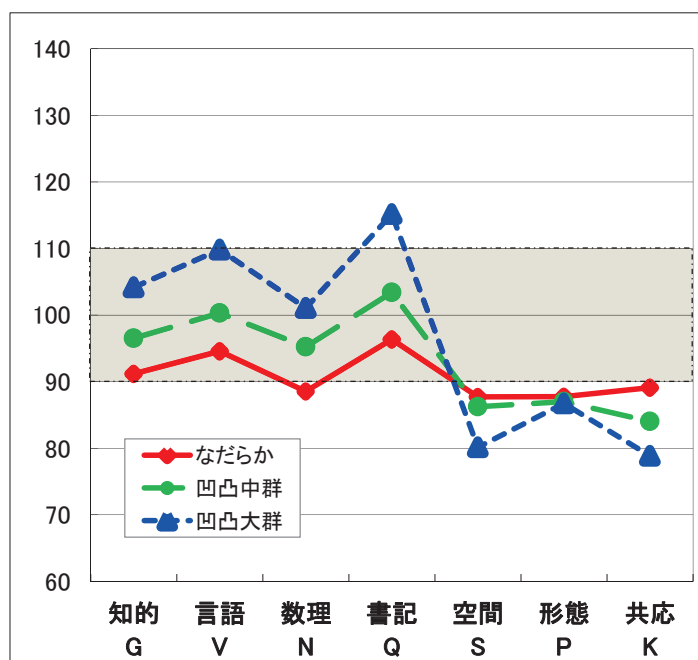
適性検査結果の特徴について

■ 適性能得点の高低差の大きさによる比較：GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
なだらか	112	91.17	94.58	88.54	96.34	87.71	87.76	89.09	31.06
凹凸中群	147	96.51	100.32	95.24	103.39	86.23	87.01	84.03	49.24
凹凸大群	102	104.17	109.84	101.07	115.17	80.13	86.73	78.87	74.89
群間有意差		**	**	**	**	**	n.s.	**	**

n.s.	有意差なし
†	p<.10の有意傾向
*	p<.05の有意差あり
**	p<.01の有意差あり

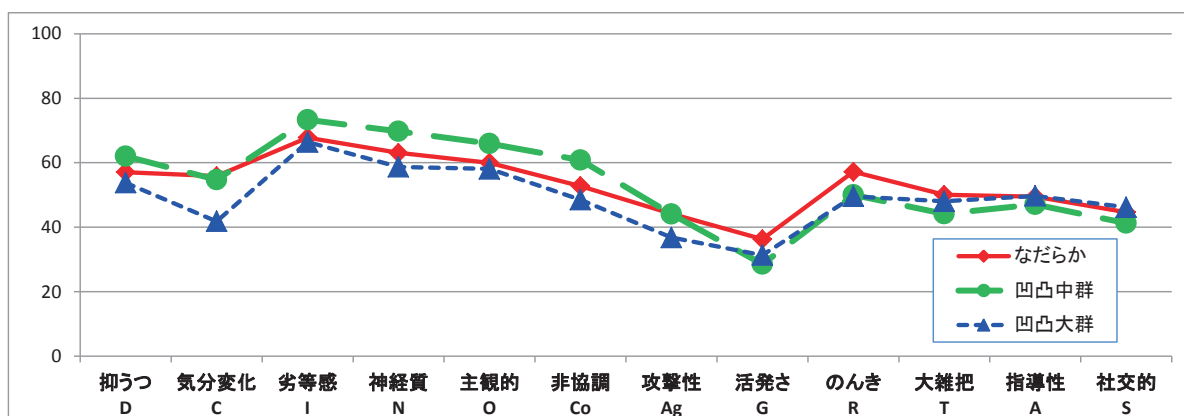
適性能得点の高低差がなだらかな個人と、高低差の凹凸が大きい個人とを比較すると、凹凸の大きい個人の方が認知機能群（G, V, N, Q）、特に書記的知覚（Q）の得点が著しく高い傾向が明らかとなった。一方で、知覚機能群（S, P）のうち空間判断力（S）と、運動共応（K）については傾向が全く異なっていた。高低差の凹凸が大きい個人は、凹凸の小さい個人と比べて空間判断力（S）と運動共応（K）の得点が低いことが明らかとなった。形態知覚（P）についてはどの群においても有意な得点の差は見られなかった。



■適性能得点の高低差の大きさによる比較：Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
なだらか	88	57.08	55.86	67.80	63.05	59.97	52.76
凹凸中群	117	62.04	54.69	73.31	69.73	65.92	60.82
凹凸大群	75	53.80	41.82	66.41	58.73	58.08	48.54
群間有意差		n.s.	**	n.s.	*	n.s.	*

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社交的 S
なだらか	44.21	36.28	57.17	50.07	49.46	44.66
凹凸中群	44.08	28.55	50.07	44.17	47.08	41.28
凹凸大群	36.79	31.34	49.55	48.03	49.72	46.18
群間有意差	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.



適性能得点の高低差と有意な関係が見られた YG 検査結果は、気分変化 (C)、神経質 (N)、非協調 (Co) の 3 尺度であった。気分変化 (C) については、適性能得点の凹凸が大きい個人は、それ以外の凹凸が小さい個人と比べて気分の変動が少なく、沈着冷静な傾向を示している。神経質 (N) の面では、凹凸の大きい個人は、凹凸の中程度の個人と比べて、神経質でない傾向を示していた。非協調 (Co) の面では、凹凸の大きい個人は、凹凸の中程度の個人と比べて協調的な行動をとる傾向が示されていた。ただし、神経質 (N) と非協調 (Co) は、適性能得点の凹凸がなだらかな個人について、他群と比べて有意に高い (あるいは低い) という特定の傾向は示されていない。

■適性能得点の高低差の大きさによる比較：相談特徴

<対人関係面>

	対人苦手・いじめ	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	84.8% (95)	15.2% (17)
凹凸中群	79.9% (119)	20.1% (30)
凹凸大群	76.5% (78)	23.5% (24)

有意差

n.s.

	対人不安・自信なし	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	91.1% (102)	8.9% (10)
凹凸中群	87.9% (131)	12.1% (18)
凹凸大群	90.2% (92)	9.8% (10)

有意差

n.s.

	対人不信	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	82.1% (92)	17.9% (20)
凹凸中群	80.5% (120)	19.5% (29)
凹凸大群	83.3% (85)	16.7% (17)

有意差

n.s.

続いて、相談特徴と、適性能得点の高低差の大きさとの関係性を検討した。

まず、対人関係面のキーワード（対人苦手、対人不安、対人不信）については、適性能得点の高低差の大きさとは特に有意な関係性は検出されなかった。すなわち、適性能得点の凹凸が大きくても小さくても、対人関係面に関する相談特徴の有無とは連動しないことが確認された。例えば、「対人苦手・いじめ経験」については、凹凸の大きい群は他群と比べて、「言及・兆候あり」とする割合がやや高いように見えるが、統計的に有意な結果ではないため、結果を深読みするような解釈は慎むべきと考える。

次に、性格特徴面のキーワードとの関連性を検討したが、適性能得点の高低差の大きさとは特に関係しないことが明らかとなった。個別の結果をみると、例えば、「衝動的」な相談特徴は、適性能得点のなだらかな個人において「言及・兆候」が多くみられるように見えるが、この結果も統計的に有意なものではなく、深読みするような解釈はできない。

<性格特徴面>

	他責的	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	89.3% (100)	10.7% (12)
凹凸中群	87.9% (131)	12.1% (18)
凹凸大群	87.3% (89)	12.7% (13)

有意差

n.s.

	不遇感・劣等感	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	67.0% (75)	33.0% (37)
凹凸中群	63.1% (94)	36.9% (55)
凹凸大群	64.7% (66)	35.3% (36)

有意差

n.s.

	衝動的	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	85.7% (96)	14.3% (16)
凹凸中群	91.9% (137)	8.1% (12)
凹凸大群	93.1% (95)	6.9% (7)

有意差

n.s.

	社会へ出ることへの不安	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	91.1% (102)	8.9% (10)
凹凸中群	93.3% (139)	6.7% (10)
凹凸大群	93.1% (95)	6.9% (7)

有意差

n.s.

	プライド高い	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	83.9% (94)	16.1% (18)
凹凸中群	82.6% (123)	17.4% (26)
凹凸大群	86.3% (88)	13.7% (14)

有意差

n.s.

	思い込みが強い	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	67.9% (76)	32.1% (36)
凹凸中群	61.1% (91)	38.9% (58)
凹凸大群	65.7% (67)	34.3% (35)

有意差

n.s.

	社交性・社会性		
	「なし」	言及なし	「あり」
なだらか	12.5% (14)	75.0% (84)	12.5% (14)
凹凸中群	20.1% (30)	65.8% (98)	14.1% (21)
凹凸大群	16.7% (17)	75.5% (77)	7.8% (8)

有意差

n.s.

	温厚さ・おだやかさ・快活さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
なだらか	6.3% (7)	77.7% (87)	16.1% (18)
凹凸中群	7.4% (11)	73.8% (110)	18.8% (28)
凹凸大群	3.9% (4)	83.3% (85)	12.7% (13)

有意差

n.s.

<行動・現状面>

●運動・体力、作業面

	体力・運動の得意さ	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	92.0% (103)	8.0% (9)
凹凸中群	93.3% (139)	6.7% (10)
凹凸大群	94.1% (96)	5.9% (6)

有意差

n.s.

	動きの遅さ	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	86.6% (97)	13.4% (15)
凹凸中群	79.2% (118)	20.8% (31)
凹凸大群	81.4% (83)	18.6% (19)

有意差

n.s.

	手先器用、コツコツする作業の得意さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
なだらか	8.0% (9)	85.7% (96)	6.3% (7)
凹凸中群	11.4% (17)	85.2% (127)	3.4% (5)
凹凸大群	11.8% (12)	85.3% (87)	2.9% (3)

有意差

n.s.

最後に、行動・現状面のキーワードとの関連性を検討した。3つのパート別に説明する。

まず、「運動・体力・作業面」については、どの相談特徴も適性能得点の高低差との関連性はみられなかった。

次に「言語、指示理解、情報処理」について検討した。明確な有意差はみられなかったものの、「関心の範囲・視野の狭さ」と「設問指示に従わない傾向」について、適性能得点の高低差が中程度の個人において「言及・兆候あり」がやや多いという傾向が、弱いながらも現れていた(有意に近い傾向)。ただし、凹凸の大きい個人と、逆になだらかな個人に関しては、特に顕著な傾向が確認されなかったため、なぜ凹凸差が中程度の個人にのみこのような結果が現れたのかについては、現時点で理由を推測することは難しい。あくまでも弱い傾向にすぎず、今後ケース数が増えた場合に結果が変化する可能性も残されている。

最後に、「精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況」についても検討したが、適性能得点の高低差との間には有意な関係性は見出されなかった。

●言語・指示理解、情報処理

	言語理解に苦労	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	90.2% (101)	9.8% (11)
凹凸中群	94.6% (141)	5.4% (8)
凹凸大群	90.2% (92)	9.8% (10)
有意差	n.s.	

	指示覚えられない等のミス	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	92.9% (104)	7.1% (8)
凹凸中群	91.9% (137)	8.1% (12)
凹凸大群	90.2% (92)	9.8% (10)
有意差	n.s.	

	関心の範囲・視野が狭い	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	93.8% (105)	6.3% (7)
凹凸中群	85.2% (127)	14.8% (22)
凹凸大群	90.2% (92)	9.8% (10)
有意差	†	

	設問指示に従わない傾向	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	96.4% (108)	3.6% (4)
凹凸中群	89.3% (133)	10.7% (16)
凹凸大群	95.1% (97)	4.9% (5)
有意差	†	

	同時処理が苦手	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	92.9% (104)	7.1% (8)
凹凸中群	89.9% (134)	10.1% (15)
凹凸大群	91.2% (93)	8.8% (9)
有意差	n.s.	

	段取りに苦労	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	94.6% (106)	5.4% (6)
凹凸中群	89.3% (133)	10.7% (16)
凹凸大群	93.1% (95)	6.9% (7)
有意差	n.s.	

	凡ミス、うっかりミス	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	91.1% (102)	8.9% (10)
凹凸中群	92.6% (138)	7.4% (11)
凹凸大群	91.2% (93)	8.8% (9)
有意差	n.s.	

	マニュアル等覚えられない	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	98.2% (110)	1.8% (2)
凹凸中群	96.0% (143)	4.0% (6)
凹凸大群	97.1% (99)	2.9% (3)
有意差	n.s.	

	将来(職業選択等)に対し混乱状態	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	83.0% (93)	17.0% (19)
凹凸中群	79.9% (119)	20.1% (30)
凹凸大群	83.3% (85)	16.7% (17)
有意差	n.s.	

	マイペースな態度に叱責を受ける	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	77.7% (87)	22.3% (25)
凹凸中群	73.2% (109)	26.8% (40)
凹凸大群	78.4% (80)	21.6% (22)
有意差	n.s.	

	TPO・場にあった言動の苦手さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
なだらか	19.6% (22)	67.0% (75)	13.4% (15)
凹凸中群	16.8% (25)	62.4% (93)	20.8% (31)
凹凸大群	14.7% (15)	65.7% (67)	19.6% (20)
有意差	n.s.		

●精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況

	うつ、精神疾患等	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	79.5% (89)	20.5% (23)
凹凸中群	75.8% (113)	24.2% (36)
凹凸大群	77.5% (79)	22.5% (23)

有意差

n.s.

	不活発、不登校/ひきこもり経験	
	言及なし	言及・兆候あり
なだらか	92.9% (104)	7.1% (8)
凹凸中群	89.3% (133)	10.7% (16)
凹凸大群	85.3% (87)	14.7% (15)

有意差

n.s.

	職を転々と・・・		
	「しない」	言及なし	「する」
なだらか	13.4% (15)	79.5% (89)	7.1% (8)
凹凸中群	10.1% (15)	84.6% (126)	5.4% (8)
凹凸大群	10.8% (11)	81.4% (83)	7.8% (8)

有意差

n.s.

(2) GATB 適性能プロフィールの個人内での相対的凹凸に関する検討**B：相対的凹凸で特徴的に現れている適性能に着目した分析**

<小括>

●GATB 適性能プロフィールの個人内の相対的凹凸の特徴と、GATB、YG 検査、相談特徴との関連性を分析したが、全般的に、関連性がみられた項目は非常に限られていた。すなわち、GATB で測定される能力の相対的な高低の特徴は、一般的に、性格特徴や相談特徴との関連性が低いことを意味する。これは資料編（1）でも述べた通り、能力と性格や、能力との関連が薄い相談特徴とはそれぞれ別物であり、基本的には連動しないからであろう。一部の関連性がみられた結果は、以下の通りである。

●当分析では、個人内における相対的凹凸の高低によって特徴を導き出している。例えば、ある個人の運動共応（K）がたとえ 120 点以上でなくても、本人のプロフィールを相対的にみて運動共応（K）が突出して高ければ、その個人は「相対的運動共応（K）高群」に位置づけられる。このような基準で高群・低群・中間群を決めて分析したところ、資料編（1）の絶対的基準による高低とは全く異なる傾向を示すことが明らかとなった。資料編（1）では GATB の高得点群、中得点群、低得点群が明らかに三層に分かれる構造となっていたが、当分析では、相対的凹凸が高い領域以外の適性能得点が概ね低くなる（逆に、相対的凹凸が低い場合、他の適性能得点が高くなる）という傾向がみられた。その傾向が特に強くみられたのが、書記的知覚（Q）と運動共応（K）である。例えば、運動共応（K）が相対的に高かった個人は、他の適性能得点の平均値が他群と比べて概ね低い傾向にあった。

●YG 検査結果との関連については、どの適性能得点でもそれほど強い関連性は得られなかった。一部では、書記的知覚（Q）が相対的に低い個人が活発で社交的という結果が得られ、運動共応（K）が相対的に高い個人も社交的という結果が得られた。相談特徴については、運動共応（K）の低い個人では手先の不器用さが多く報告されていた点と、言語能力（V）の高い個人は TPO に合った言動の苦手さがない傾向が確認された。このように、相談特徴と直接関連のある GATB 適性能得点の相対的凹凸は非常に限定されていた。

B：相対的凹凸で特徴的に現れている適性能に着目した分析

1. 言語能力 (V)

概要

GATB 適性能プロフィールについて、一個人内の相対的凹凸を検討した際に、言語能力(V)の得点が、他の適性能と比べて相対的に高い群(相対V高群)、相対的に低い群(相対V低群)、それ以外の中間にある群(中間群)の3群に分け、適性検査結果(GATB、YG)と相談特徴の違いを検討した。ただし、本研究のデータでは、相対V低群に相当する観測数が5件しか得られなかったため、以下の結果はその点に留意して解釈を行う必要がある。各群の人数と性別の内訳は、相対V低群5名(男性4、女性1)、中間群176名(男性115、女性58、不明3)、相対V高群68名(男性30、女性35、不明3)であった。

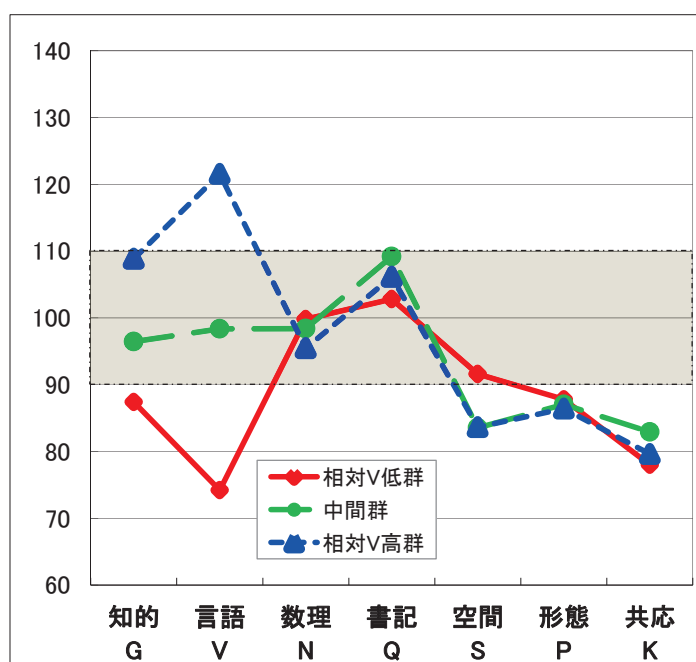
適性検査結果の特徴について

■言語能力(V)の相対的高さによる比較：GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
相対V低群	5	87.40	74.20	99.80	102.80	91.60	87.80	78.00	48.60
中間群	176	96.44	98.38	98.40	109.18	83.55	87.06	82.92	60.84
相対V高群	68	108.85	121.56	95.46	106.13	83.63	86.40	79.62	57.75
群間有意差		**	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

n.s.	有意差なし
†	p<.10の有意傾向
*	p<.05の有意差あり
**	p<.01の有意差あり

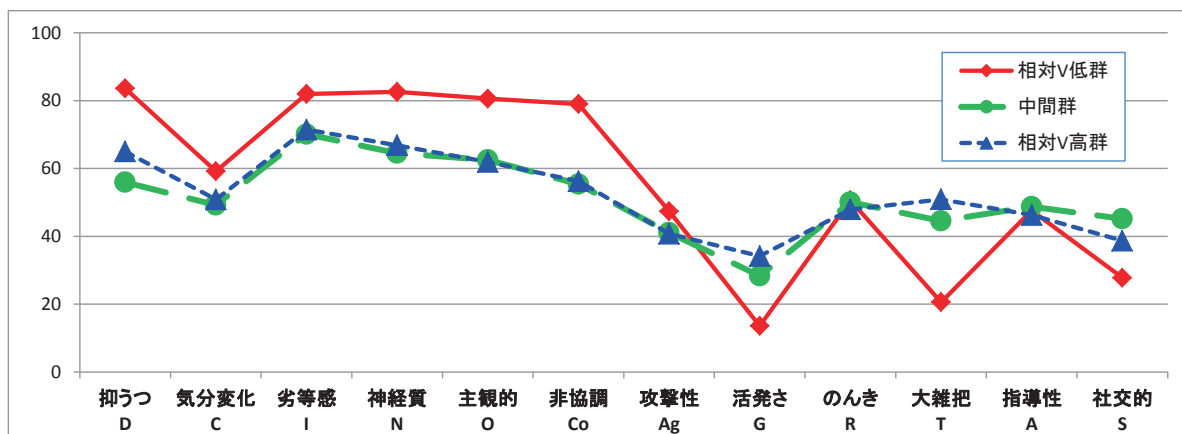
他の適性能と比べて言語能力(V)が相対的に高い(あるいは低い)個人は、知的能力(G)を除いて、他の適性能において平均値が3群ともほぼ変わらないことが示された。すなわち、言語能力(V)が相対的に高い個人は、知的能力(G)においても高い得点を示しているが、他の適性能については差がみられなかった。



■言語能力(V)の相対的高さによる比較：Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
相対V低群	5	83.60	59.20	82.00	82.60	80.60	79.00
中間群	136	55.93	49.24	70.10	64.50	62.53	55.36
相対V高群	49	65.00	50.85	71.48	66.82	61.90	56.26
群間有意差		†	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社交的 S
相対V低群	47.40	13.60	50.60	20.60	47.60	27.80
中間群	41.06	28.33	50.09	44.51	48.70	45.20
相対V高群	40.73	34.14	47.92	50.90	46.27	38.69
群間有意差	n.s.	n.s.	n.s.	†	n.s.	n.s.



言語能力（V）の相対的な得点凹凸と YG 検査結果を比較したところ、群間の有意差が明確に現れる尺度は存在しなかったが、弱い傾向（有意に近い傾向）として現れていたのは、抑うつ（D）と大雑把（T）であった。すなわち、相対的に言語能力（V）が低い個人は、憂うつで悲観的な気分の強い傾向と、些細なことを気にして考え込みやすい性質が示されていた。しかし、前述の通り、相対的に言語能力（V）が低い個人は本分析では5件しか観察されなかったため、現時点の結果は暫定的と捉える方が無難である。したがって、このグラフには値の大きな変化も見られるが、踏み込んで解釈を行うことは現時点では控えるべきではないかと考える。

■言語能力（V）の相対の高さによる比較：相談特徴

<対人関係面>

	対人苦手・いじめ	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	76.7% (135)	23.3% (41)
相対V高群	80.9% (55)	19.1% (13)
有意差	n.s.	

	対人不安・自信なし	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	80.0% (4)	20.0% (1)
中間群	89.2% (157)	10.8% (19)
相対V高群	88.2% (60)	11.8% (8)
有意差	n.s.	

	対人不信	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	79.0% (139)	21.0% (37)
相対V高群	88.2% (60)	11.8% (8)
有意差	n.s.	

続いて、相談特徴と言語能力（V）との関係について検討した。

まず、対人関係面のキーワード（対人苦手、対人不安、対人不信）については、言語能力（V）の相対的な高～低得点による違いは観察されなかった。すなわち、言語能力（V）が相対的に高くても低くても、対人関係面に関する相談特徴の有無とは連動しないことが確認された。

次に、性格特徴面のキーワードとの関連性を検討したが、言語能力（V）の相対的な得点の高低とは特に関係しないことが明らかとなった。観測数の少ない、相対的に言語能力（V）が低い群を除いて検討したとしても、中間群と相対V高群の数値上の傾向はほぼ似通っており、性格特徴面において大きな差がつくものは検出されなかった。

<性格特徴面>

	他責的	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	86.4% (152)	13.6% (24)
相対V高群	91.2% (62)	8.8% (6)

有意差 n.s.

	不遇感・劣等感	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	63.6% (112)	36.4% (64)
相対V高群	61.8% (42)	38.2% (26)

有意差 n.s.

	衝動的	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	93.2% (164)	6.8% (12)
相対V高群	89.7% (61)	10.3% (7)

有意差 n.s.

	社会へ出ることへの不安	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	92.6% (163)	7.4% (13)
相対V高群	95.6% (65)	4.4% (3)

有意差 n.s.

	プライド高い	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	82.4% (145)	17.6% (31)
相対V高群	86.8% (59)	13.2% (9)

有意差 n.s.

	思い込みが強い	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	62.5% (110)	37.5% (66)
相対V高群	61.8% (42)	38.2% (26)

有意差 n.s.

	社交性・社会性		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対V低群	0.0% (0)	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	20.5% (36)	71.0% (125)	8.5% (15)
相対V高群	16.2% (11)	63.2% (43)	20.6% (14)

有意差 n.s.

	温厚さ・おだやかさ・快活さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対V低群	0.0% (0)	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	6.3% (11)	79.5% (140)	14.2% (25)
相対V高群	5.9% (4)	70.6% (48)	23.5% (16)

有意差 n.s.

＜行動・現状面＞

●運動・体力、作業面

	体力・運動の得意さ	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	93.2% (164)	6.8% (12)
相対V高群	94.1% (64)	5.9% (4)

有意差 n.s.

	動きの遅さ	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	79.5% (140)	20.5% (36)
相対V高群	79.4% (54)	20.6% (14)

有意差 n.s.

	手先器用、コツコツする作業の得意さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対V低群	0.0% (0)	80.0% (4)	20.0% (1)
中間群	12.5% (22)	85.2% (150)	2.3% (4)
相対V高群	10.3% (7)	85.3% (58)	4.4% (3)

有意差 n.s.

最後に、行動・現状面のキーワードとの関連性を検討した。3つのパート別に説明する。

まず、「運動・体力・作業面」については、言語能力（V）の相対的な高～低得点による違いは観察されなかった。すなわち、言語能力（V）が相対的に高くても低くても、運動・体力・作業面の問題とは連動しないことが確認された。

次に「言語、指示理解、情報処理」について検討した。その結果、「TPO・場にあった言動の苦手さ」について、相対的に言語能力（V）が高得点の個人と、中程度の得点の個人とを比べた場合に、「苦手さが無い（＝得意とする）」という言及や兆候が相談特徴に出てきた割合は、高得点の個人の方が有意に高いという結果がみられた。その他の言語面に関する相談特徴については、有意な影響は観察されなかった。

最後に、「精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況」について検討したが、有意差のある関係性は確認されなかった。

●言語・指示理解、情報処理

	言語理解に苦勞	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	92.0% (162)	8.0% (14)
相対V高群	94.1% (64)	5.9% (4)

有意差

n.s.

	指示覚えられない等のミス	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	91.5% (161)	8.5% (15)
相対V高群	89.7% (61)	10.3% (7)

有意差

n.s.

	関心の範囲・視野が狭い	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	85.2% (150)	14.8% (26)
相対V高群	91.2% (62)	8.8% (6)

有意差

n.s.

	設問指示に従わない傾向	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	91.5% (161)	8.5% (15)
相対V高群	91.2% (62)	8.8% (6)

有意差

n.s.

	同時処理が苦手	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	90.3% (159)	9.7% (17)
相対V高群	89.7% (61)	10.3% (7)

有意差

n.s.

	段取りに苦勞	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	89.2% (157)	10.8% (19)
相対V高群	94.1% (64)	5.9% (4)

有意差

n.s.

	凡ミス、うっかりミス	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	92.6% (163)	7.4% (13)
相対V高群	91.2% (62)	8.8% (6)

有意差

n.s.

	マニュアル等覚えられない	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	96.6% (170)	3.4% (6)
相対V高群	95.6% (65)	4.4% (3)

有意差

n.s.

	将来(職業選択等)に対し混乱状態	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	83.0% (146)	17.0% (30)
相対V高群	75.0% (51)	25.0% (17)

有意差

n.s.

	マイペースな態度に叱責を受ける	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	76.1% (134)	23.9% (42)
相対V高群	72.1% (49)	27.9% (19)

有意差

n.s.

	TPO・場にあった言動の苦手さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対V低群	20.0% (1)	80.0% (4)	0.0% (0)
中間群	11.9% (21)	64.8% (114)	23.3% (41)
相対V高群	26.5% (18)	60.3% (41)	13.2% (9)

有意差

*

●精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況

	うつ、精神疾患等	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	60.0% (3)	40.0% (2)
中間群	79.0% (139)	21.0% (37)
相対V高群	72.1% (49)	27.9% (19)

有意差

n.s.

	不活発、不登校/ひきこもり経験	
	言及なし	言及・兆候あり
相対V低群	80.0% (4)	20.0% (1)
中間群	89.2% (157)	10.8% (19)
相対V高群	83.8% (57)	16.2% (11)

有意差

n.s.

	職を転々と・・・		
	「しない」	言及なし	「する」
相対V低群	0.0% (0)	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	10.2% (18)	82.4% (145)	7.4% (13)
相対V高群	11.8% (8)	83.8% (57)	4.4% (3)

有意差

n.s.

2. 数理能力 (N)

概要

GATB 適性能プロフィールについて、一個人内の相対的凹凸を検討した際に、数理能力(N)の得点が、他の適性能と比べて相対的に高い群(相対N高群)、相対的に低い群(相対N低群)、それ以外の中間にある群(中間群)の3群に分け、適性検査結果(GATB、YG)と相談特徴の違いを検討した。各群の人数と性別の内訳は、相対N低群33名(男性20、女性13)、中間群166名(男性92、女性69、不明5)、相対N高群50名(男性37、女性12、不明1)であった。

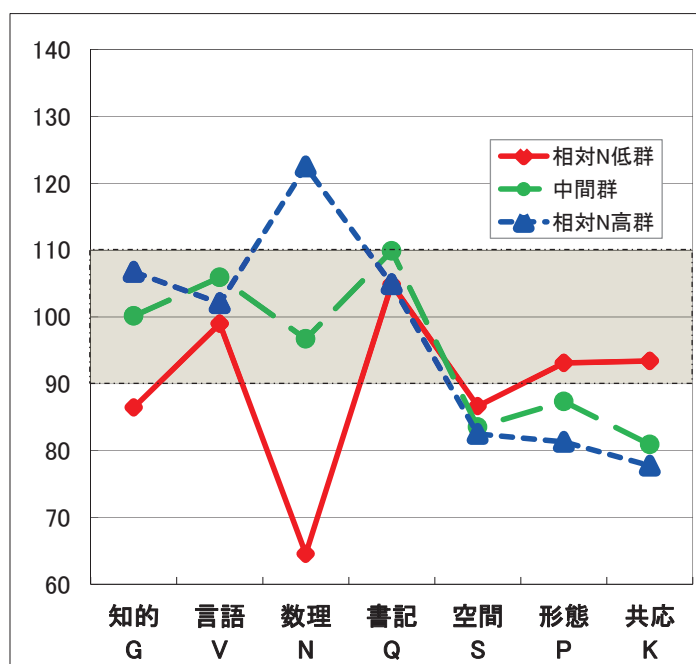
適性検査結果の特徴について

■数理能力(N)の相対的高さによる比較：GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
相対N低群	33	86.45	99.00	64.55	104.91	86.64	93.12	93.42	53.39
中間群	166	100.13	105.91	96.70	109.88	83.52	87.34	80.90	61.22
相対N高群	50	106.74	102.06	122.52	104.88	82.50	81.30	77.72	59.08
群間有意差		**	n.s.	**	n.s.	n.s.	†	*	*

n.s.	有意差なし
†	p<.10の有意傾向
*	p<.05の有意差あり
**	p<.01の有意差あり

他の適性能と比べて数理能力(N)が相対的に高い個人について、知的能力(G)では相対的に数理能力(N)が低い個人と比べて有意に得点が高く、一方で、運動共応(K)では、有意に得点が低いことが明らかとなった。すなわち、相対的に数理能力(N)が高い個人は、知的能力(G)の得点が高い一方で、形態知覚(P)や運動共応(K)が低くなるという右下がりのプ

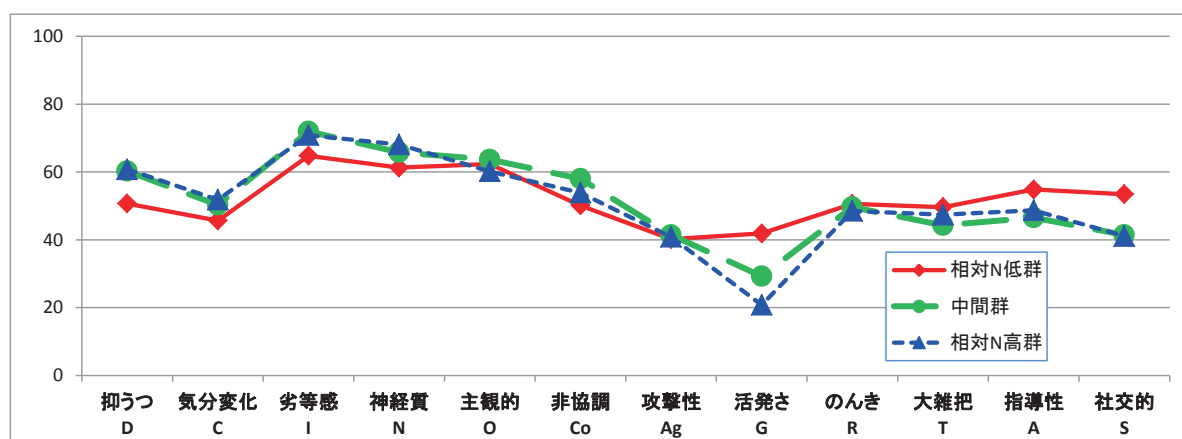


プロフィールになりやすい。逆に、相対的にNが低い個人は、プロフィールの左側にある認知機能群の適性能得点が相対的に低く、右側にある形態知覚(P)や運動共応(K)がやや高めになるという、右上がりのプロフィールを描きやすいと言える。

■ 数理能力（N）の相対の高さによる比較：Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
相対N低群	27	50.70	45.65	64.77	61.27	62.33	50.12
中間群	129	60.26	50.27	71.94	65.75	63.64	58.03
相対N高群	34	60.76	51.82	70.86	68.11	60.18	53.88
群間有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社交的 S
相対N低群	40.21	41.89	50.59	49.62	54.85	53.44
中間群	41.42	29.29	49.64	44.26	46.51	41.47
相対N高群	40.86	20.81	48.50	47.40	48.71	41.09
群間有意差	n.s.	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.



数理能力（N）の相対的な得点凹凸と YG 検査結果を比較したところ、活発さ（G）において、相対的に数理能力（N）の低い個人と高い個人との間に有意差がみられた。すなわち、相対的に数理能力（N）が低い個人は、動作がてきぱきし、自信に満ちた活動的な傾向があり、一方で相対的に数理能力（N）が高い個人は、身体的な活動を好まず、消極的な性質を示すことを意味する。ただし、中間群に関しては低群、高群との間に有意な違いは確認されていない。

■ 数理能力（N）の相対の高さによる比較：相談特徴

< 対人関係面 >

	対人苦手・いじめ	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	78.8% (26)	21.2% (7)
中間群	77.1% (128)	22.9% (38)
相対N高群	82.0% (41)	18.0% (9)
有意差	n.s.	

	対人不安・自信なし	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	97.0% (32)	3.0% (1)
中間群	88.0% (146)	12.0% (20)
相対N高群	86.0% (43)	14.0% (7)
有意差	n.s.	

	対人不信	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	81.8% (27)	18.2% (6)
中間群	81.3% (135)	18.7% (31)
相対N高群	84.0% (42)	16.0% (8)
有意差	n.s.	

続いて、相談特徴と数理能力（N）との関係について検討した。

まず、対人関係面のキーワード（対人苦手、対人不安、対人不信）については、数理能力（N）の相対的な高～低得点による違いは観察されなかった。すなわち、数理能力（N）が相対的に高くても低くても、対人関係面に関する相談特徴の有無とは連動しないことが確認された。

次に、性格特徴面のキーワードとの関連性を検討したが、数値能力（N）の相対的な得点の高低とは特に関係しないことが明らかとなった。

<性格特徴面>

	他責的	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	84.8% (28)	15.2% (5)
中間群	88.6% (147)	11.4% (19)
相対N高群	88.0% (44)	12.0% (6)

有意差

n.s.

	不遇感・劣等感	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	60.6% (20)	39.4% (13)
中間群	62.7% (104)	37.3% (62)
相対N高群	70.0% (35)	30.0% (15)

有意差

n.s.

	衝動的	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	90.9% (30)	9.1% (3)
中間群	91.6% (152)	8.4% (14)
相対N高群	96.0% (48)	4.0% (2)

有意差

n.s.

	社会へ出ることへの不安	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	93.9% (31)	6.1% (2)
中間群	94.6% (157)	5.4% (9)
相対N高群	90.0% (45)	10.0% (5)

有意差

n.s.

	プライド高い	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	75.8% (25)	24.2% (8)
中間群	85.5% (142)	14.5% (24)
相対N高群	84.0% (42)	16.0% (8)

有意差

n.s.

	思い込みが強い	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	57.6% (19)	42.4% (14)
中間群	65.1% (108)	34.9% (58)
相対N高群	60.0% (30)	40.0% (20)

有意差

n.s.

	社交性・社会性		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対N低群	15.2% (5)	69.7% (23)	15.2% (5)
中間群	20.5% (34)	66.9% (111)	12.7% (21)
相対N高群	16.0% (8)	78.0% (39)	6.0% (3)

有意差

n.s.

	温厚さ・おだやかさ・快活さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対N低群	6.1% (2)	78.8% (26)	15.2% (5)
中間群	5.4% (9)	78.9% (131)	15.7% (26)
相対N高群	8.0% (4)	72.0% (36)	20.0% (10)

有意差

n.s.

＜行動・現状面＞

●運動・体力、作業面

	体力・運動の得意さ	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	93.9% (31)	6.1% (2)
中間群	94.0% (156)	6.0% (10)
相対N高群	92.0% (46)	8.0% (4)

有意差

n.s.

	動きの遅さ	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	72.7% (24)	27.3% (9)
中間群	80.1% (133)	19.9% (33)
相対N高群	84.0% (42)	16.0% (8)

有意差

n.s.

	手先器用、コツコツする作業の得意さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対N低群	6.1% (2)	90.9% (30)	3.0% (1)
中間群	12.0% (20)	84.3% (140)	3.6% (6)
相対N高群	14.0% (7)	84.0% (42)	2.0% (1)

有意差

n.s.

最後に、行動・現状面のキーワードとの関連性を検討した。3つのパート別に説明する。

まず、「運動・体力・作業面」については、相対的な運動共応（K）の得点の凹凸と、相談特徴との間に有意な関係性はみられなかった。

次に「言語、指示理解、情報処理」について検討した。相対的に運動共応（K）が低い個人では「設問指示に従わない傾向」についての「言及や兆候」が、他群と比べて有意に多い傾向にあった。その他の相談特徴については、各群間での差はみられなかった。

最後に、「精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況」について検討したが、個人の相対的プロフィールにおける数理能力（N）の得点の凹凸と、相談特徴との間には有意な関係性は検出されなかった。

●言語・指示理解、情報処理

	言語理解に苦労	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	87.9% (29)	12.1% (4)
中間群	93.4% (155)	6.6% (11)
相対N高群	94.0% (47)	6.0% (3)

有意差

n.s.

	指示覚えられない等のミス	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	93.9% (31)	6.1% (2)
中間群	91.0% (151)	9.0% (15)
相対N高群	90.0% (45)	10.0% (5)

有意差

n.s.

	関心の範囲・視野が狭い	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	84.8% (28)	15.2% (5)
中間群	88.0% (146)	12.0% (20)
相対N高群	86.0% (43)	14.0% (7)

有意差

n.s.

	設問指示に従わない傾向	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	81.8% (27)	18.2% (6)
中間群	91.6% (152)	8.4% (14)
相対N高群	98.0% (49)	2.0% (1)

有意差

*

	同時処理が苦手	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	84.8% (28)	15.2% (5)
中間群	92.8% (154)	7.2% (12)
相対N高群	86.0% (43)	14.0% (7)

有意差

n.s.

	段取りに苦労	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	93.9% (31)	6.1% (2)
中間群	90.4% (150)	9.6% (16)
相対N高群	90.0% (45)	10.0% (5)

有意差

n.s.

	凡ミス、うっかりミス	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	90.9% (30)	9.1% (3)
中間群	91.6% (152)	8.4% (14)
相対N高群	96.0% (48)	4.0% (2)

有意差

n.s.

	マニュアル等覚えられない	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	90.9% (30)	9.1% (3)
中間群	97.6% (162)	2.4% (4)
相対N高群	96.0% (48)	4.0% (2)

有意差

n.s.

	将来(職業選択等)に対し混乱状態	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	75.8% (25)	24.2% (8)
中間群	81.3% (135)	18.7% (31)
相対N高群	84.0% (42)	16.0% (8)

有意差

n.s.

	マイペースな態度に叱責を受ける	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	78.8% (26)	21.2% (7)
中間群	74.7% (124)	25.3% (42)
相対N高群	76.0% (38)	24.0% (12)

有意差

n.s.

	TPO・場にあった言動の苦手さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対N低群	18.2% (6)	54.5% (18)	27.3% (9)
中間群	14.5% (24)	66.3% (110)	19.3% (32)
相対N高群	20.0% (10)	62.0% (31)	18.0% (9)

有意差

n.s.

●精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況

	うつ、精神疾患等	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	81.8% (27)	18.2% (6)
中間群	74.7% (124)	25.3% (42)
相対N高群	80.0% (40)	20.0% (10)
	有意差	n.s.

	不活発、不登校/ひきこもり経験	
	言及なし	言及・兆候あり
相対N低群	87.9% (29)	12.1% (4)
中間群	84.9% (141)	15.1% (25)
相対N高群	96.0% (48)	4.0% (2)
	有意差	n.s.

	職を転々と・・・		
	「しない」	言及なし	「する」
相対N低群	6.1% (2)	90.9% (30)	3.0% (1)
中間群	12.7% (21)	80.7% (134)	6.6% (11)
相対N高群	6.0% (3)	86.0% (43)	8.0% (4)
	有意差	n.s.	

3. 書記的知覚 (Q)

概要

GATB 適性能プロフィールについて、一個人内の相対的凹凸を検討した際に、書記的知覚 (Q) の得点が、他の適性能と比べて相対的に高い群 (相対 Q 高群)、相対的に低い群 (相対 Q 低群)、それ以外の中間にある群 (中間群) の 3 群に分け、適性検査結果 (GATB、YG) と相談特徴の違いを検討した。ただし、本研究のデータでは、相対 Q 低群に相当する観測数が 5 件しか得られなかったため、以下の結果はその点に留意して解釈を行う必要がある。各群の人数と性別の内訳は、相対 Q 低群 5 名 (男性 3、女性 2)、中間群 155 名 (男性 95、女性 57、不明 3)、相対 Q 高群 89 名 (男性 51、女性 35、不明 3) であった。

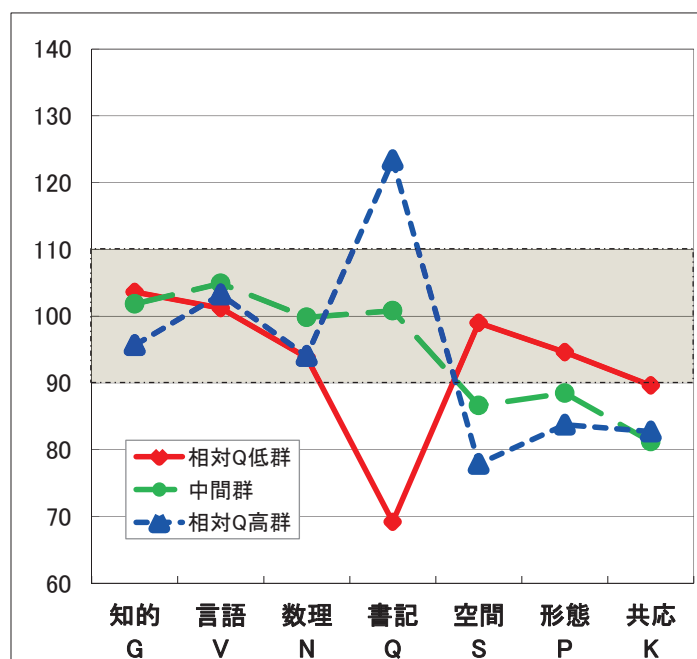
適性検査結果の特徴について

■ 書記的知覚 (Q) の相対的高さによる比較 : GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
相対Q低群	5	103.60	101.20	93.80	69.20	99.00	94.60	89.60	49.00
中間群	155	101.81	104.88	99.81	100.79	86.61	88.45	81.21	58.59
相対Q高群	89	95.65	103.25	94.04	123.35	77.85	83.75	82.72	62.37
群間有意差		n.s.	n.s.	n.s.	**	**	n.s.	n.s.	†

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

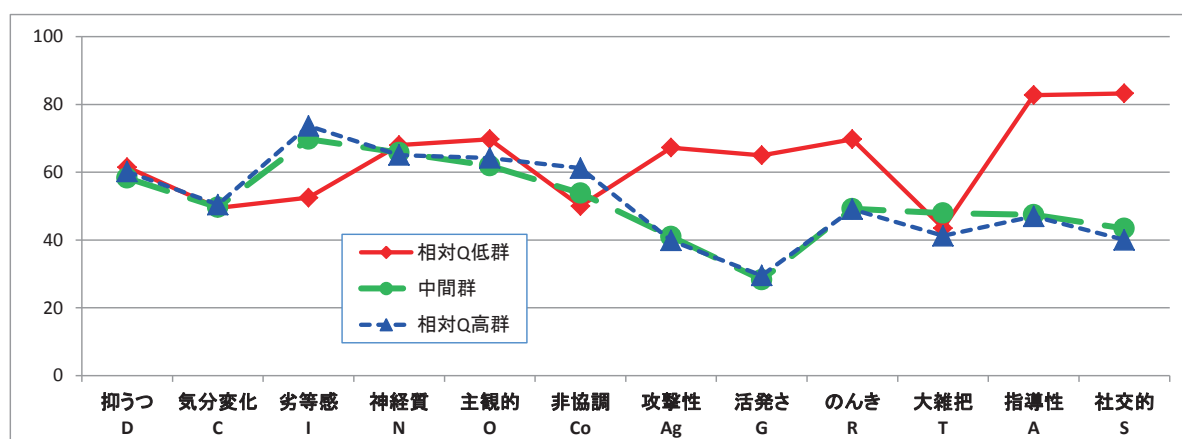
他の適性能と比べて書記的知覚 (Q) が相対的に高い個人は、空間判断力 (S) において、中間群よりも有意に得点が低い傾向がみられたが、他の適性能については得点の推移がほぼ類似しており、群間の違いは確認されなかった。相対的に書記的知覚 (Q) が低い個人に関しては、観測数が少ないこともあり、書記的知覚 (Q) 以外で適性能得点の平均値に有意差が検出されたものはなかった。



■ 書記的知覚 (Q) の相対的高さによる比較：Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
相対Q低群	4	61.50	49.50	52.50	68.00	69.75	50.00
中間群	120	58.27	49.63	69.74	65.79	61.87	53.81
相対Q高群	66	60.17	50.45	73.66	65.04	64.20	61.22
群間有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社交的 S
相対Q低群	67.25	65.00	69.75	43.50	82.75	83.25
中間群	41.02	28.29	49.19	47.93	47.48	43.42
相対Q高群	39.86	29.51	49.04	41.23	46.98	40.03
群間有意差	n.s.	*	n.s.	n.s.	*	*



書記的知覚 (Q) の相対的な得点凹凸と YG 検査結果を比較したところ、活発さ (G)、指導性 (A)、社交的 (S) において、群間の有意差が検出された。相対的に書記的知覚 (Q) が低い個人は、活動的で、人の上に立ったり世話好きで対人的接触を好む傾向が示されている。ただし、相対的に書記的知覚 (Q) が低い個人の観測数は現時点で 4 件のみであり、今後、観測数が増えた場合に結果が変わる可能性も大きい。なお、グラフには値の大きな変化が他にも見られるが、有意差が得られていないため、現時点では踏み込んだ解釈を行うべきではないと考える

■ 書記的知覚 (Q) の相対的高さによる比較：相談特徴

<対人関係面>

	対人苦手・いじめ	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	60.0% (3)	40.0% (2)
中間群	79.4% (123)	20.6% (32)
相対Q高群	77.5% (69)	22.5% (20)

有意差

n.s.

	対人不安・自信なし	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	60.0% (3)	40.0% (2)
中間群	89.0% (138)	11.0% (17)
相対Q高群	89.9% (80)	10.1% (9)

有意差

n.s.

	対人不信	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	60.0% (3)	40.0% (2)
中間群	82.6% (128)	17.4% (27)
相対Q高群	82.0% (73)	18.0% (16)

有意差

n.s.

続いて、相談特徴と書記的知覚（Q）との関係について検討した。

まず、対人関係面のキーワード（対人苦手、対人不安、対人不信）については、書記的知覚（Q）の相対的な高～低得点による違いは観察されなかった。すなわち、書記的知覚（Q）が相対的に高くても低くても、対人関係面に関する相談特徴の有無とは連動しないことが確認された。

次に、性格特徴面のキーワードとの関連性を検討したが、書記的知覚（Q）の相対的な得点の高低とは特に関係しないことが明らかとなった。

<性格特徴面>

	他責的	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	80.0% (4)	20.0% (1)
中間群	87.7% (136)	12.3% (19)
相対Q高群	88.8% (79)	11.2% (10)

有意差

n.s.

	不遇感・劣等感	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	60.0% (3)	40.0% (2)
中間群	60.0% (93)	40.0% (62)
相対Q高群	70.8% (63)	29.2% (26)

有意差

n.s.

	衝動的	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	93.5% (145)	6.5% (10)
相対Q高群	89.9% (80)	10.1% (9)

有意差

n.s.

	社会へ出ることへの不安	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	92.3% (143)	7.7% (12)
相対Q高群	95.5% (85)	4.5% (4)

有意差

n.s.

	プライド高い	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	80.0% (4)	20.0% (1)
中間群	84.5% (131)	15.5% (24)
相対Q高群	83.1% (74)	16.9% (15)

有意差

n.s.

	思い込みが強い	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	60.0% (3)	40.0% (2)
中間群	58.7% (91)	41.3% (64)
相対Q高群	70.8% (63)	29.2% (26)

有意差

n.s.

	社交性・社会性		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対Q低群	0.0% (0)	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	20.6% (32)	67.7% (105)	11.6% (18)
相対Q高群	16.9% (15)	70.8% (63)	12.4% (11)

有意差

n.s.

	温厚さ・おだやかさ・快活さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対Q低群	0.0% (0)	80.0% (4)	20.0% (1)
中間群	7.7% (12)	74.2% (115)	18.1% (28)
相対Q高群	3.4% (3)	83.1% (74)	13.5% (12)

有意差

n.s.

<行動・現状面>

●運動・体力、作業面

	体力・運動の得意さ	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	80.0% (4)	20.0% (1)
中間群	94.2% (146)	5.8% (9)
相対Q高群	93.3% (83)	6.7% (6)

有意差

n.s.

	動きの遅さ	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	78.1% (121)	21.9% (34)
相対Q高群	82.0% (73)	18.0% (16)

有意差

n.s.

	手先器用、コツコツする作業の得意さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対Q低群	20.0% (1)	80.0% (4)	0.0% (0)
中間群	10.3% (16)	85.8% (133)	3.9% (6)
相対Q高群	13.5% (12)	84.3% (75)	2.2% (2)

有意差

n.s.

最後に、行動・現状面のキーワードとの関連性を検討した。

「運動・体力・作業面」、「言語、指示理解、情報処理」、「精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況」のすべてに関して、どの相談特徴についても相対的な書記的知覚（Q）の高低とは関連がないことが示された。観測数の少ない、相対的に書記的知覚（Q）の低い個人を除いた場合でも、中間群、相対Q高群の両者の傾向はそれほど開きがない。つまり、適性能プロフィールで書記的知覚（Q）が相対的に高い個人と、ほどほどに高さのある個人とを比較した場合に、相談特徴上で明確に現れるような違いはないと言える。

●言語・指示理解、情報処理

	言語理解に苦労	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	92.3% (143)	7.7% (12)
相対Q高群	93.3% (83)	6.7% (6)

有意差

n.s.

	指示覚えられない等のミス	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	89.0% (138)	11.0% (17)
相対Q高群	94.4% (84)	5.6% (5)

有意差

n.s.

	関心の範囲・視野が狭い	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	86.5% (134)	13.5% (21)
相対Q高群	87.6% (78)	12.4% (11)

有意差

n.s.

	設問指示に従わない傾向	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	90.3% (140)	9.7% (15)
相対Q高群	93.3% (83)	6.7% (6)

有意差

n.s.

	同時処理が苦手	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	89.0% (138)	11.0% (17)
相対Q高群	92.1% (82)	7.9% (7)

有意差

n.s.

	段取りに苦労	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	91.6% (142)	8.4% (13)
相対Q高群	88.8% (79)	11.2% (10)

有意差

n.s.

	凡ミス、うっかりミス	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	80.0% (4)	20.0% (1)
中間群	91.0% (141)	9.0% (14)
相対Q高群	95.5% (85)	4.5% (4)

有意差

n.s.

	マニュアル等覚えられない	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	95.5% (148)	4.5% (7)
相対Q高群	97.8% (87)	2.2% (2)

有意差

n.s.

	将来(職業選択等)に対し混乱状態	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	80.0% (4)	20.0% (1)
中間群	78.7% (122)	21.3% (33)
相対Q高群	85.4% (76)	14.6% (13)

有意差

n.s.

	マイペースな態度に叱責を受ける	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	60.0% (3)	40.0% (2)
中間群	74.8% (116)	25.2% (39)
相対Q高群	77.5% (69)	22.5% (20)

有意差

n.s.

	TPO・場にあった言動の苦手さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対Q低群	20.0% (1)	60.0% (3)	20.0% (1)
中間群	15.5% (24)	65.8% (102)	18.7% (29)
相対Q高群	16.9% (15)	60.7% (54)	22.5% (20)

有意差

n.s.

●精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況

	うつ、精神疾患等	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	80.0% (4)	20.0% (1)
中間群	75.5% (117)	24.5% (38)
相対Q高群	78.7% (70)	21.3% (19)

有意差

n.s.

	不活発、不登校/ひきこもり経験	
	言及なし	言及・兆候あり
相対Q低群	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	86.5% (134)	13.5% (21)
相対Q高群	88.8% (79)	11.2% (10)

有意差

n.s.

	職を転々と・・・		
	「しない」	言及なし	「する」
相対Q低群	0.0% (0)	100.0% (5)	0.0% (0)
中間群	10.3% (16)	83.9% (130)	5.8% (9)
相対Q高群	11.2% (10)	80.9% (72)	7.9% (7)

有意差

n.s.

4. 空間判断力 (S)

概要

GATB 適性能プロフィールについて、一個人内の相対的凹凸を検討した際に、空間判断力 (S) の得点が、他の適性能と比べて相対的に高い群 (相対 S 高群)、相対的に低い群 (相対 S 低群)、それ以外の中間にある群 (中間群) の 3 群に分け、適性検査結果 (GATB、YG) と相談特徴の違いを検討した。各群の人数と性別の内訳は、相対 S 低群 86 名 (男性 46、女性 37、不明 3)、中間群 145 名 (男性 90、女性 53、不明 2)、相対 S 高群 18 名 (男性 13、女性 4、不明 1) であった。

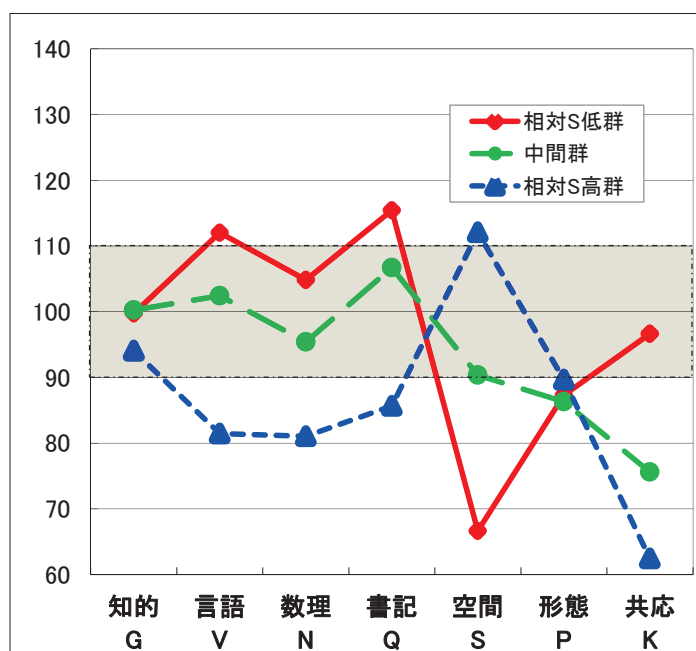
適性検査結果の特徴について

■空間判断力 (S) の相対的高さによる比較：GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
相対S低群	86	99.77	112.02	104.84	115.45	66.64	87.31	96.65	61.83
中間群	145	100.27	102.42	95.41	106.72	90.34	86.30	75.60	59.05
相対S高群	18	94.06	81.44	81.06	85.67	112.11	89.67	62.44	55.50
群間有意差		n.s.	**	**	**	**	n.s.	**	n.s.

n.s.	有意差なし
†	p<.10の有意傾向
*	p<.05の有意差あり
**	p<.01の有意差あり

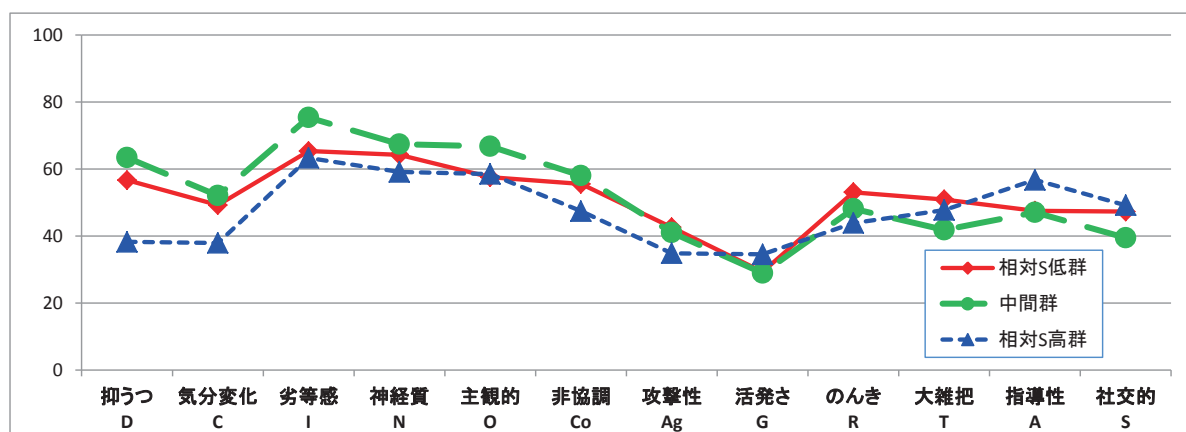
他の適性能と比べて空間判断力 (S) が相対的に高い個人は、知的能力 (G) と形態知覚 (P) を除き、他の適性能得点が他群より有意に低い傾向が明らかとなった。逆に、空間判断力 (S) が相対的に低い個人は、知的能力 (G) と形態知覚 (P) 以外の適性能得点で有意に高い傾向を示していた。特に、運動共応 (K) については、相対的に空間判断力 (S) が高い個人の平均値は、他の適性能得点と比べて著しく低い傾向があった。



■空間判断力 (S) の相対的高さによる比較：Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
相対S低群	69	56.70	49.23	65.37	64.26	57.54	55.53
中間群	106	63.42	52.10	75.41	67.44	66.77	58.06
相対S高群	15	38.27	37.93	63.33	59.12	58.53	47.44
群間有意差		*	n.s.	*	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
相対S低群	42.59	29.29	53.07	50.90	47.53	47.29
中間群	41.06	28.89	48.14	41.81	47.07	39.49
相対S高群	34.87	34.53	43.88	47.75	56.75	49.19
群間有意差	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.



空間判断力 (S) の相対的な得点凹凸と YG 検査結果を比較したところ、抑うつ (D) と劣等感 (I) において、有意な違いがみられた。すなわち、相対的に空間判断力 (S) が高い個人は、空間判断力 (S) が中間的な高さの個人と比べて、陽気で楽観的な気分を持つ傾向がある。また、相対的に空間判断力 (S) が低い個人は、中間的な高さの個人と比べて、劣等感が低い傾向が確認された。

■空間判断力 (S) の相対的高さによる比較：相談特徴

<対人関係面>

	対人苦手・いじめ	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	77.9% (67)	22.1% (19)
中間群	78.6% (114)	21.4% (31)
相対S高群	77.8% (14)	22.2% (4)

有意差 n.s.

	対人不安・自信なし	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	87.2% (75)	12.8% (11)
中間群	89.7% (130)	10.3% (15)
相対S高群	88.9% (16)	11.1% (2)

有意差 n.s.

	対人不信	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	80.2% (69)	19.8% (17)
中間群	82.8% (120)	17.2% (25)
相対S高群	83.3% (15)	16.7% (3)

有意差 n.s.

続いて、相談特徴と空間判断力（S）との関係について検討した。

まず、対人関係面のキーワード（対人苦手、対人不安、対人不信）については、空間判断力（S）の相対的な高～低得点による違いは観察されなかった。すなわち、空間判断力（S）が相対的に高くても低くても、対人関係面に関する相談特徴の有無とは連動しないことが確認された。

次に、性格特徴面のキーワードとの関連性を検討したが、空間判断力（S）の相対的な得点の高低とは特に関係しないことが明らかとなった。数値だけを見ると、一部の図表に偏りがあるように見受けられる点もあるが、統計的に有意な結果ではない。

<性格特徴面>

	他責的	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	88.4% (76)	11.6% (10)
中間群	89.0% (129)	11.0% (16)
相対S高群	77.8% (14)	22.2% (4)

有意差 n.s.

	不遇感・劣等感	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	60.5% (52)	39.5% (34)
中間群	66.2% (96)	33.8% (49)
相対S高群	61.1% (11)	38.9% (7)

有意差 n.s.

	衝動的	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	89.5% (77)	10.5% (9)
中間群	94.5% (137)	5.5% (8)
相対S高群	88.9% (16)	11.1% (2)

有意差 n.s.

	社会へ出ることへの不安	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	95.3% (82)	4.7% (4)
中間群	92.4% (134)	7.6% (11)
相対S高群	94.4% (17)	5.6% (1)

有意差 n.s.

	プライド高い	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	79.1% (68)	20.9% (18)
中間群	86.9% (126)	13.1% (19)
相対S高群	83.3% (15)	16.7% (3)

有意差 n.s.

	思い込みが強い	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	65.1% (56)	34.9% (30)
中間群	61.4% (89)	38.6% (56)
相対S高群	66.7% (12)	33.3% (6)

有意差 n.s.

	社交性・社会性		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対S低群	17.4% (15)	69.8% (60)	12.8% (11)
中間群	17.9% (26)	70.3% (102)	11.7% (17)
相対S高群	33.3% (6)	61.1% (11)	5.6% (1)

有意差 n.s.

	温厚さ・おだやかさ・快活さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対S低群	9.3% (8)	77.9% (67)	12.8% (11)
中間群	4.8% (7)	76.6% (111)	18.6% (27)
相対S高群	0.0% (0)	83.3% (15)	16.7% (3)

有意差 n.s.

＜行動・現状面＞

●運動・体力、作業面

	体力・運動の得意さ	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	91.9% (79)	8.1% (7)
中間群	94.5% (137)	5.5% (8)
相対S高群	94.4% (17)	5.6% (1)

有意差

n.s.

	動きの遅さ	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	84.9% (73)	15.1% (13)
中間群	78.6% (114)	21.4% (31)
相対S高群	66.7% (12)	33.3% (6)

有意差

n.s.

	手先器用、コツコツする作業の得意さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対S低群	11.6% (10)	86.0% (74)	2.3% (2)
中間群	11.0% (16)	85.5% (124)	3.4% (5)
相対S高群	16.7% (3)	77.8% (14)	5.6% (1)

有意差

n.s.

最後に、行動・現状面のキーワードとの関連性を検討した。3つのパート別に説明する。

まず、「運動・体力・作業面」については、相対的な空間判断力（S）の得点の凹凸と、相談特徴との間に有意な関係性はみられなかった。相対的に空間判断力（S）の高い個人は、GATBの運動共応（K）において著しく低い得点を持つ傾向があったが、「動きの遅さ」という相談特徴があったかどうかについては、ややそれに符合した傾向は出ているものの、有意差は検出されていない。

次に「言語、指示理解、情報処理」について検討したが、相対的な空間判断力（S）の得点の凹凸と、相談特徴との間に有意な関係性はみられなかった。

最後に、「精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況」についても検討した。「不活発、不登校/ひきこもり経験」に関して、相対的にSが高い個人は、「言動・兆候あり」の割合が高いことが示されていた。

●言語・指示理解、情報処理

	言語理解に苦労	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	95.3% (82)	4.7% (4)
中間群	91.0% (132)	9.0% (13)
相対S高群	94.4% (17)	5.6% (1)

有意差

n.s.

	指示覚えられない等のミス	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	88.4% (76)	11.6% (10)
中間群	92.4% (134)	7.6% (11)
相対S高群	94.4% (17)	5.6% (1)

有意差

n.s.

	関心の範囲・視野が狭い	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	87.2% (75)	12.8% (11)
中間群	86.9% (126)	13.1% (19)
相対S高群	88.9% (16)	11.1% (2)

有意差

n.s.

	設問指示に従わない傾向	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	95.3% (82)	4.7% (4)
中間群	89.7% (130)	10.3% (15)
相対S高群	88.9% (16)	11.1% (2)

有意差

n.s.

	同時処理が苦手	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	91.9% (79)	8.1% (7)
中間群	88.3% (128)	11.7% (17)
相対S高群	100.0% (18)	0.0% (0)

有意差

n.s.

	段取りに苦労	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	90.7% (78)	9.3% (8)
中間群	90.3% (131)	9.7% (14)
相対S高群	94.4% (17)	5.6% (1)

有意差

n.s.

	凡ミス、うっかりミス	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	94.2% (81)	5.8% (5)
中間群	91.7% (133)	8.3% (12)
相対S高群	88.9% (16)	11.1% (2)

有意差

n.s.

	マニュアル等覚えられない	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	96.5% (83)	3.5% (3)
中間群	95.9% (139)	4.1% (6)
相対S高群	100.0% (18)	0.0% (0)

有意差

n.s.

	将来(職業選択等)に対し混乱状態	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	80.2% (69)	19.8% (17)
中間群	80.0% (116)	20.0% (29)
相対S高群	94.4% (17)	5.6% (1)

有意差

n.s.

	マイペースな態度に叱責を受ける	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	75.6% (65)	24.4% (21)
中間群	75.2% (109)	24.8% (36)
相対S高群	77.8% (14)	22.2% (4)

有意差

n.s.

	TPO・場にあった言動の苦手さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対S低群	15.1% (13)	67.4% (58)	17.4% (15)
中間群	16.6% (24)	62.8% (91)	20.7% (30)
相対S高群	16.7% (3)	55.6% (10)	27.8% (5)

有意差

n.s.

●精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況

	うつ、精神疾患等	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	77.9% (67)	22.1% (19)
中間群	75.2% (109)	24.8% (36)
相対S高群	83.3% (15)	16.7% (3)

有意差

n.s.

	不活発、不登校/ひきこもり経験	
	言及なし	言及・兆候あり
相対S低群	86.0% (74)	14.0% (12)
中間群	91.0% (132)	9.0% (13)
相対S高群	66.7% (12)	33.3% (6)

有意差

*

	職を転々と・・・		
	「しない」	言及なし	「する」
相対S低群	8.1% (7)	81.4% (70)	10.5% (9)
中間群	12.4% (18)	83.4% (121)	4.1% (6)
相対S高群	5.6% (1)	88.9% (16)	5.6% (1)

有意差

n.s.

5. 形態知覚 (P)

概要

GATB 適性能プロフィールについて、一個人内の相対的凹凸を検討した際に、形態知覚 (P) の得点が、他の適性能と比べて相対的に高い群 (相対 P 高群)、相対的に低い群 (相対 P 低群)、それ以外の中間にある群 (中間群) の 3 群に分け、適性検査結果 (GATB、YG) と相談特徴の違いを検討した。各群の人数と性別の内訳は、相対 P 低群 68 名 (男性 41、女性 25、不明 2)、中間群 154 名 (男性 92、女性 58、不明 4)、相対 P 高群 27 名 (男性 16、女性 11) であった。

適性検査結果の特徴について

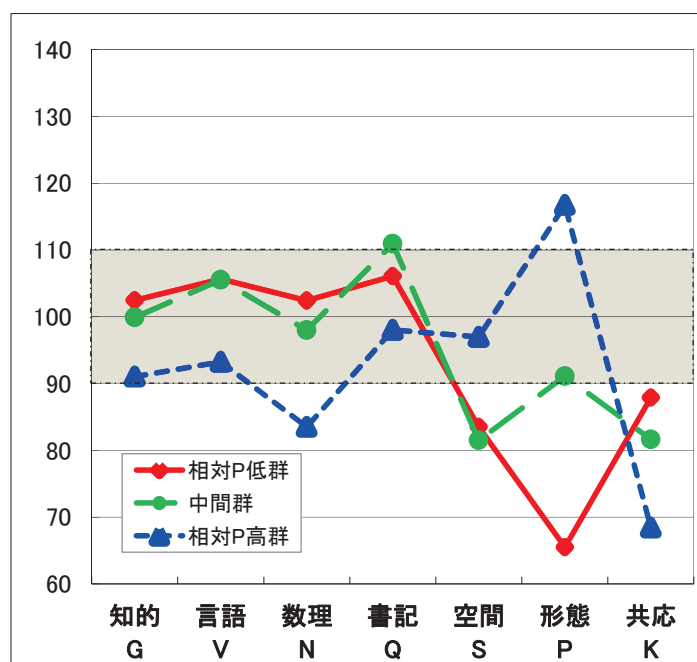
■形態知覚 (P) の相対の高さによる比較：GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
相対P低群	68	102.44	105.66	102.41	106.07	83.51	65.49	87.91	58.13
中間群	154	99.92	105.51	97.99	110.95	81.51	91.11	81.64	61.27
相対P高群	27	91.04	93.26	83.52	98.04	96.96	116.74	68.44	55.19
群間有意差		n.s.	*	**	*	**	**	**	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

他の適性能と比べて形態知覚 (P) が相対的に高い個人は、空間判断力 (S) においても適性能得点が有意に高いが、一方で知的能力 (G) を除き、その他の適性能得点 (特に運動共応 (K)) では他群より有意に低い傾向が明らかとなった。逆に、形態知覚 (P) が相対的に低い個人の場合は、数理能力 (N) と運動共応 (K) に関して、他群よりも得点が有意に高いことが示されている。

すなわち、形態知覚 (P) は、同じく知覚機能群に属する空間判断力 (S) の相対的な凹凸の高さとはほぼ連動する傾向を持つものの、その他の適性能得点の凹凸の向きが逆向きになる (高い場合は低くなる等) といった傾向がみられた。



■形態知覚（P）の相対的高さによる比較：Y-G性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
相対P低群	48	58.23	48.90	69.24	63.16	61.61	45.18
中間群	120	60.50	50.71	71.19	67.75	63.22	60.06
相対P高群	22	52.45	47.86	71.77	58.82	63.50	59.78

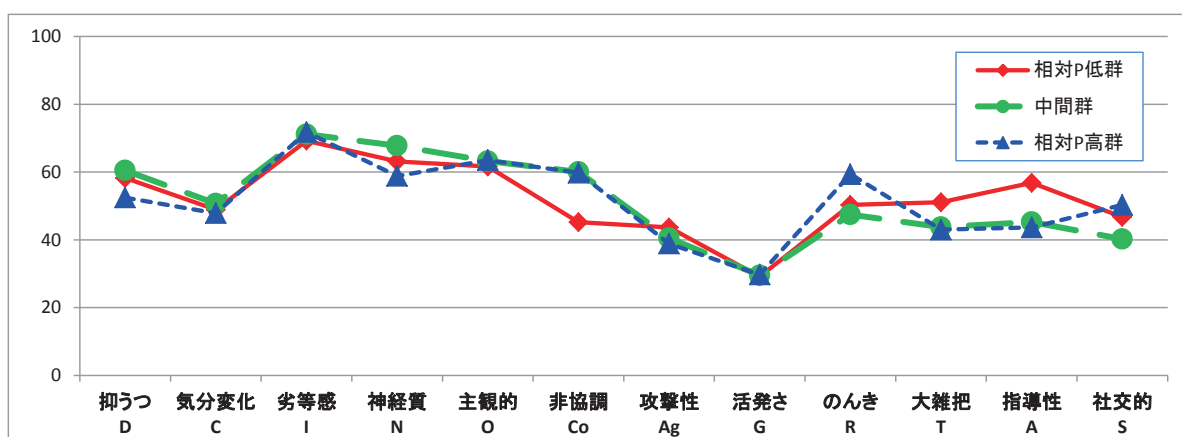
群間有意差

n.s. n.s. n.s. n.s. n.s. n.s. *

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社交的 S
相対P低群	43.65	29.15	50.29	51.08	56.82	46.73
中間群	40.52	29.55	47.44	43.79	45.25	40.24
相対P高群	38.87	29.74	59.35	43.00	43.65	50.30

群間有意差

n.s. n.s. n.s. n.s. * n.s.



形態知覚（P）の相対的な得点凹凸と YG 検査結果（平均値）を比較したところ、非協調（Co）と指導性（A）において、有意な違いがみられた。相対的に形態知覚（P）が低い個人は、他者と協調的で、世話好きな傾向があり、逆に形態知覚（P）が相対的に中程度に位置する個人は、対人不信や不満があったり、他者に対し服従的で引っ込み思案な傾向があることが確認された。ただし、相対的に形態知覚（P）が高い個人に関しては、観測数が他の 2 群と比べて相対的に少ない（N=22）影響もあり、有意差は検出されていない。

■形態知覚（P）の相対的高さによる比較：相談特徴

<対人関係面>

	対人苦手・いじめ	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	77.9% (53)	22.1% (15)
中間群	79.9% (123)	20.1% (31)
相対P高群	70.4% (19)	29.6% (8)

有意差

n.s.

	対人不安・自信なし	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	91.2% (62)	8.8% (6)
中間群	89.0% (137)	11.0% (17)
相対P高群	81.5% (22)	18.5% (5)

有意差

n.s.

	対人不信	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	82.4% (56)	17.6% (12)
中間群	83.1% (128)	16.9% (26)
相対P高群	74.1% (20)	25.9% (7)

有意差

n.s.

続いて、相談特徴と形態知覚（P）との関係について検討した。

まず、対人関係面のキーワード（対人苦手、対人不安、対人不信）については、形態知覚（P）の相対的な高～低得点による違いは観察されなかった。すなわち、形態知覚（P）が相対的に高くても低くても、対人関係面に関する相談特徴の有無とは連動しないことが確認された。

次に、性格特徴面のキーワードとの関連性を検討したが、形態知覚（P）の相対的な得点の高低とは特に関係しないことが明らかとなった。

<性格特徴面>

	他責的	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	85.3% (58)	14.7% (10)
中間群	89.6% (138)	10.4% (16)
相対P高群	85.2% (23)	14.8% (4)

有意差

n.s.

	不遇感・劣等感	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	67.6% (46)	32.4% (22)
中間群	62.3% (96)	37.7% (58)
相対P高群	63.0% (17)	37.0% (10)

有意差

n.s.

	衝動的	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	95.6% (65)	4.4% (3)
中間群	92.2% (142)	7.8% (12)
相対P高群	85.2% (23)	14.8% (4)

有意差

n.s.

	社会へ出ることへの不安	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	97.1% (66)	2.9% (2)
中間群	93.5% (144)	6.5% (10)
相対P高群	85.2% (23)	14.8% (4)

有意差

n.s.

	プライド高い	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	89.7% (61)	10.3% (7)
中間群	81.8% (126)	18.2% (28)
相対P高群	81.5% (22)	18.5% (5)

有意差

n.s.

	思い込みが強い	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	58.8% (40)	41.2% (28)
中間群	65.6% (101)	34.4% (53)
相対P高群	59.3% (16)	40.7% (11)

有意差

n.s.

	社交性・社会性		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対P低群	26.5% (18)	60.3% (41)	13.2% (9)
中間群	13.6% (21)	76.0% (117)	10.4% (16)
相対P高群	29.6% (8)	55.6% (15)	14.8% (4)

有意差

n.s.

	温厚さ・おだやかさ・快活さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対P低群	7.4% (5)	72.1% (49)	20.6% (14)
中間群	3.9% (6)	81.2% (125)	14.9% (23)
相対P高群	14.8% (4)	70.4% (19)	14.8% (4)

有意差

n.s.

＜行動・現状面＞

●運動・体力、作業面

	体力・運動の得意さ	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	94.1% (64)	5.9% (4)
中間群	92.2% (142)	7.8% (12)
相対P高群	100.0% (27)	0.0% (0)

有意差

n.s.

	動きの遅さ	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	86.8% (59)	13.2% (9)
中間群	79.2% (122)	20.8% (32)
相対P高群	66.7% (18)	33.3% (9)

有意差

†

	手先器用、コツコツする作業の得意さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対P低群	14.7% (10)	82.4% (56)	2.9% (2)
中間群	11.0% (17)	85.7% (132)	3.2% (5)
相対P高群	7.4% (2)	88.9% (24)	3.7% (1)

有意差

n.s.

最後に、行動・現状面のキーワードとの関連性を検討した。3つのパート別に説明する。

まず、「運動・体力・作業面」については、「動きの遅さ」について、各群間の違いが弱い傾向（有意に近い傾向）として現れていた。表を読み取ると、相対的に形態知覚（P）が高い個人において、「動きの遅さ」が相談特徴に現れる割合が高くなっており、これは、GATBの運動共応（K）が低い点と符合する結果である。

次に「言語、指示理解、情報処理」について検討した。その結果、「言語理解に苦勞」する内容の相談特徴が、相対的に形態知覚（P）が低い群では多いという傾向が示されている。ただし、相対的に形態知覚（P）が高い群においても、有意差はなかったが「言及・兆候あり」の割合が一定以上あるため、現時点での確定的な結果解釈を行うことは難しく、今後ケース数が多くなった場合に再度検討する必要があると思われる。

最後に、「精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況」について検討した。相対的に形態知覚（P）が高い群と低い群とを比較した場合に、「不活発」や「不登校/ひきこもり」といった相談特徴が現れる割合が、高群になるほど増える傾向が明らかとなった。相対的に形態知覚（P）が高い群では、運動共応（K）が他群よりも低かったため、全般的な活動レベルにおいても不活発な状態につながりやすい可能性もある。

●言語・指示理解、情報処理

	言語理解に苦勞	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	86.8% (59)	13.2% (9)
中間群	96.1% (148)	3.9% (6)
相対P高群	88.9% (24)	11.1% (3)

有意差

*

	指示覚えられない等のミス	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	88.2% (60)	11.8% (8)
中間群	92.2% (142)	7.8% (12)
相対P高群	92.6% (25)	7.4% (2)

有意差

n.s.

	関心の範囲・視野が狭い	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	82.4% (56)	17.6% (12)
中間群	89.6% (138)	10.4% (16)
相対P高群	85.2% (23)	14.8% (4)

有意差

n.s.

	設問指示に従わない傾向	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	92.6% (63)	7.4% (5)
中間群	91.6% (141)	8.4% (13)
相対P高群	88.9% (24)	11.1% (3)

有意差

n.s.

	同時処理が苦手	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	89.7% (61)	10.3% (7)
中間群	90.9% (140)	9.1% (14)
相対P高群	88.9% (24)	11.1% (3)

有意差

n.s.

	段取りに苦勞	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	86.8% (59)	13.2% (9)
中間群	92.9% (143)	7.1% (11)
相対P高群	88.9% (24)	11.1% (3)

有意差

n.s.

	凡ミス、うっかりミス	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	92.6% (63)	7.4% (5)
中間群	92.2% (142)	7.8% (12)
相対P高群	92.6% (25)	7.4% (2)

有意差

n.s.

	マニュアル等覚えられない	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	95.6% (65)	4.4% (3)
中間群	96.8% (149)	3.2% (5)
相対P高群	96.3% (26)	3.7% (1)

有意差

n.s.

	将来(職業選択等)に対し混乱状態	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	83.8% (57)	16.2% (11)
中間群	81.8% (126)	18.2% (28)
相対P高群	70.4% (19)	29.6% (8)

有意差

n.s.

	マイペースな態度に叱責を受ける	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	72.1% (49)	27.9% (19)
中間群	76.6% (118)	23.4% (36)
相対P高群	77.8% (21)	22.2% (6)

有意差

n.s.

	TPO・場にあった言動の苦手さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対P低群	17.6% (12)	66.2% (45)	16.2% (11)
中間群	16.2% (25)	62.3% (96)	21.4% (33)
相対P高群	11.1% (3)	66.7% (18)	22.2% (6)

有意差

n.s.

●精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況

	うつ、精神疾患等	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	75.0% (51)	25.0% (17)
中間群	78.6% (121)	21.4% (33)
相対P高群	70.4% (19)	29.6% (8)

有意差

n.s.

	不活発、不登校/ひきこもり経験	
	言及なし	言及・兆候あり
相対P低群	95.6% (65)	4.4% (3)
中間群	86.4% (133)	13.6% (21)
相対P高群	74.1% (20)	25.9% (7)

有意差

*

	職を転々と・・・		
	「しない」	言及なし	「する」
相対P低群	7.4% (5)	82.4% (56)	10.3% (7)
中間群	12.3% (19)	83.1% (128)	4.5% (7)
相対P高群	7.4% (2)	85.2% (23)	7.4% (2)

有意差

n.s.

6. 運動共応 (K)

概要

GATB 適性能プロフィールについて、一個人内の相対的凹凸を検討した際に、運動共応(K)の得点が、他の適性能と比べて相対的に高い群(相対K高群)、相対的に低い群(相対K低群)、それ以外の中間にある群(中間群)の3群に分け、適性検査結果(GATB、YG)と相談特徴の違いを検討した。各群の人数と性別の内訳は、相対K低群114名(男性72、女性40、不明2)、中間群110名(男性60、女性47、不明3)、相対K高群25名(男性17、女性7、不明1)であった。

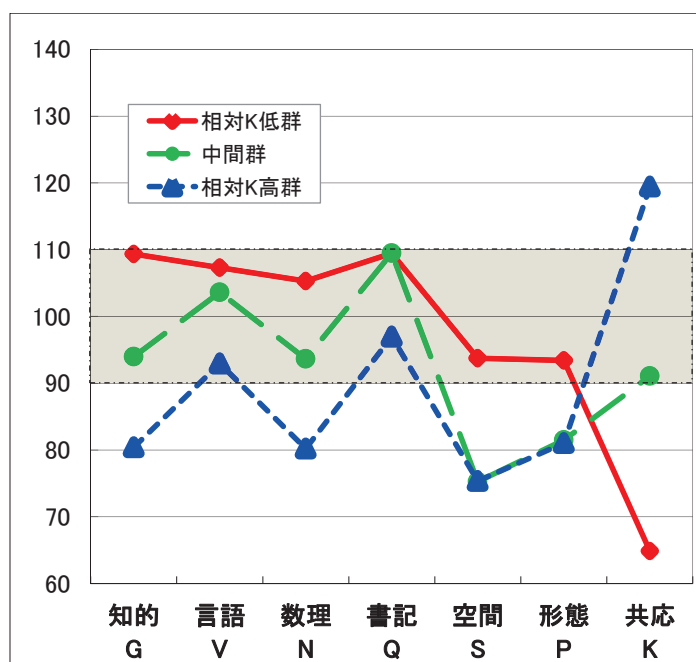
適性検査結果の特徴について

■運動共応(K)の相対的高さによる比較：GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
相対K低群	114	109.36	107.30	105.28	109.46	93.75	93.39	64.85	61.43
中間群	110	93.95	103.59	93.65	109.49	75.25	81.48	91.08	58.14
相対K高群	25	80.40	92.96	80.20	96.96	75.36	81.04	119.44	59.20
群間有意差		**	*	**	*	**	**	**	n.s.

n.s.	有意差なし
†	p<.10の有意傾向
*	p<.05の有意差あり
**	p<.01の有意差あり

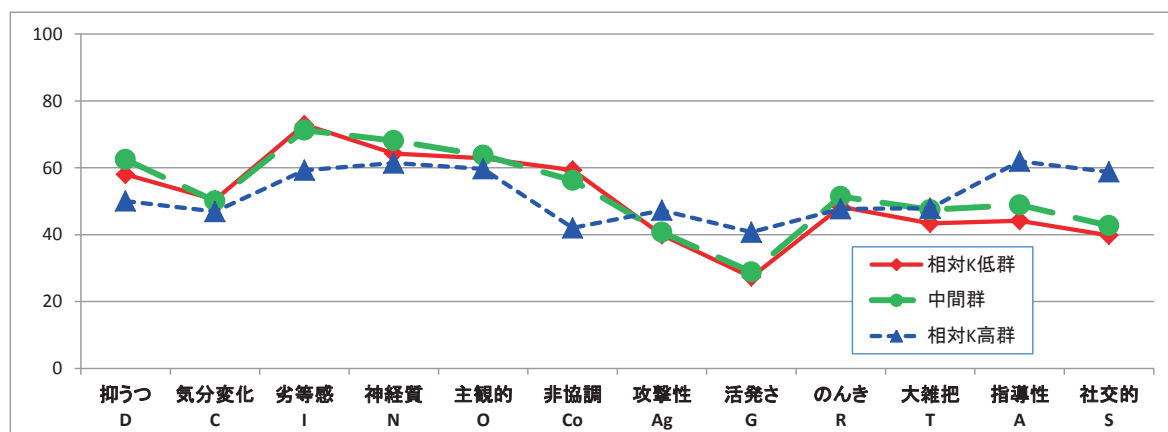
他の適性能と比べて運動共応(K)が相対的に高い(あるいは低い)個人は、他の認知機能群(G, V, N, Q)において低い(あるいは高い)というように、真逆の傾向を示すことが明らかとなった。すなわち、運動共応(K)が他の適性能よりも相対的に低い個人は、認知機能の得点が高く、逆に運動共応(K)が相対的に高い個人は認知機能の得点が低いことを示す。この逆転傾向は、知覚機能群(S, P)の得点においてもやや傾向は弱いながらも見られている。言い換えれば、相対的に運動共応(K)が低い個人は全体的に右下がりのプロフィールとなり、相対的に運動共応(K)が高い個人は、右上がり、あるいは運動共応(K)のみが単独で上昇しているプロフィールとなる傾向がある。



■運動共応（K）の相対的高さによる比較：Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
相対K低群	90	58.02	50.45	72.89	64.25	62.86	59.30
中間群	79	62.48	50.08	71.24	68.14	63.71	56.25
相対K高群	21	50.05	46.90	59.25	61.40	59.68	42.00
群間有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
相対K低群	39.93	27.32	48.33	43.39	44.18	39.77
中間群	40.74	28.83	51.44	47.48	48.89	42.73
相対K高群	47.30	40.73	47.71	47.90	61.95	58.76
群間有意差	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	*	*



運動共応（K）の相対的な得点凹凸と YG 検査結果を比較したところ、指導性（A）と社会的（S）において、有意な違いがみられた。すなわち、相対的に運動共応（K）が低い個人は、他者に対して追従的、服従的で引っ込み思案な傾向があり、逆に相対的に運動共応（K）が高い個人は、世話好きで人の上に立つ指導者意識が高く、対人的接触を好む性質が確認された。ただし、中間群に関しては低群、高群との間に有意な違いは確認されていない。

■運動共応（K）の相対的高さによる比較：相談特徴

<対人関係面>

	対人苦手・いじめ	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	78.9% (90)	21.1% (24)
中間群	75.5% (83)	24.5% (27)
相対K高群	88.0% (22)	12.0% (3)
有意差	n.s.	

	対人不安・自信なし	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	88.6% (101)	11.4% (13)
中間群	86.4% (95)	13.6% (15)
相対K高群	100.0% (25)	0.0% (0)
有意差	n.s.	

	対人不信	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	83.3% (95)	16.7% (19)
中間群	80.0% (88)	20.0% (22)
相対K高群	84.0% (21)	16.0% (4)
有意差	n.s.	

続いて、相談特徴と運動共応（K）との関係について検討した。

まず、対人関係面のキーワード（対人苦手、対人不安、対人不信）については、運動共応（K）の相対的な高～低得点による違いは観察されなかった。すなわち、運動共応（K）が相対的に高くても低くても、対人関係面に関する相談特徴の有無とは連動しないことが確認された。

次に、性格特徴面のキーワードとの関連性を検討したが、運動共応（K）の相対的な得点の高低とは特に関係しないことが明らかとなった。例えば、前述の YG 検査との関係では「社会的」という傾向との有意差が確認されていたが、実際の相談特徴の中での社交性・社会性の有無とは統計的有意差が確認されなかった。数値だけを見ると、相対的に運動共応（K）が低い個人の方が、社交性や社会性が低いように見受けられる点もあるが、統計的に有意な結果ではない。

<性格特徴面>

	他責的	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	86.0% (98)	14.0% (16)
中間群	89.1% (98)	10.9% (12)
相対K高群	92.0% (23)	8.0% (2)
	有意差	n.s.

	不遇感・劣等感	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	60.5% (69)	39.5% (45)
中間群	66.4% (73)	33.6% (37)
相対K高群	68.0% (17)	32.0% (8)
	有意差	n.s.

	衝動的	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	93.0% (106)	7.0% (8)
中間群	90.0% (99)	10.0% (11)
相対K高群	100.0% (25)	0.0% (0)
	有意差	n.s.

	社会へ出ることへの不安	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	90.4% (103)	9.6% (11)
中間群	96.4% (106)	3.6% (4)
相対K高群	96.0% (24)	4.0% (1)
	有意差	n.s.

	プライド高い	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	86.0% (98)	14.0% (16)
中間群	80.9% (89)	19.1% (21)
相対K高群	88.0% (22)	12.0% (3)
	有意差	n.s.

	思い込みが強い	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	65.8% (75)	34.2% (39)
中間群	59.1% (65)	40.9% (45)
相対K高群	68.0% (17)	32.0% (8)
	有意差	n.s.

	社交性・社会性		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対K低群	21.9% (25)	69.3% (79)	8.8% (10)
中間群	17.3% (19)	70.0% (77)	12.7% (14)
相対K高群	12.0% (3)	68.0% (17)	20.0% (5)
	有意差	n.s.	

	温厚さ・おだやかさ・快活さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対K低群	7.0% (8)	75.4% (86)	17.5% (20)
中間群	6.4% (7)	78.2% (86)	15.5% (17)
相対K高群	0.0% (0)	84.0% (21)	16.0% (4)
	有意差	n.s.	

＜行動・現状面＞

●運動・体力、作業面

	体力・運動の得意さ	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	94.7% (108)	5.3% (6)
中間群	92.7% (102)	7.3% (8)
相対K高群	92.0% (23)	8.0% (2)
	有意差	n.s.

	動きの遅さ	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	74.6% (85)	25.4% (29)
中間群	83.6% (92)	16.4% (18)
相対K高群	88.0% (22)	12.0% (3)
	有意差	n.s.

	手先器用、コツコツする作業の得意さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対K低群	17.5% (20)	80.7% (92)	1.8% (2)
中間群	8.2% (9)	86.4% (95)	5.5% (6)
相対K高群	0.0% (0)	100.0% (25)	0.0% (0)
	有意差	*	

最後に、行動・現状面のキーワードとの関連性を検討した。3つのパート別に説明する。

まず、「運動・体力・作業面」については、「手先の器用さやコツコツする作業の得意さ」に関して、相対的に運動共応（K）が低い個人は、他の個人と比べて「手先が不器用」であったり、「コツコツする作業が不得意」であることを示す言動やエピソードが多くみられる傾向にあった。一方で、相対的に運動共応（K）が高い個人では、すべてのケースで「言及なし」となっており、群間の違いが明らかとなっている。

次に「言語、指示理解、情報処理」について検討した。その結果、相対的な運動共応（K）の得点の凹凸と、相談特徴との間に有意な関係性はみられなかった。

最後に、「精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況」についても検討したが、個人の相対的プロフィールにおける運動共応（K）の得点の凹凸と、相談特徴との間には有意な関係性は検出されなかった。

●言語・指示理解、情報処理

	言語理解に苦勞	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	92.1% (105)	7.9% (9)
中間群	93.6% (103)	6.4% (7)
相対K高群	92.0% (23)	8.0% (2)

有意差

n.s.

	指示覚えられない等のミス	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	93.0% (106)	7.0% (8)
中間群	90.0% (99)	10.0% (11)
相対K高群	88.0% (22)	12.0% (3)

有意差

n.s.

	関心の範囲・視野が狭い	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	91.2% (104)	8.8% (10)
中間群	83.6% (92)	16.4% (18)
相対K高群	84.0% (21)	16.0% (4)

有意差

n.s.

	設問指示に従わない傾向	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	93.0% (106)	7.0% (8)
中間群	91.8% (101)	8.2% (9)
相対K高群	84.0% (21)	16.0% (4)

有意差

n.s.

	同時処理が苦手	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	90.4% (103)	9.6% (11)
中間群	89.1% (98)	10.9% (12)
相対K高群	96.0% (24)	4.0% (1)

有意差

n.s.

	段取りに苦勞	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	88.6% (101)	11.4% (13)
中間群	90.9% (100)	9.1% (10)
相対K高群	100.0% (25)	0.0% (0)

有意差

n.s.

	凡ミス、うっかりミス	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	93.9% (107)	6.1% (7)
中間群	91.8% (101)	8.2% (9)
相対K高群	88.0% (22)	12.0% (3)

有意差

n.s.

	マニュアル等覚えられない	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	97.4% (111)	2.6% (3)
中間群	96.4% (106)	3.6% (4)
相対K高群	92.0% (23)	8.0% (2)

有意差

n.s.

	将来(職業選択等)に対し混乱状態	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	79.8% (91)	20.2% (23)
中間群	80.9% (89)	19.1% (21)
相対K高群	88.0% (22)	12.0% (3)

有意差

n.s.

	マイペースな態度に叱責を受ける	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	75.4% (86)	24.6% (28)
中間群	74.5% (82)	25.5% (28)
相対K高群	80.0% (20)	20.0% (5)

有意差

n.s.

	TPO・場にあった言動の苦手さ		
	「なし」	言及なし	「あり」
相対K低群	17.5% (20)	58.8% (67)	23.7% (27)
中間群	16.4% (18)	67.3% (74)	16.4% (18)
相対K高群	8.0% (2)	72.0% (18)	20.0% (5)

有意差

n.s.

●精神疾患等の有無、活発さ、その他の客観的状況

	うつ、精神疾患等	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	78.1% (89)	21.9% (25)
中間群	72.7% (80)	27.3% (30)
相対K高群	88.0% (22)	12.0% (3)

有意差

n.s.

	不活発、不登校/ひきこもり経験	
	言及なし	言及・兆候あり
相対K低群	86.8% (99)	13.2% (15)
中間群	86.4% (95)	13.6% (15)
相対K高群	96.0% (24)	4.0% (1)

有意差

n.s.

	職を転々と・・・		
	「しない」	言及なし	「する」
相対K低群	14.0% (16)	79.8% (91)	6.1% (7)
中間群	6.4% (7)	85.5% (94)	8.2% (9)
相対K高群	12.0% (3)	88.0% (22)	0.0% (0)

有意差

n.s.

(3) 相談特徴の有無と適性検査結果との関連性に関する分析

<小括>

○対人関係面

●「対人苦手、いじめに遭った経験」、「対人不安」、「対人不信」といった対人関係の問題に関する相談特徴がみられたケースと、GATB、YG 検査結果との関連性を検討したところ、GATB についてはどの適性能得点も関連性がみられなかった。

●一方、YG 検査では、そのような言及があった相談ケースの個人では、抑うつ傾向が高く、劣等感が強いといった傾向が共通に現れていた。「対人不信」の相談特徴がみられたケースでは、短気で感情的という性格特徴との関連が強いことも明らかとなった。

(3) 相談特徴の有無と適性検査結果との関連性に関する分析

○対人関係面

1. 対人苦手・いじめ経験

概要

職業相談の中で、対人関係への苦手意識やいじめに遭った経験が語られた場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 71 名（男性 44、女性 26、不明 1）、言及なし群 290 名（男性 164、女性 121、不明 5）であった。

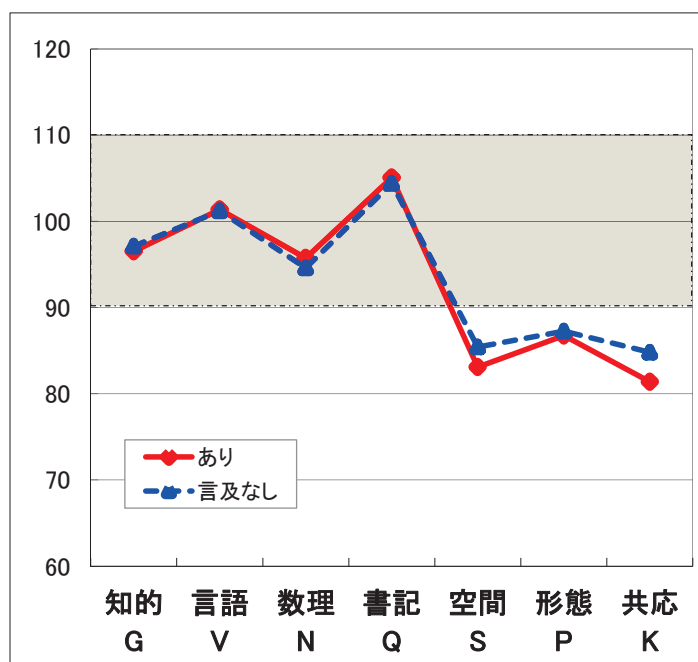
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	71	96.54	101.35	95.75	105.06	83.10	86.76	81.39	53.04
言及なし	290	97.13	101.20	94.58	104.40	85.42	87.26	84.82	50.31
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

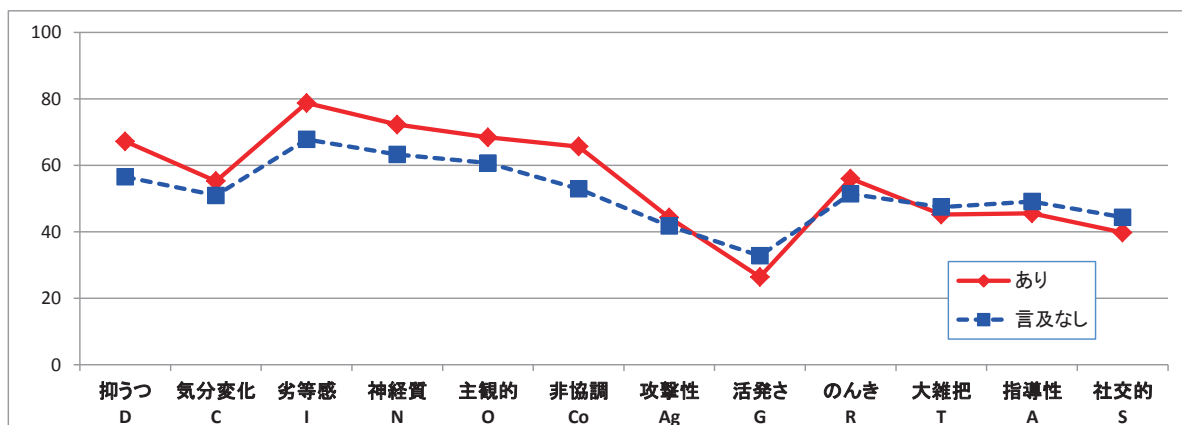
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、どの適性能においても、両群間の有意差は得られなかった。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	45	67.20	55.24	78.77	72.26	68.44	65.67
言及なし	235	56.57	50.98	67.85	63.29	60.72	52.94
有意差		*	n.s.	**	†	n.s.	**

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	44.27	26.39	56.02	45.20	45.56	39.77
言及なし	41.73	32.79	51.43	47.47	49.13	44.38
有意差	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、抑うつ（D）、劣等感（I）、非協調（Co）の3尺度で有意差が得られた。具体的には、対人関係への苦手意識やいじめに遭った経験を語った個人の場合、そうでない個人と比べて、憂うつさや不安感や悲観的な気分が強く、自信を失いがちで劣等感が強く、人を信用できずに不満が多く、対人関係に問題を抱える性質を示す傾向がある。

2. 対人不安・自信なし

概要

職業相談の中で、対人関係への不安や自信のなさが語られた場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 38 名（男性 25、女性 12、不明 1）、言及なし群 323 名（男性 183、女性 135、不明 5）であった。

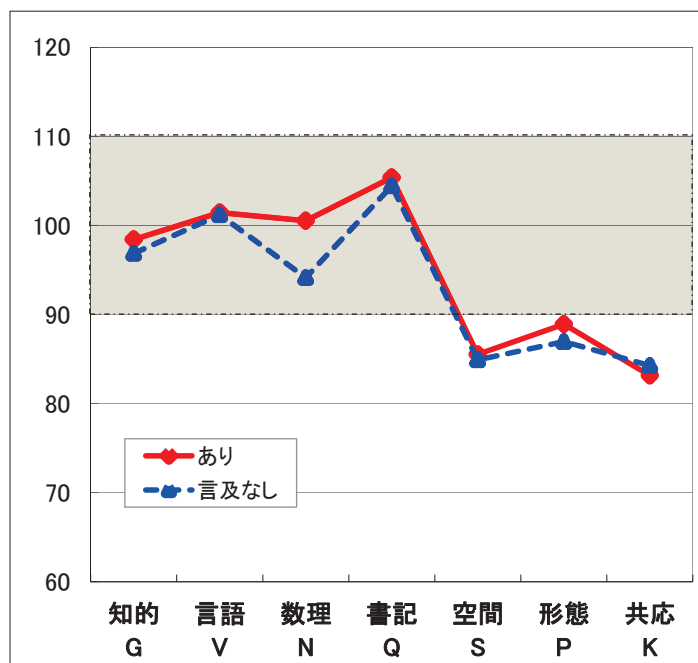
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	38	98.42	101.45	100.53	105.37	85.53	88.92	83.16	53.47
言及なし	323	96.85	101.20	94.13	104.43	84.90	86.95	84.26	50.54
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

n.s.	有意差なし
†	p<.10の有意傾向
*	p<.05の有意差あり
**	p<.01の有意差あり

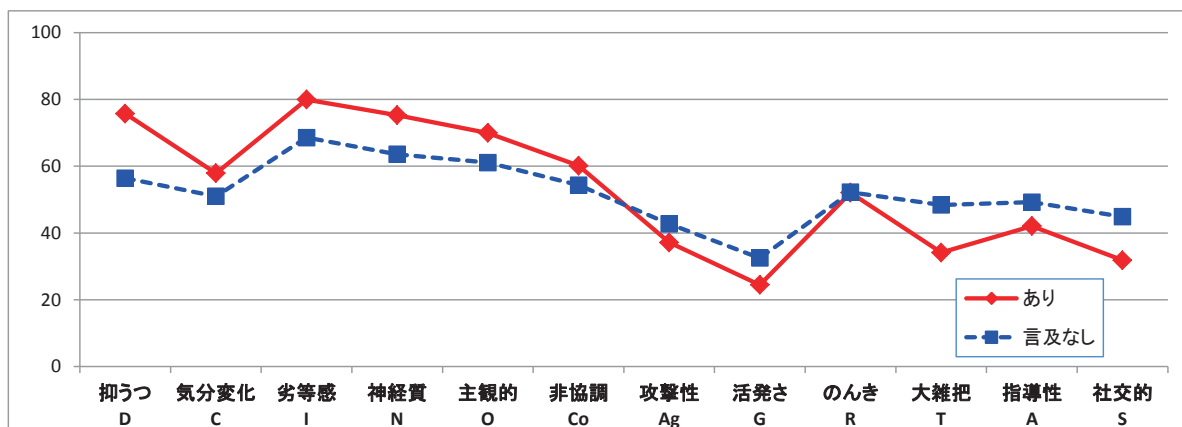
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、どの適性能においても、両群間の有意差は得られなかった。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	27	75.74	57.89	79.96	75.30	69.96	60.15
言及なし	253	56.41	51.00	68.58	63.56	61.10	54.35
有意差		**	n.s.	**	*	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	37.14	24.48	52.07	34.15	42.07	31.85
言及なし	42.74	32.50	52.20	48.40	49.24	44.88
有意差	n.s.	†	n.s.	*	n.s.	*



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、抑うつ (D)、劣等感 (I)、神経質 (N)、活発さ (G)、大雑把 (T)、社交的 (S) の 6 尺度において、有意差や、有意差に近い傾向（有意傾向）がみられた。

具体的には、対人関係への不安や自信のなさを語った個人の場合、そうでない個人と比べて、憂うつさや不安感や悲観的な気分が強く、自信を失いがちで劣等感が強く、心配性でいららする等の神経質な性質を示し、思慮深く考え込みやすいタイプで、引っ込み思案な性質を持つ。さらに、身体を動かす活動を嫌うような性質も傾向として現れる可能性がある。

3. 対人不信

概要

職業相談の中で、上司や同僚等に対する「対人不信」について語られた場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 65 名（男性 40、女性 25）、言及なし群 296 名（男性 168、女性 122、不明 6）であった。

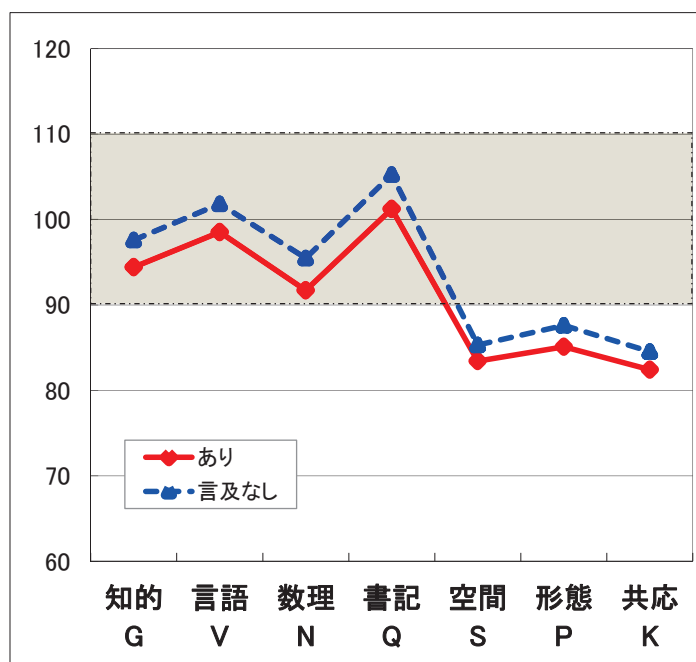
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	65	94.43	98.52	91.72	101.25	83.43	85.11	82.42	48.40
言及なし	296	97.58	101.82	95.48	105.25	85.30	87.61	84.52	51.39
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

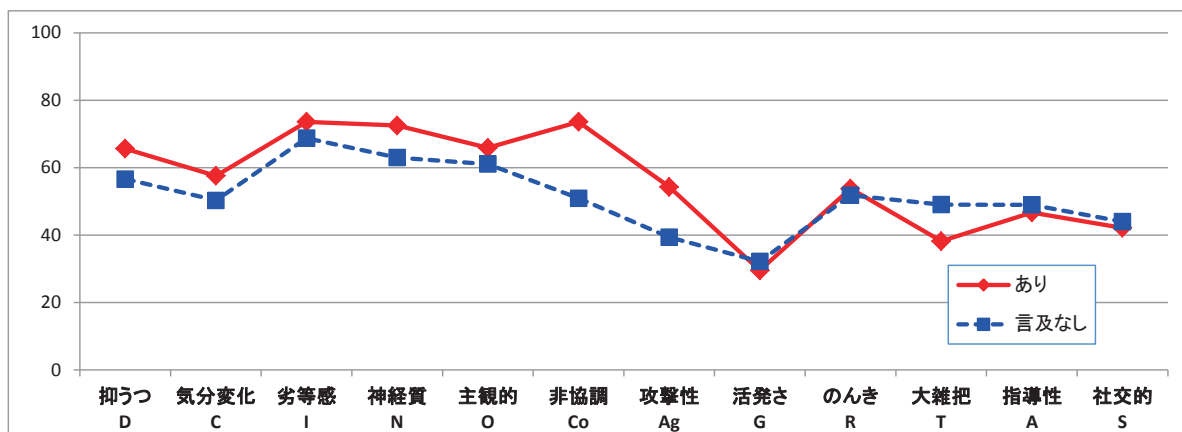
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、どの適性能においても、両群間の有意差は得られなかった。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	51	65.65	57.60	73.62	72.49	65.88	73.59
言及なし	229	56.63	50.31	68.77	63.01	61.08	50.95
有意差		†	†	n.s.	*	n.s.	**

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	54.27	29.53	53.80	38.22	46.69	42.14
言及なし	39.39	32.18	51.84	49.04	48.98	44.00
有意差	**	n.s.	n.s.	*	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果 (平均値) を比較したところ、抑うつ (D)、気分変化 (C)、神経質 (N)、非協調 (Co)、攻撃性 (Ag)、大雑把 (T) の 6 尺度において、有意差や、有意差に近い傾向 (有意傾向) がみられた。

具体的には、上司や同僚等に対する「対人不信」を語った個人の場合、そうでない個人と比べて、憂うつさがあり、気分変化が激しく、神経質な性質を示し、他人に対して不満が多く、他人の意見を聞き入れずに自分が正しいと思うことをかまわず主張する傾向があり、くよくよと考え込みやすい性質として現れる可能性がある。

(3) 相談特徴の有無と適性検査結果との関連性に関する分析

<小括>

○性格特徴面

●相談特徴の中で性格特徴面に関する言及の有無に関する面であるため、GATBのような能力的側面との関連性というよりは、YG検査による性格特徴との結びつきが強く確認された。例えば、「不遇感・劣等感」が相談特徴にみられた場合では、抑うつ傾向、劣等感の強さ、非協調的といった、やや不適応に近い側面が連動する一方で、自分の主観的な考えでいっぱいになってしまう傾向や、活動性が低いといった傾向もみられた。

●「衝動的傾向」が相談特徴にみられた場合では、短気で感情的といった攻撃的な性格特徴のほか、気軽に刺激を求めやすいといった、やや不安定な傾向との関連性もみられた。

●「プライドの高さ」がみられた相談特徴では、短気で感情的、社交的で、指導者意識も高いといった決然とした性格特徴のほか、GATBにおいて形態知覚(P)や言語能力(V)、知的能力(G)が高いという傾向も出ており、本人の能力の高さに裏打ちされた「プライドの高さ」だと見て取れる結果が得られた。

○性格特徴面

4. 他責的傾向

概要

職業相談の中で、他者（上司や同僚等）に対する他責的な指摘や言動があった場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 42 名（男性 26、女性 16）、言及なし群 319 名（男性 182、女性 131、不明 6）であった。

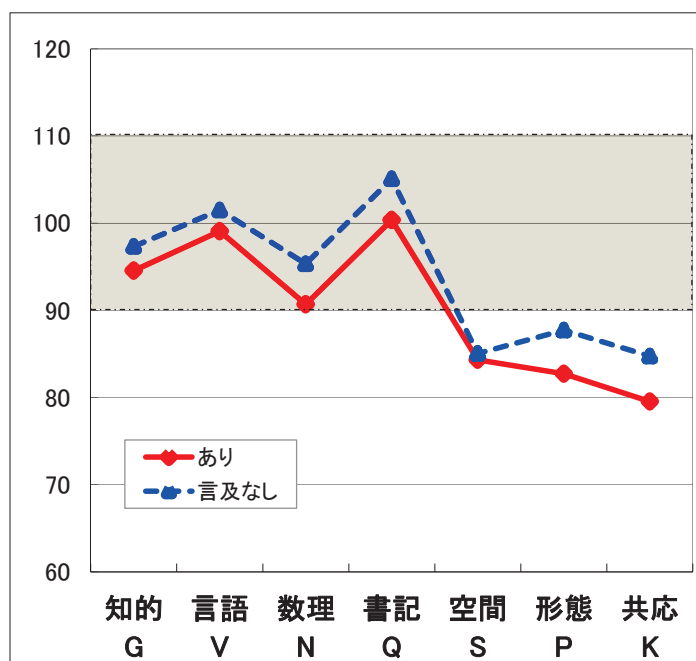
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	42	94.55	99.07	90.69	100.36	84.33	82.74	79.55	49.48
言及なし	319	97.34	101.51	95.35	105.08	85.05	87.74	84.75	51.03
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

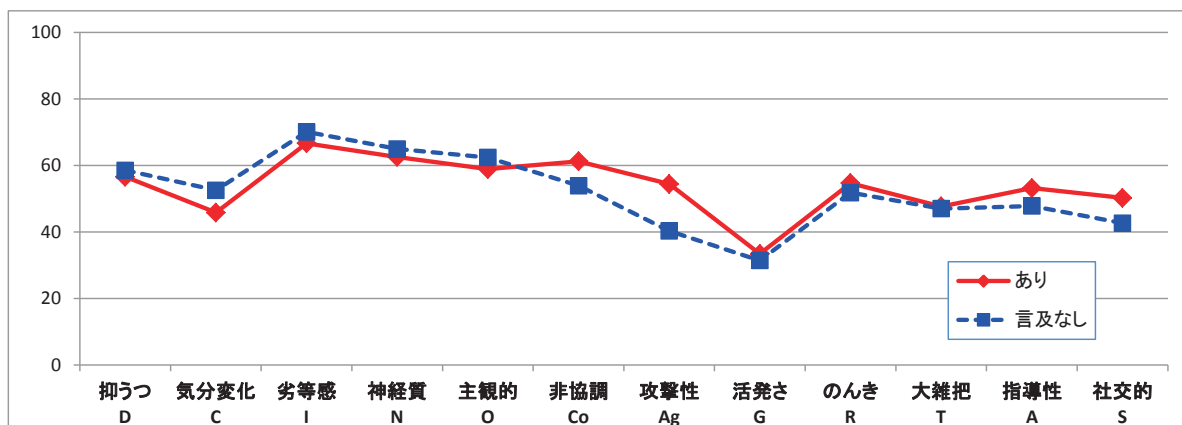
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、どの適性能においても、両群間の有意差は得られなかった。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	37	56.59	45.84	66.68	62.54	58.89	61.26
言及なし	243	58.53	52.55	70.11	64.99	62.40	53.92
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	54.44	33.42	54.68	47.67	53.18	50.24
言及なし	40.30	31.43	51.81	47.02	47.83	42.66
有意差	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、攻撃性（Ag）の 1 尺度において有意差が得られた。

具体的には、相談場面で他者に対する他責的な指摘や言動を示した個人の場合、そうでない個人と比べて、感情的で、他人の意見を聞かずに正しいと思うことをかまわず実行したり主張したりするような、攻撃的な態度として現れる傾向が強い可能性がある。

5. 不遇感・劣等感¹²

概要

職業相談の中で、自分の立場に対する不平不満や劣等感について語られた場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 127 名（男性 78、女性 47、不明 2）、言及なし群 234 名（男性 130、女性 100、不明 4）であった。

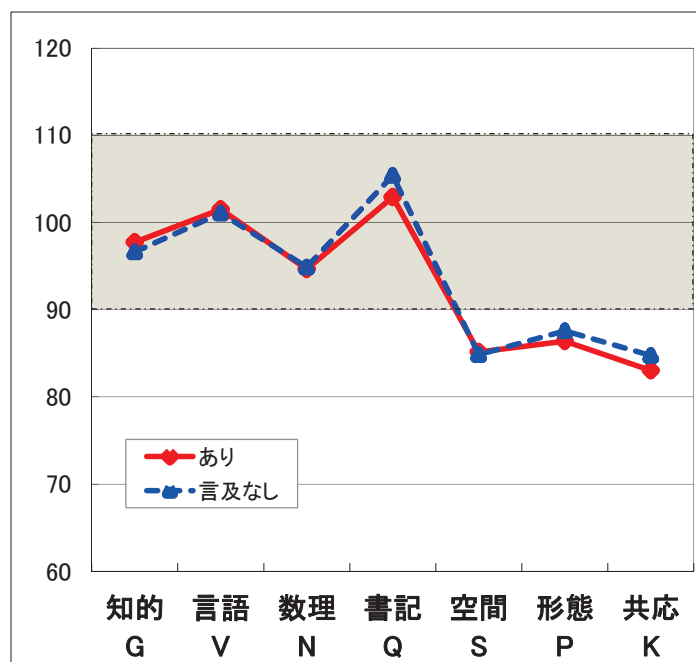
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	127	97.75	101.50	94.65	102.93	85.17	86.39	83.02	51.51
言及なし	234	96.62	101.08	94.89	105.40	84.85	87.58	84.75	50.49
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、どの適性能においても、両群間の有意差は得られなかった。

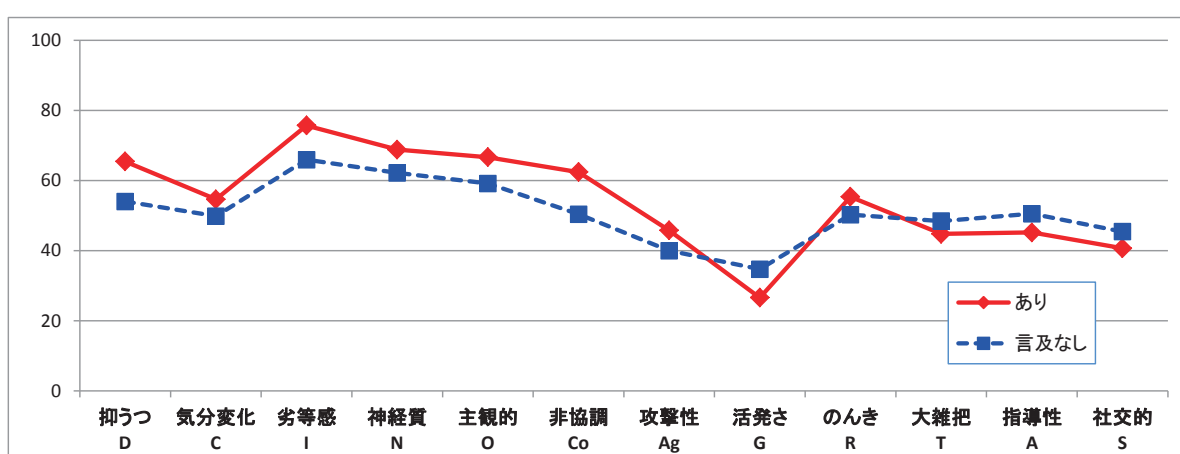


¹² 「不遇感・劣等感」とは、本研究では、本人が自分の現状の立場に対する不満や不遇感、劣等感を相談の場で語った場合にカウントしている。「不遇感」は、本人に能力が高いという自覚があり、それが周囲に正当に評価されずに不満を感じる感情が含まれ、一方で「劣等感」には、自分の能力に自信が持てず、他者と比べて低いと思う感情が含まれる。そのため、場合によっては正反対の感情が含まれてしまうことになる。本研究では、前者の「不遇感」を重視し、現状への不満を述べている場合にカウントしているが、今後の検討によっては両者を分離してカウントすることも併せて検討したいと考えている。

■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	104	65.45	54.68	75.73	68.85	66.68	62.43
言及なし	176	54.03	49.86	65.97	62.20	59.17	50.40
有意差		**	n.s.	**	†	*	**

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社交的 S
言及・兆候あり	45.81	26.60	55.37	44.79	45.21	40.68
言及なし	40.01	34.72	50.29	48.47	50.55	45.45
有意差	n.s.	*	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、抑うつ（D）、劣等感（I）、神経質（N）、主観的（O）、非協調（Co）、活発さ（G）の6尺度で有意差が得られた。

具体的には、自分の立場に対する不平不満や劣等感を語る個人の場合、そうでない個人と比べて、憂うつさを持ち、劣等感を抱きやすく、心配性で神経質でありそうにないことを空想する過敏な性質を示し、他人を信用できず、身体を動かすことに抵抗があり、自信のない消極的な態度を示す可能性がある。

6. 衝動的傾向

概要

職業相談の中で、行き当たりばったりのような衝動的な行動や言動が本人から語られた場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 35名（男性 25、女性 10）、言及なし群 326名（男性 183、女性 137、不明 6）であった。

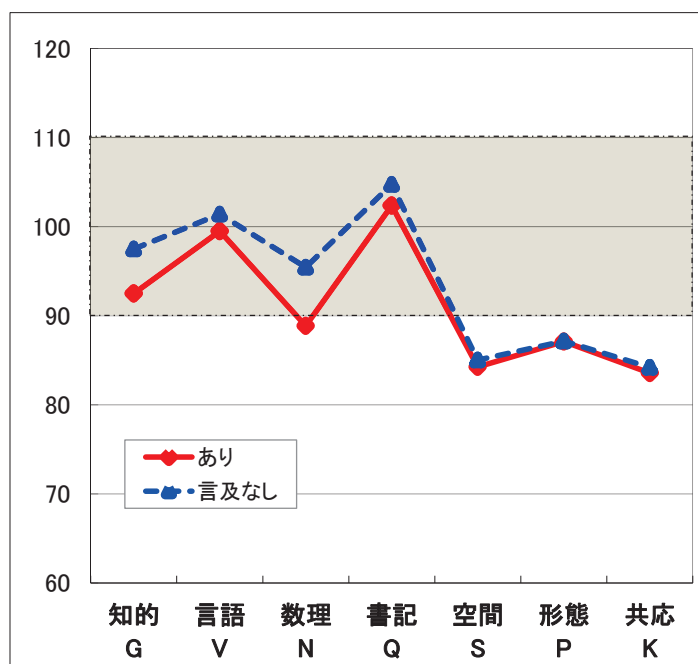
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	35	92.51	99.51	88.86	102.37	84.26	87.11	83.57	45.86
言及なし	326	97.50	101.41	95.44	104.76	85.04	87.17	84.21	51.39
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	†

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

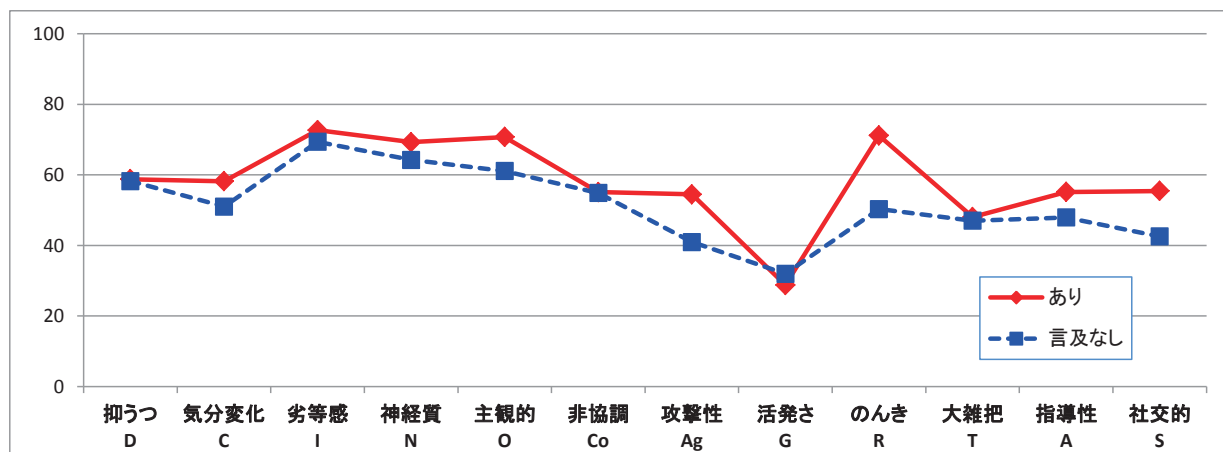
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、どの適性能においても、両群間の有意差は得られなかった。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	24	58.75	58.20	72.68	69.26	70.72	55.12
言及なし	256	58.23	51.02	69.37	64.23	61.10	54.86
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	54.48	28.76	71.15	48.04	55.16	55.42
言及なし	40.94	31.97	50.32	47.01	47.91	42.56
有意差	*	n.s.	**	n.s.	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、攻撃性（Ag）、のんきさ（R）の2尺度において、有意差や、有意差に近い傾向（有意傾向）がみられた。

具体的には、行き当たりばったりのような衝動的な言動のある個人の場合、そうでない個人と比べて、他人の意見を聞かずに正しいと思うことをかまわず実行したり主張したりするような感情的で攻撃的な態度や、気軽に刺激を求めるなど一見して活動的だが、調子に乗りすぎて軽率な行動に走りがちな性質として現れる可能性がある。

7. 社会へ出ることへの不安あり

概要

職業相談の中で、これから社会に出て働くことへの不安を訴えたり、支援者からみてその兆候があった場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 26 名（男性 14、女性 11、不明 1）、言及なし群 335 名（男性 194、女性 136、不明 5）であった。

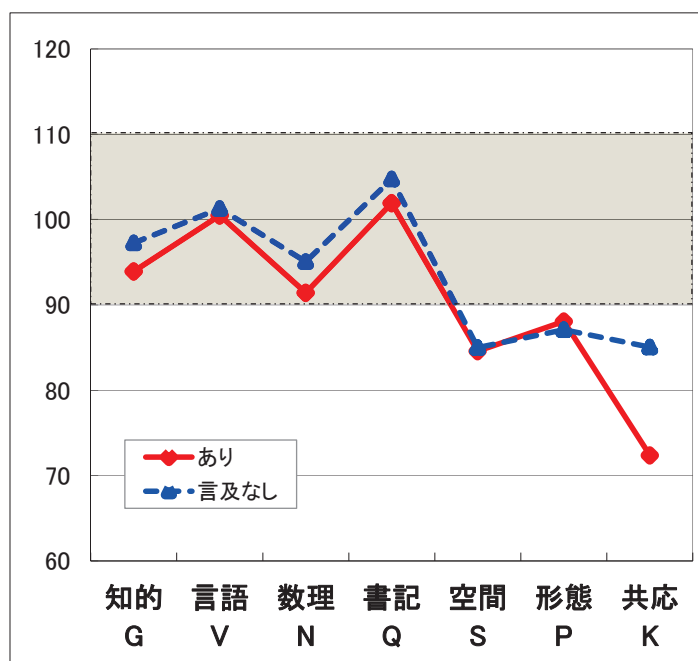
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	26	93.92	100.50	91.42	101.92	84.58	88.08	72.38	49.88
言及なし	335	97.26	101.29	95.07	104.73	84.99	87.09	85.06	50.93
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	*	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

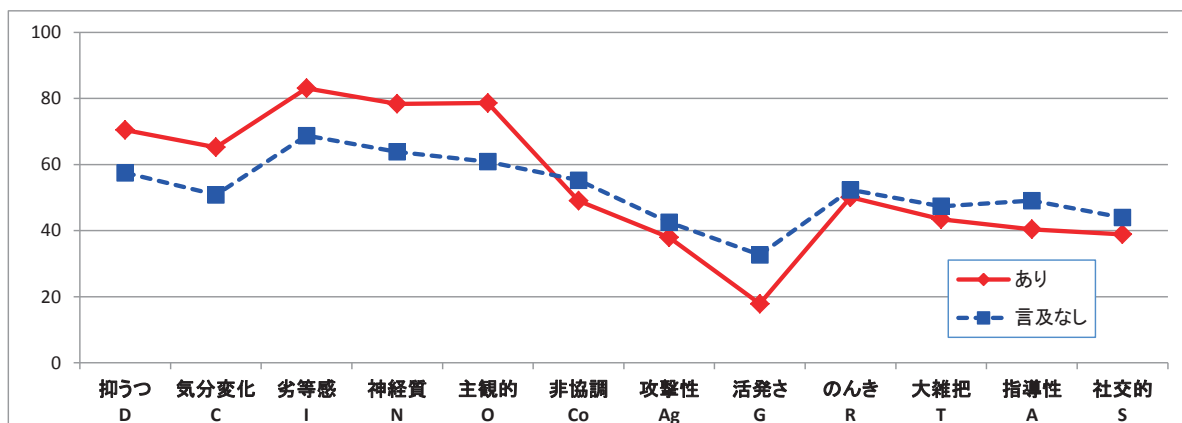
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、運動共応（K）を除く全ての適性能で、両群間の有意差は得られなかった。運動共応（K）について、これから社会に出て働くことへの不安を訴える個人は、適性能得点が有意に低い傾向があった。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	17	70.47	65.25	83.11	78.38	78.65	49.06
言及なし	263	57.49	50.84	68.75	63.86	60.88	55.25
有意差		n.s.	†	*	*	*	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	37.95	17.84	50.11	43.45	40.41	38.88
言及なし	42.50	32.68	52.34	47.38	49.08	43.98
有意差	n.s.	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果 (平均値) を比較したところ、気分変化 (C)、劣等感 (I)、神経質 (N)、主観的 (O)、活発さ (G) の 5 尺度で有意差や、有意差に近い傾向 (有意傾向) がみられた。

具体的には、これから社会に出て働くことへの不安を訴える個人の場合、そうでない個人と比べて、気分変化が激しくて驚きやすく、劣等感を抱き、心配性で神経質でありそうになり、空想する過敏な性質を示し、身体を動かすことに抵抗があり、自信のない消極的な態度を示す可能性がある。

8. プライドが高い

概要

職業相談の中で、本人の話しぶりから仕事や学歴、過去の経験に対する本人の強い自負心が支援者からみてとれた場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで 2 群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 58 名（男性 35、女性 22、不明 1）、言及なし群 303 名（男性 173、女性 125、不明 5）であった。

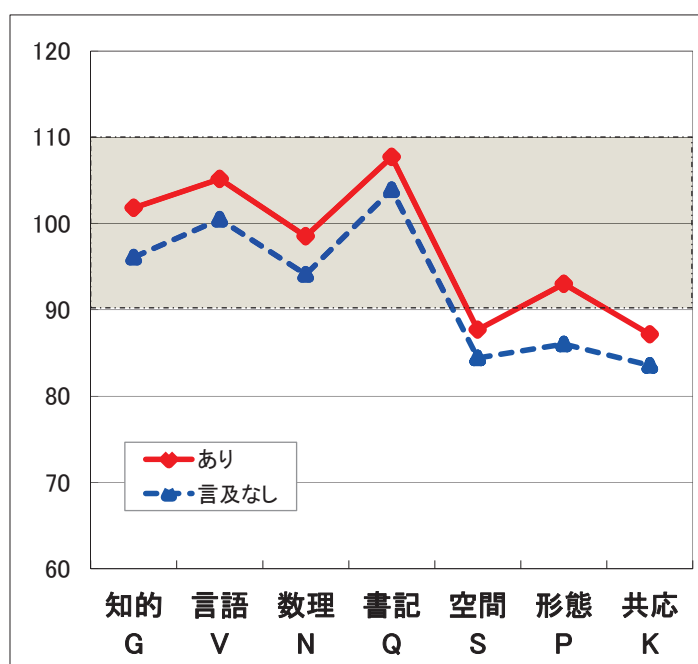
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	58	101.83	105.16	98.52	107.71	87.71	93.02	87.16	50.50
言及なし	303	96.10	100.48	94.10	103.92	84.44	86.04	83.57	50.92
有意差		†	†	n.s.	n.s.	n.s.	*	n.s.	n.s.

n.s.	有意差なし
†	p<.10の有意傾向
*	p<.05の有意差あり
**	p<.01の有意差あり

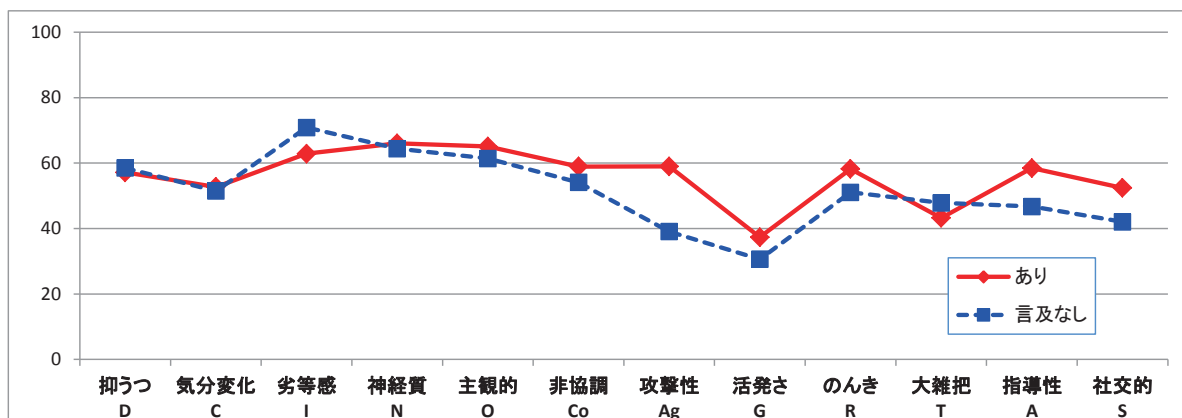
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、形態知覚 (P) については、プライドの高い個人は適性能得点が有意に高い傾向が得られた。知的能力 (G) と言語能力 (V) についても適性能得点が若干高く、有意差を生じるに近い傾向が得られた。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	44	57.14	52.72	62.87	66.03	65.07	58.94
言及なし	236	58.49	51.46	70.88	64.42	61.39	54.11
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	58.98	37.35	58.22	43.26	58.45	52.43
言及なし	39.06	30.61	51.05	47.84	46.72	42.02
有意差	**	n.s.	n.s.	n.s.	**	*



相談特徴の有無別に YG 検査結果 (平均値) を比較したところ、攻撃性 (Ag)、指導性 (A)、社交的 (S) の 3 尺度において、有意差が得られた。

具体的には、仕事や学歴、過去の経験等に対する本人の強い自負心が話しぶりからうかがえるような個人の場合、そうでない個人と比べて、他人の意見を聞かずに正しいと思うことをかまわず主張するような攻撃的態度や、世話好きで自己顕示欲が強い態度、誰とでもよく話す等、対人的接触を好む傾向が現れる可能性がある。

9. 思い込みが強い

概要

職業相談の中で、本人の話しぶりから特定の考え方や選択肢への強いこだわりがある様子が支援者からみてとれた場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 128 名（男性 74、女性 53、不明 1）、言及なし群 233 名（男性 134、女性 94、不明 5）であった。

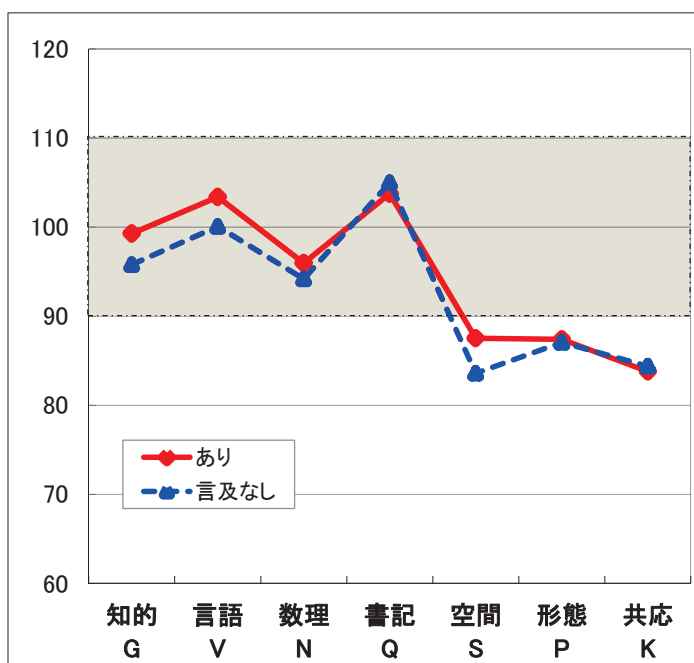
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	128	99.27	103.38	95.95	103.73	87.52	87.38	83.76	51.27
言及なし	233	95.78	100.05	94.18	104.97	83.56	87.04	84.36	50.62
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

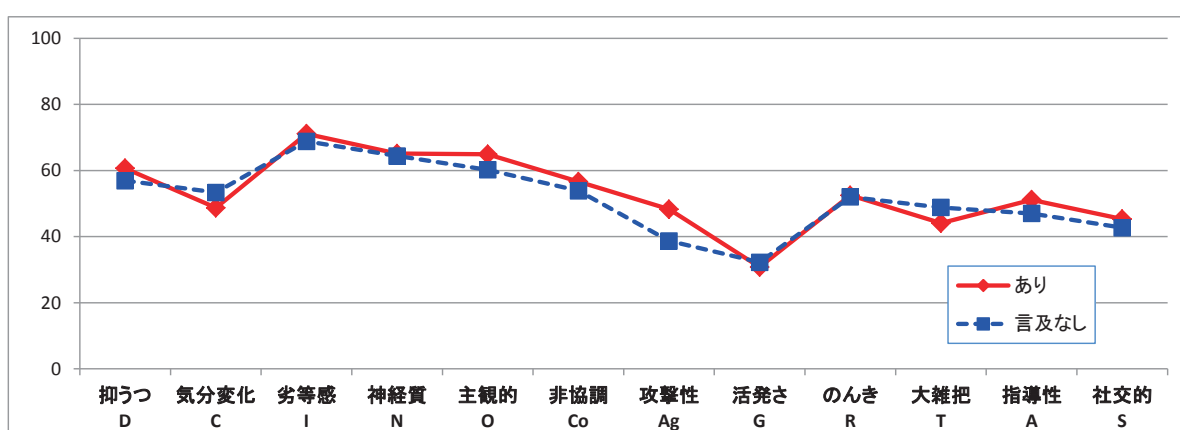
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、どの適性能においても、両群間の有意差は得られなかった。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	102	60.65	48.71	71.11	65.12	64.90	56.64
言及なし	178	56.92	53.36	68.83	64.41	60.23	53.88
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	48.27	30.78	52.49	44.08	51.13	45.32
言及なし	38.68	32.22	52.02	48.84	47.02	42.70
有意差	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、攻撃性（Ag）の 1 尺度において、有意差が得られた。

具体的には、本人がある特定の考え方や選択肢への強いこだわりをみせる個人の場合、そうでない個人と比べて、感情的で、他人の意見を聞かずに正しいと思うことをかまわず実行したり主張したりするような、攻撃的な態度として現れる傾向が強い可能性がある。

10. 社会性・社交性の有無

概要

相談場面で聞かれた本人の主訴や思考・行動特徴から、社会性や社交性が確認できる場合を社会性・社交性「あり」群とした。逆に、社会性や社交性がないと支援者側から推察できた場合を社会性・社交性「なし」群、そのような言及が相談記録に残されていなかった場合を言及なし群とする3群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、社会性・社交性がないと推察できた群 61 名（男性 39、女性 22）、言及なし群 257 名（男性 141、女性 111、不明 5）、社会性・社交性が確認できた群 43 名（男性 28、女性 14、不明 1）であった。

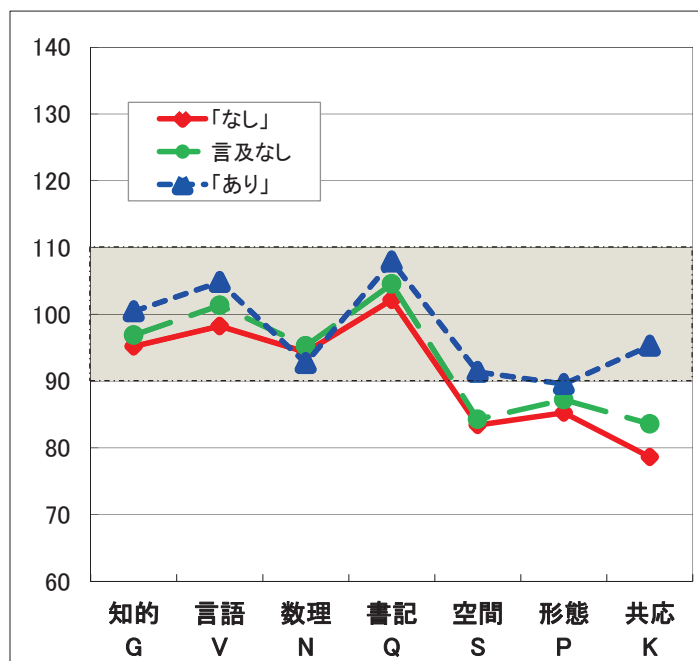
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
「なし」	61	95.18	98.21	94.34	102.16	83.41	85.25	78.62	51.79
言及なし	257	96.88	101.34	95.27	104.53	84.26	87.21	83.59	51.43
「あり」	43	100.44	104.84	92.70	107.88	91.37	89.56	95.28	46.05
群間有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	**	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

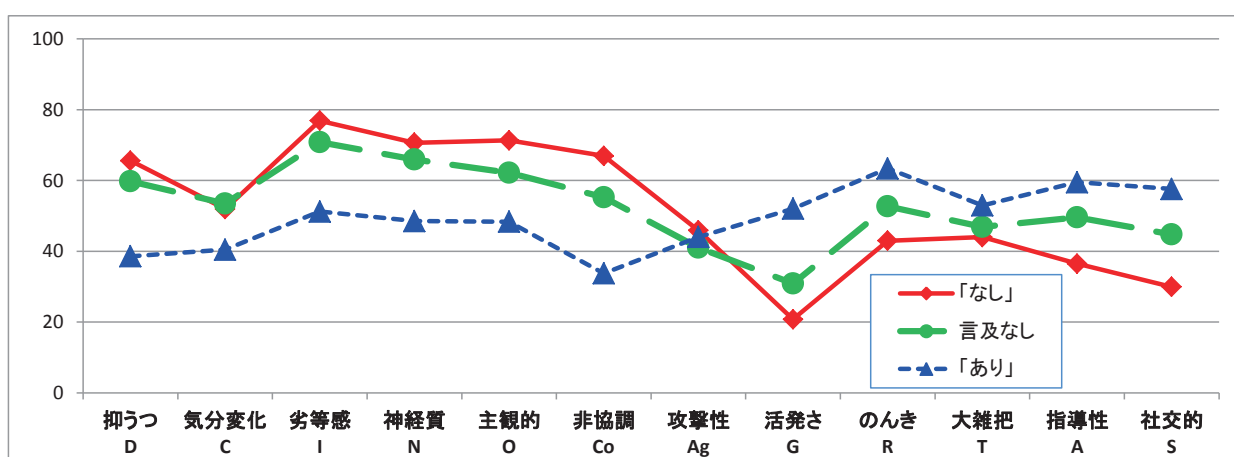
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、運動共応（K）を除く全ての適性能で、両群間の有意差は得られなかった。運動共応（K）について、社会性・社交性が確認された個人は、そうでなかった個人と比べて有意に得点が高い傾向があった。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
「なし」	48	65.58	51.94	76.90	70.65	71.33	66.93
言及なし	199	59.78	53.46	70.83	65.94	62.14	55.25
「あり」	33	38.58	40.45	51.22	48.53	48.33	33.75
群間有意差		**	†	**	**	**	**

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社交的 S
「なし」	45.86	20.78	42.96	44.00	36.50	29.96
言及なし	41.01	30.87	52.68	46.92	49.59	44.74
「あり」	44.03	52.03	63.39	52.94	59.50	57.59
群間有意差	n.s.	**	**	n.s.	**	**



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、攻撃性（Ag）を除く全ての尺度において、有意差または有意に近い傾向（有意傾向）が得られた。

具体的には、相談場面の様子で社会性や社交性が確認された個人は、社会性や社交性がなると推察された個人と比べて、抑うつ状態が低く、劣等感が低く、心配性でいららするなどの神経質な兆候が少なく、客観的・現実的にものごとを考える性質があり、協調的で満ち足りた様子があり、テキパキして活発で、気軽で外向的な性質があり、考え方が楽天的で、世話好き、対人的接触を好む傾向がある。気分変化（C）に関しては有意に近い傾向ではあるが、社会性や社交性が確認された個人は、相談記録にそのような言及のなかった個人と比べて、気分が安定して理性的な傾向が示されている。

11. 温厚さ・おだやかさ・快活さの有無

概要

相談場面での支援者による所感の中で、本人の受け答えの様子や性格、印象等について、温厚さ・おだやかさ・快活さ等が確認できる場合を、温厚さ・おだやかさ・快活さ「あり」群とし、逆に、温厚さ・おだやかさ・快活さが明らかにみられなかった場合を「なし」群、そのような言及が相談記録に残されていなかった場合を言及なし群とする3群に分け、GATB適性得点平均値とY-G性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、温厚さ・おだやかさ・快活さがないと推察できた群22名（男性12、女性10）、言及なし群280名（男性163、女性113、不明4）、温厚さ・おだやかさ・快活さが確認できた群59名（男性33、女性24、不明2）であった。

適性検査結果の特徴について

■特徴有無別のGATB平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
「なし」	22	97.32	104.18	97.18	103.36	85.27	90.50	81.55	45.14
言及なし	280	96.60	100.89	94.76	104.87	84.28	87.32	84.51	51.99
「あり」	59	98.88	101.73	94.12	103.36	88.10	85.17	83.36	47.59

群間有意差

n.s.

n.s.

n.s.

n.s.

n.s.

n.s.

n.s.

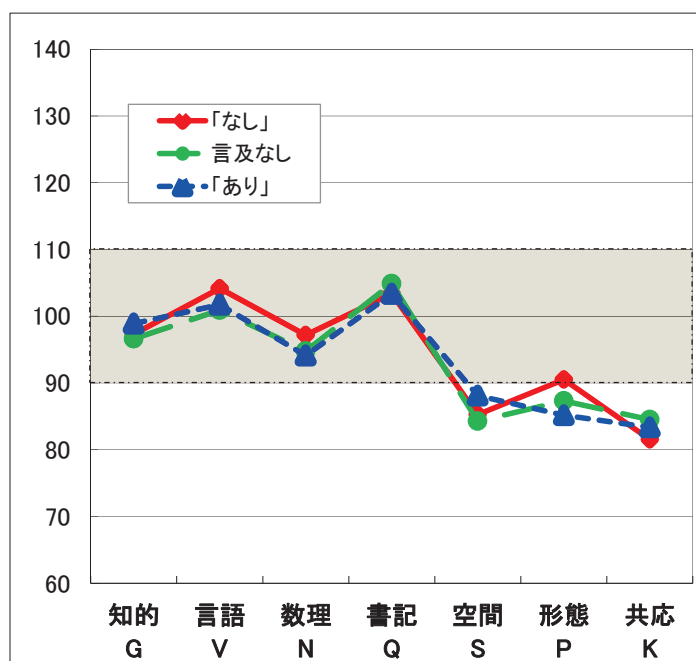
n.s.

†

n.s.	有意差なし
†	p<.10の有意傾向
*	p<.05の有意差あり
**	p<.01の有意差あり

相談特徴の有無別にGATB平均値を比較したところ、どの適性能においても、両群間の有意差は得られなかった。

相対的プロフィールの凹凸の大きさについて、言及なし群は他群よりも凹凸がやや大きい傾向がみられたが、有意傾向にとどまっており、有意差は得られていない。



■特徴有無別のY-G性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
「なし」	18	63.33	56.17	69.32	69.94	66.95	69.33
言及なし	219	59.67	52.04	71.54	66.23	62.99	56.37
「あり」	43	49.05	47.79	60.41	54.87	55.09	41.16

群間有意差

n.s.

n.s.

*

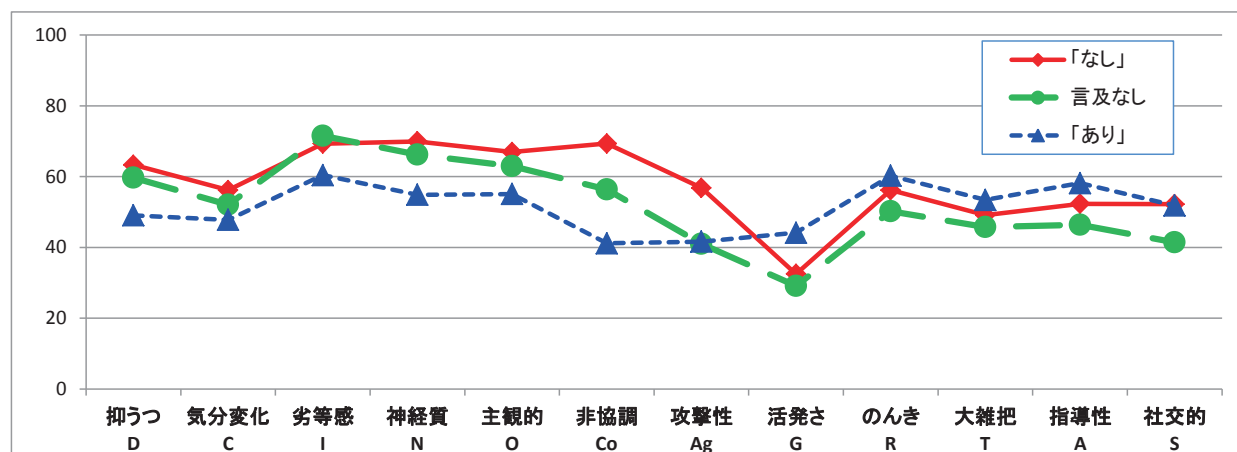
*

n.s.

**

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
「なし」	56.80	32.47	56.17	49.11	52.30	52.22
言及なし	41.02	29.12	50.22	45.73	46.37	41.43
「あり」	41.61	44.13	60.26	53.42	58.17	51.83

群間有意差 † ** † n.s. * †



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、劣等感 (I)、神経質 (N)、非協調 (Co)、攻撃性 (Ag)、活発さ (G)、のんきさ (R)、指導性 (A)、社会的 (S) の 8 尺度において、有意差または有意に近い傾向（有意傾向）が得られた。

具体的には、相談場面で温厚さ・おだやかさ・快活さが確認された個人は、そのような言及が相談記録に書かれていなかった個人と比べて、劣等感が低く、心配性でいららするなどの神経質な兆候が少なく、協調的で満ち足りた様子があり、テキパキして活発で、気軽で外向的な性質があり、世話好きで、対人的接触を好む傾向がある。攻撃性 (Ag) に関しては、温厚さ・おだやかさ・快活さが確認された個人は、温厚さ等がない個人と比べて、人に構わず実行するような決断力や攻撃的な態度が少なく、控えめな傾向が示されている。

(3) 相談特徴の有無と適性検査結果との関連性に関する分析

<小括>

○行動・現状面：①運動・体力、作業面

●「体力への自信や運動の得意さ」、「動きの遅さ」、「手先の器用さ」といった運動や作業面に関する相談特徴については、GATB、中でも運動共応（K）との関連性が特に大きかった。

●特に、「動きの遅さ」が相談特徴でみられたケースでは、運動共応（K）だけでなく、すべての適性能について低得点である傾向がみられた。GATBは、制限時間内にできる限り多くの設問を正確に解くというパワー検査の要素があるため、動きが遅いことによって、運動共応（K）だけでなく、他の設問でもゆっくり解いたことで、結果として得点が伸びなかった可能性もある。YG検査の結果との関連性は、本人の遅さや運動面での不得意がみられる場合に一般的な活動性が低くなることや、気軽に刺激を求める傾向が低くなるといった結果が確認された。

○行動・現状面：①運動・体力、作業面

12. 体力の自信・運動の得意さ

概要

職業相談の中で、自分の体力への自信や運動の得意さなどが語られたり、その兆候があった場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値とY-G性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群25名（男性20、女性4、不明1）、言及なし群336名（男性188、女性143、不明5）であった。

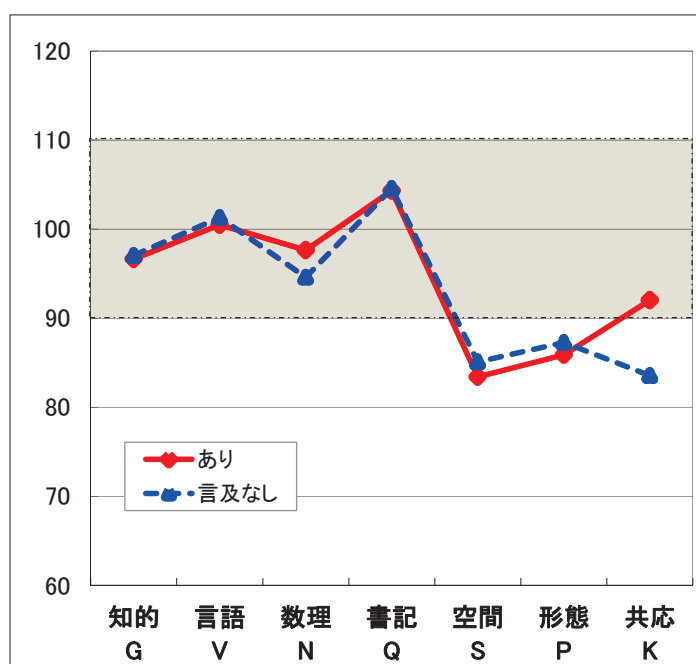
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別のGATB平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	25	96.64	100.48	97.64	104.32	83.40	85.88	92.00	48.28
言及なし	336	97.04	101.29	94.60	104.55	85.08	87.26	83.56	51.04
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	†	n.s.

n.s.	有意差なし
†	p<.10の有意傾向
*	p<.05の有意差あり
**	p<.01の有意差あり

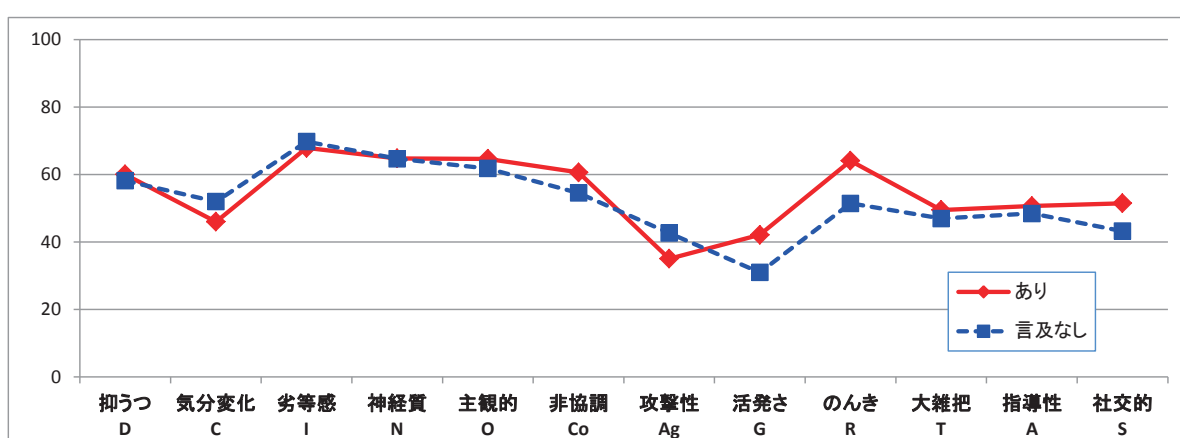
相談特徴の有無別にGATB平均値を比較したところ、運動共応（K）を除く全ての適性能で、両群間の有意差は得られなかった。運動共応（K）について、自分の体力への自信や運動の得意さを語る個人は、適性能得点が若干高く、有意差を生じるに近い傾向が得られた。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	16	60.00	46.00	67.88	64.76	64.63	60.63
言及なし	264	58.17	51.98	69.77	64.67	61.78	54.54
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	35.06	42.11	64.06	49.50	50.67	51.47
言及なし	42.65	31.00	51.45	46.96	48.44	43.22
有意差	n.s.	n.s.	†	n.s.	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、のんきさ（R）の 1 尺度で有意差に近い傾向（有意傾向）がみられた。

具体的には、自分の体力への自信や運動の得意さなどを語る個人の場合、そうでない個人と比べて、人と一緒にはしゃいだり、気軽に刺激を求める活動的で外向的な性質として現れる可能性がある。

13. 動きの遅さ

概要

職業相談の中で、自らが「動きの遅さ」について語ったり、支援者からみてその兆候があった場合（動作が鈍い、問いかけへの反応が鈍い等）と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 65 名（男性 41、女性 19、不明 5）、言及なし群 296 名（男性 167、女性 128、不明 1）であった。

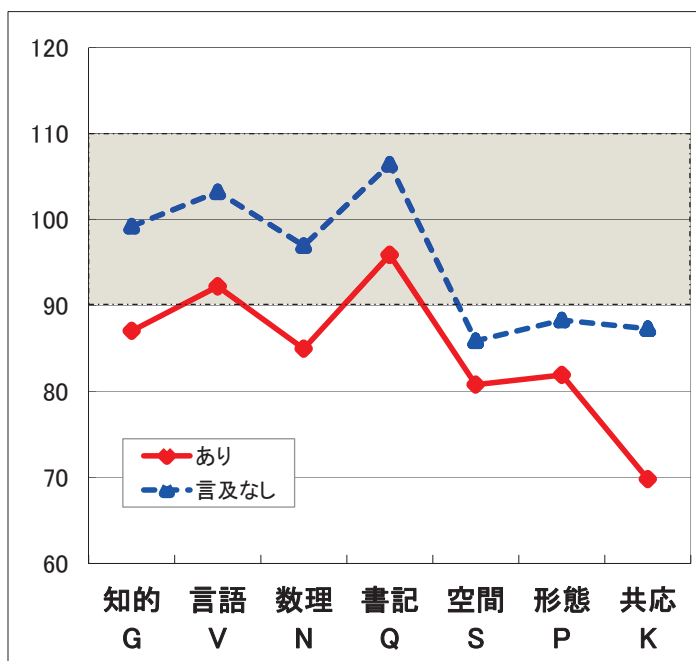
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	65	87.05	92.23	84.97	95.89	80.78	81.92	69.80	51.77
言及なし	296	99.21	103.21	96.97	106.43	85.88	88.31	87.29	50.65
有意差		**	**	**	**	†	*	**	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

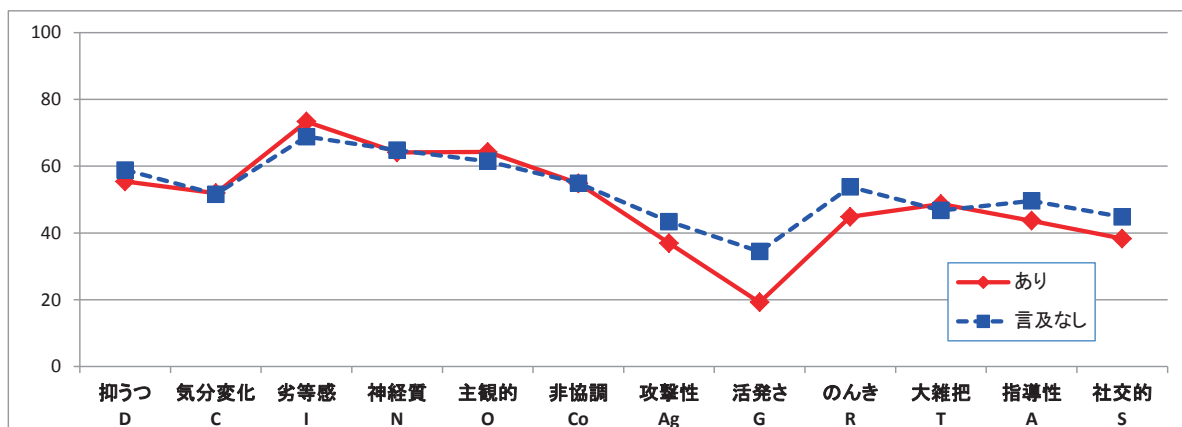
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、全ての適性能において、動きの遅さがみられる個人は、適性能得点が有意に低い、あるいは有意差に近い程度の低さが見られることが確認された。特に、運動共応（K）は他の適性能でみられる差異よりも大きい傾向があった。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	48	55.40	51.92	73.36	64.10	64.25	54.82
言及なし	232	58.87	51.61	68.87	64.79	61.47	54.89
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	36.93	19.23	44.85	48.67	43.66	38.31
言及なし	43.40	34.45	53.80	46.76	49.61	44.81
有意差	n.s.	**	*	n.s.	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、活発さ（G）とのんきさ（R）の2尺度で有意差が得られた。

具体的には、動きの遅さがみられる個人の場合、そうでない個人と比べて、身体を動かすことに抵抗があり、自信がなく消極的な態度であったり、沈滞気味で必要以上に慎重になるといった優柔不断な性質がみられる可能性がある。

14. 手先の器用さ、コツコツする作業の得意さの有無

概要

相談場面で聞かれた本人の主訴や思考・行動特徴から、手先の器用さやコツコツする作業の得意さが確認できる場合を手先の器用さやコツコツする作業の得意さ「あり」群とし、逆に手先の器用さやコツコツする作業の得意さが無い（つまり不器用、不得意である）と支援者側から推察できた場合を手先の器用さやコツコツする作業の得意さ「なし」群、そのような言及が相談記録に残されていなかった場合を言及なし群とする3群に分け、GATB適性能得点平均値とY-G性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、手先の器用さやコツコツする作業の得意さが無いと推察できた群38名（男性29、女性8、不明1）、言及なし群308名（男性171、女性132、不明5）、手先の器用さやコツコツする作業の得意さが確認できた群15名（男性8、女性7）であった。

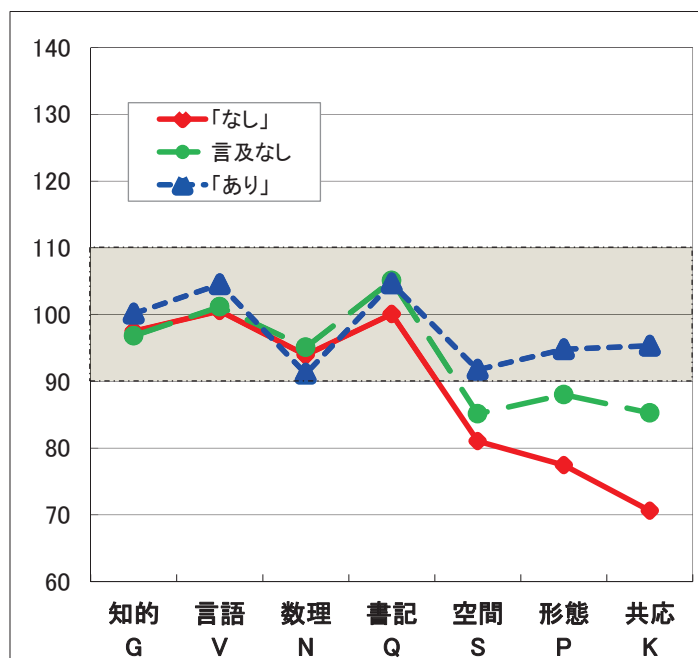
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別のGATB平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
「なし」	38	97.50	100.55	93.95	100.08	81.03	77.45	70.61	54.68
言及なし	308	96.81	101.15	95.09	105.07	85.12	87.99	85.27	50.70
「あり」	15	100.13	104.53	91.13	104.67	91.73	94.80	95.33	44.20
群間有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	*	**	n.s.

n.s.	有意差なし
†	p<.10の有意傾向
*	p<.05の有意差あり
**	p<.01の有意差あり

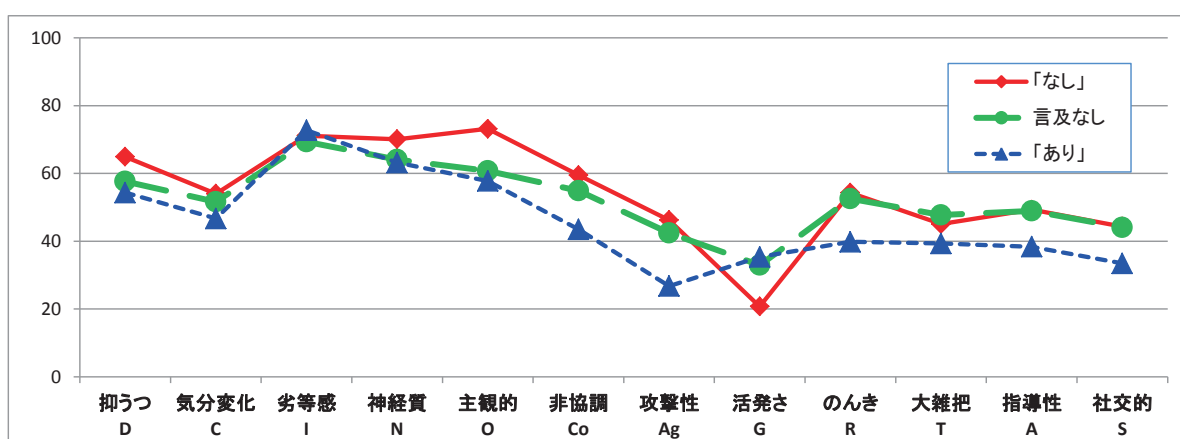
相談特徴の有無別にGATB平均値を比較したところ、形態知覚（P）、運動共応（K）以外の適性能では両群間の有意差は得られなかった。形態知覚（P）と運動共応（K）については、手先の器用さやコツコツする作業の得意さが確認された個人は、不器用・不得意な個人と比べて有意に得点が高い傾向があった。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
「なし」	29	64.93	54.00	71.17	70.10	73.17	59.50
言及なし	239	57.67	51.65	69.32	64.10	60.76	54.87
「あり」	12	54.33	46.69	72.75	63.19	57.75	43.50
群間有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	†	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
「なし」	46.23	20.74	54.30	45.06	49.29	44.30
言及なし	42.42	32.91	52.53	47.76	48.93	44.06
「あり」	26.75	35.36	39.83	39.33	38.36	33.45
群間有意差	n.s.	†	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、主観的（O）、活発さ（G）の 2 尺度において、有意に近い傾向（有意傾向）が得られたが、その他の尺度では関連性がみられなかった。

具体的には、相談場面の様子で手先の器用さやコツコツする作業の得意さが確認された個人は、不器用さや不得意さが確認された個人と比べて、客観的で現実的にもものごとを考える性質があり、動作がテキパキとして自信に満ち活動的な態度を示す傾向がある。ただし、現時点の傾向としては頑健な結果ではなく、「あり」群の観測数も限られている（N=15）ことから、今後ケース収集が進むことによって結論が明確化するものと思われる。

(3) 相談特徴の有無と適性検査結果との関連性に関する分析

<小括>

○行動・現状面：②言語・指示理解、情報処理

●相談の場で、情報処理面、言語処理面等の言及や兆候がみられた場合については、GATBとの関連性がみられる項目も一部にあった。例えば、「言語理解に苦勞」する特徴が得られた個人や、「設問指示に従わない傾向」がみられた個人は、そのような言及や兆候がなかった個人と比べて、特に認知機能群（G, V, N, Q）での得点が低くなる傾向があり、いわゆる知的能力に影響する特徴であったことがうかがえる。

●GATB で示す能力とは直接的な関連性がみられなかったが、YG 検査による性格特徴との関連がみられたものとして、例えば、のんきさ（気軽に刺激を求める傾向）と「凡ミス・うっかりミス」との関連性が確認された。

●「マイペースな態度に叱責を受けた」経験を話した個人は、劣等感が強く、一般的な活動性が低く、のんきさ（気軽に刺激を求める傾向）が高いという結果が得られ、本人の言動と性格特徴との間に一定の整合性がみられた。

○行動・現状面：②言語・指示理解、情報処理

15. 言語理解に苦勞

概要

職業相談の中で、人の話を聞いたり理解したりするのに苦勞していることが語られたり、支援者からみてその兆候があった場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 29 名（男性 15、女性 14）、言及なし群 332 名（男性 193、女性 133、不明 6）であった。

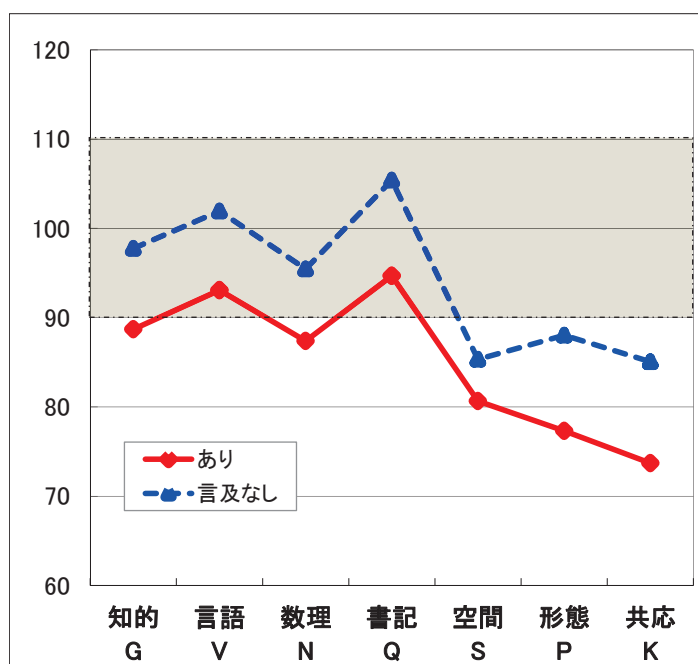
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	29	88.69	93.07	87.38	94.69	80.66	77.31	73.69	48.69
言及なし	332	97.74	101.94	95.45	105.39	85.34	88.02	85.06	51.04
有意差		†	*	†	*	n.s.	*	*	n.s.

n.s.	有意差なし
†	p<.10の有意傾向
*	p<.05の有意差あり
**	p<.01の有意差あり

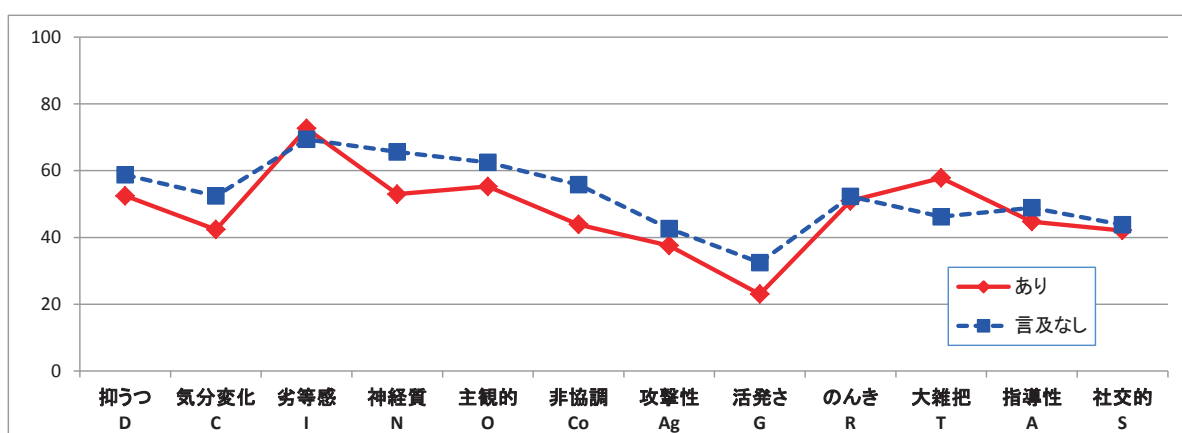
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、空間判断力 (S) を除く全ての適性能において、言語理解に苦勞のある個人は、適性能得点が有意に低い、あるいは有意差に近い程度の低さが見られることが確認された。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	21	52.48	42.38	72.61	52.95	55.27	43.86
言及なし	259	58.75	52.42	69.40	65.60	62.50	55.81
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	†	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社交的 S
言及・兆候あり	37.55	23.04	50.96	57.82	44.74	42.09
言及なし	42.64	32.48	52.30	46.21	48.90	43.81
有意差	n.s.	n.s.	n.s.	†	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、神経質（N）と大雑把（T）の2尺度で有意差に近い傾向（有意傾向）がみられた。

具体的には、人の話を聞いたり理解したりするのに苦勞する個人の場合、そうでない個人と比べて、楽天的な性質を示したり、ものごとくに無頓着で、場合によっては計画性や用心深さに欠ける性質として現れる可能性がある。

16. 指示覚えられない・ミス

概要

職業相談の中で、上司や先輩等からの作業指示を覚えられなかったり、指示の聞き違いでミスをしたという話が語られたり、支援者からみてその兆候があった場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 30 名（男性 15、女性 14、不明 1）、言及なし群 331 名（男性 193、女性 133、不明 5）であった。

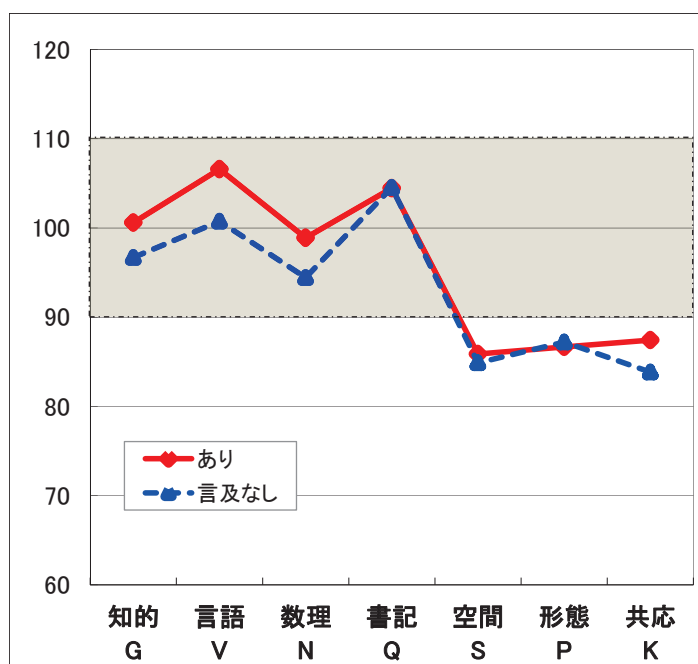
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	30	100.60	106.60	98.90	104.47	85.87	86.67	87.43	52.70
言及なし	331	96.69	100.74	94.44	104.54	84.88	87.21	83.85	50.68
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

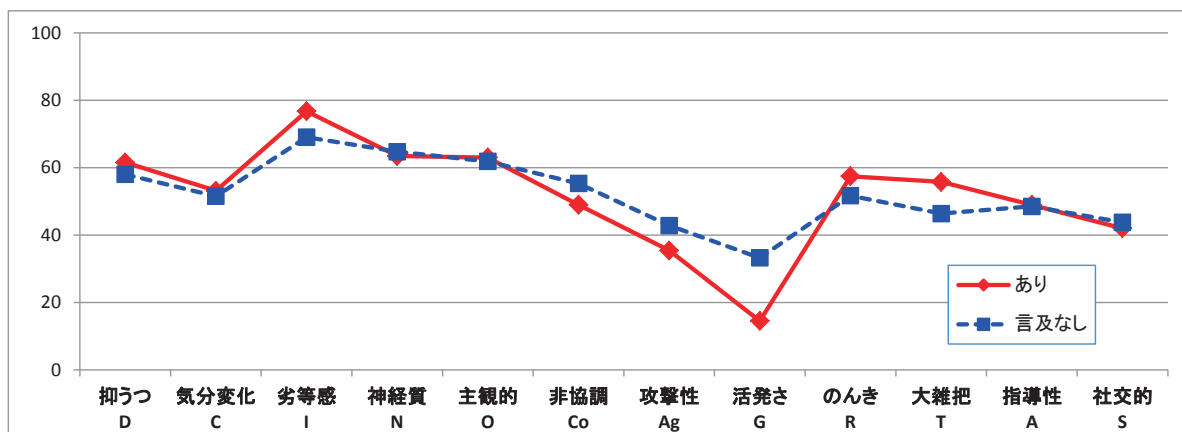
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、どの適性能においても、両群間の有意差は得られなかった。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	20	61.55	53.15	76.74	63.47	63.00	49.00
言及なし	260	58.02	51.55	69.04	64.76	61.86	55.33
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	35.44	14.54	57.44	55.77	49.00	42.00
言及なし	42.81	33.26	51.69	46.38	48.52	43.80
有意差	n.s.	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、活発さ（G）の 1 尺度で有意差が得られた。

具体的には、上司や先輩等からの作業指示を覚えられなかったり、指示の聞き違いでミスをしたという経験を語った個人の場合、そうでない個人と比べて、身体を動かすことに抵抗があり、自信がなく、消極的な態度である可能性がある。

17. 関心の範囲・視野が狭い

概要

職業相談の中で、関心の範囲が極端に狭い様子だったり、視野の狭い言動や兆候が支援者からみてとれた場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性
能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、
言及・兆候あり群 39 名（男性 23、女性 16）、言及なし群 322 名（男性 185、女性 31、不明 6）
であった。

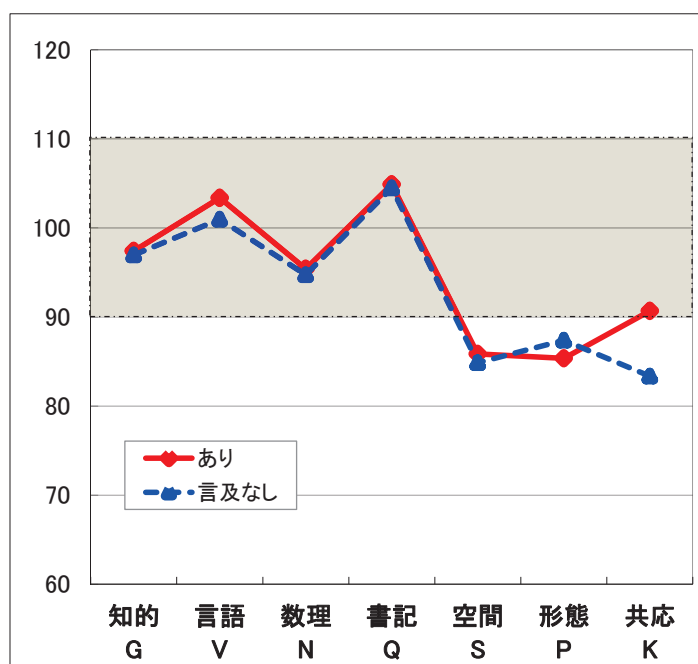
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	39	97.41	103.36	95.41	104.87	85.85	85.36	90.67	49.38
言及なし	322	96.97	100.97	94.73	104.49	84.86	87.38	83.35	51.03
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	†	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

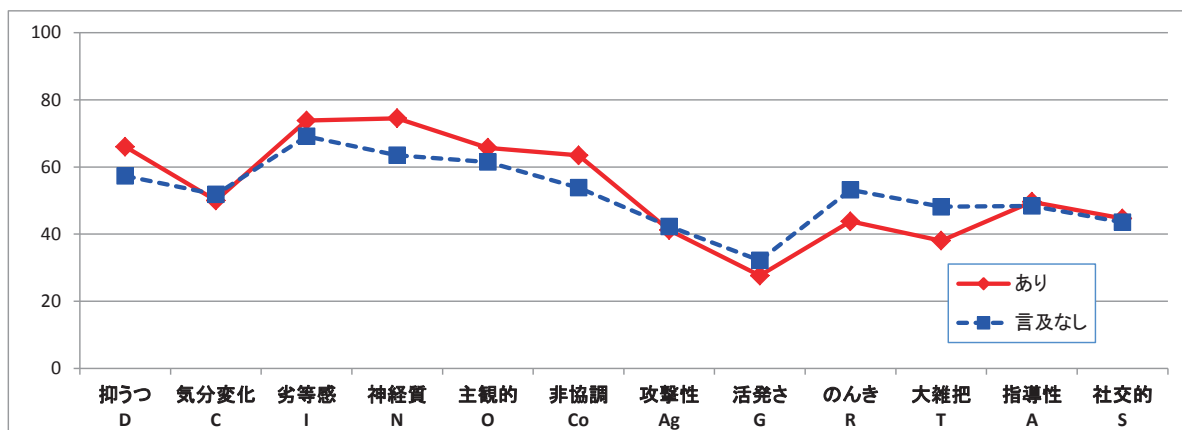
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、運動共応（K）を除く全ての適性能で、両群間の有意差は得られなかった。運動共応（K）について、関心の範囲や視野の狭い個人は適性能得点が有意に高い傾向があった。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	31	66.03	50.03	73.84	74.50	65.73	63.47
言及なし	252	57.34	51.86	69.15	63.52	61.50	53.86
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	*	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	41.19	27.65	43.81	38.03	49.63	44.65
言及なし	42.31	32.18	53.20	48.17	48.43	43.54
有意差	n.s.	n.s.	*	†	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果 (平均値) を比較したところ、神経質 (N)、のんきさ (R)、大雑把 (T) の 3 尺度において、有意差や、有意差に近い傾向 (有意傾向) がみられた。

具体的には、関心の範囲や視野が極端に狭い言動を示す個人の場合、そうでない個人と比べて、心配性でいらいらするなど神経質で、沈滞気味で必要以上に慎重に考え込みやすく、行動が不活発になりがちな傾向として現れる可能性がある。

18. 設問指示に従わない傾向

概要

職業相談において書類記入の指示にうまく従えなかったり、適性検査実施中に指示を守らずに自己流の判断で行動するような事実があった場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 25 名（男性 17、女性 8）、言及なし群 336 名（男性 191、女性 139、不明 6）であった。

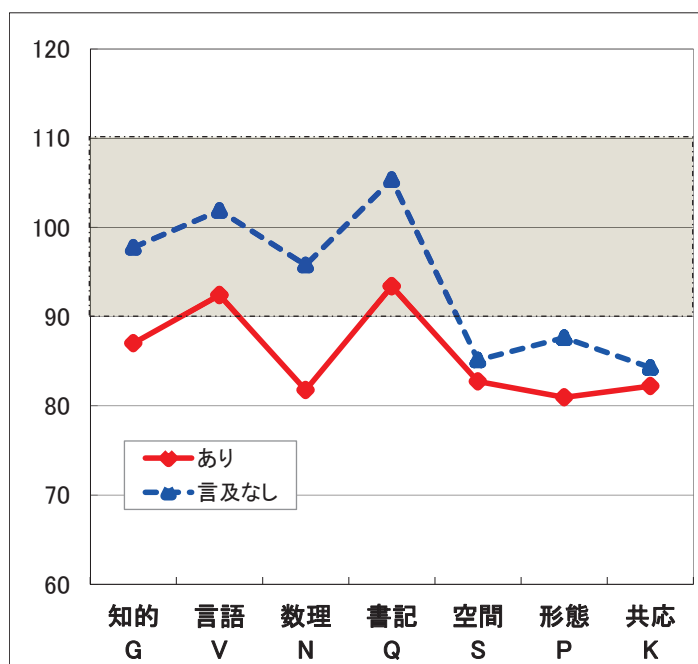
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	25	87.00	92.40	81.76	93.40	82.72	80.96	82.20	52.60
言及なし	336	97.76	101.89	95.78	105.36	85.13	87.62	84.29	50.72
有意差		*	*	**	*	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

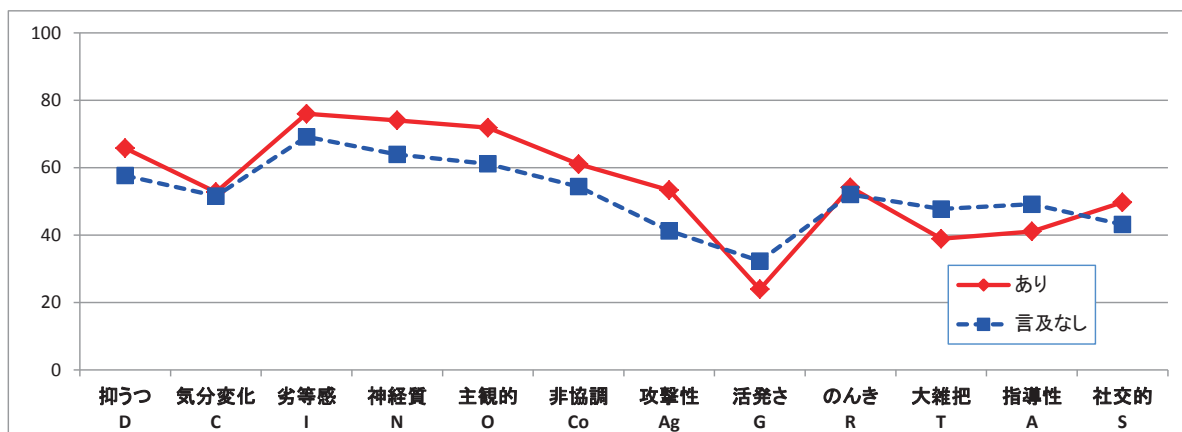
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、認知機能群（G, V, N, Q）に相当する4つの適性能において、設問指示に従わない傾向の個人は、適性能得点が有意に低い傾向が確認された。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	21	65.76	52.76	76.00	74.05	71.86	61.05
言及なし	259	57.67	51.58	69.15	63.93	61.15	54.39
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	53.32	23.95	54.14	38.90	41.10	49.73
言及なし	41.28	32.30	52.04	47.75	49.16	43.14
有意差	†	n.s.	n.s.	n.s.	†	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、攻撃性 (Ag)、指導性 (A) の 2 尺度において、有意差や、有意差に近い傾向（有意傾向）がみられた。

具体的には、指示に従えなかったり、指示を守らずに自己流の判断で行動するような個人の場合、そうでない個人と比べて、他人の意見を聞かずに正しいと思うことをかまわず主張するような攻撃的態度や、引っ込み思案で人付き合いを避ける傾向として現れる可能性がある。

19. 同時処理が苦手

概要

職業相談の中で、上司や先輩等からの複数の作業指示にうまく対応できなかった経験が語られたり、支援者からみてその兆候があった場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 32名（男性 16、女性 14、不明 2）、言及なし群 329名（男性 192、女性 133、不明 4）であった。

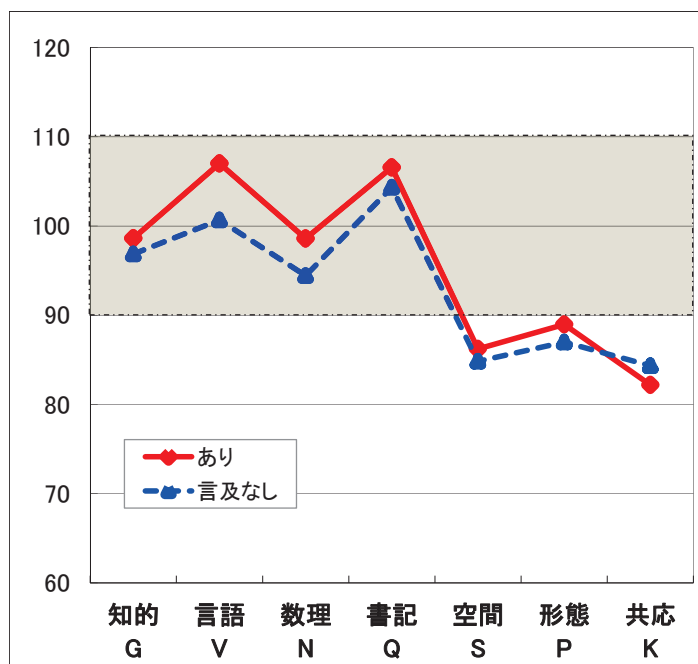
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	32	98.63	107.00	98.59	106.56	86.22	88.97	82.19	51.41
言及なし	329	96.86	100.67	94.44	104.33	84.84	86.98	84.33	50.80
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

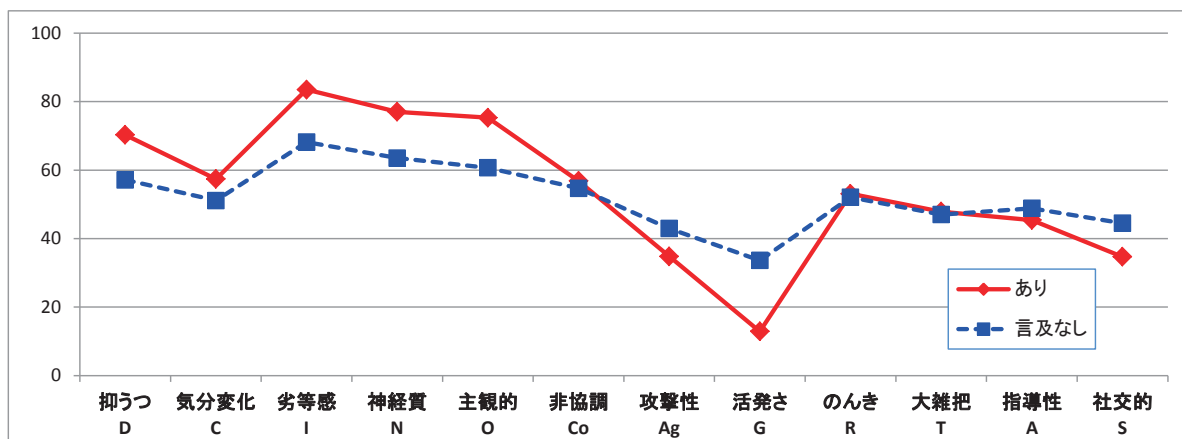
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、どの適性能においても、両群間の有意差は得られなかった。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	24	70.29	57.42	83.52	77.04	75.33	56.84
言及なし	256	57.15	51.13	68.20	63.53	60.71	54.69
有意差		*	n.s.	**	*	*	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	34.79	12.89	53.11	47.88	45.42	34.71
言及なし	42.97	33.65	52.09	47.02	48.85	44.51
有意差	n.s.	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、抑うつ（D）、劣等感（I）、神経質（N）、主観的（O）、活発さ（G）の 5 尺度で有意差が得られた。

具体的には、複数の作業指示への同時処理がうまくできなかった経験を語る個人の場合、そうでない個人と比べて、憂うつさを持ち、劣等感を抱きやすく、心配性で神経質でありそうにないことを空想する過敏な性質を示し、身体を動かすことに抵抗があり、自信のない消極的な態度を示す可能性がある。

20. 段取りに苦労

概要

職業相談の中で、上司や先輩等からの作業指示に対し、段取りをうまくつけられなかった経験が語られたり、支援者からみてその兆候があった場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 29 名（男性 15、女性 13、不明 1）、言及なし群 332 名（男性 193、女性 134、不明 5）であった。

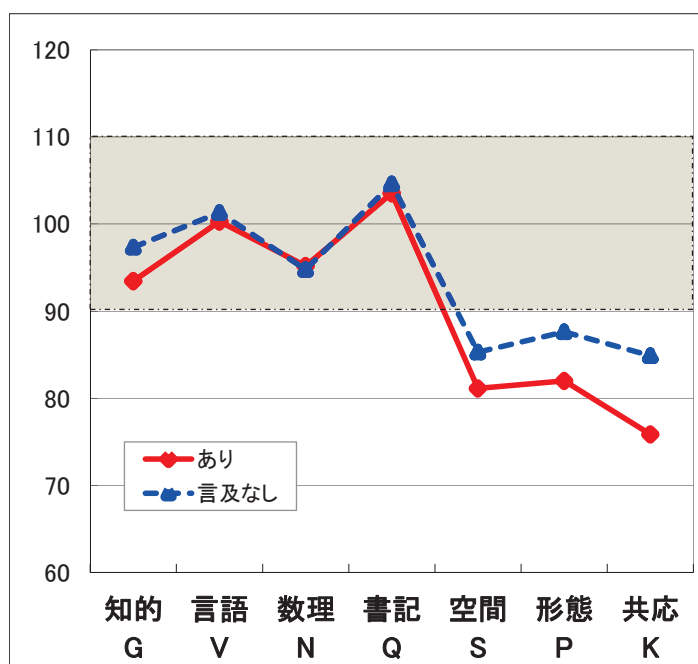
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	29	93.45	100.31	95.17	103.55	81.14	82.00	75.86	51.86
言及なし	332	97.33	101.31	94.77	104.62	85.30	87.61	84.87	50.76
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	†	n.s.

n.s.	有意差なし
†	p<.10の有意傾向
*	p<.05の有意差あり
**	p<.01の有意差あり

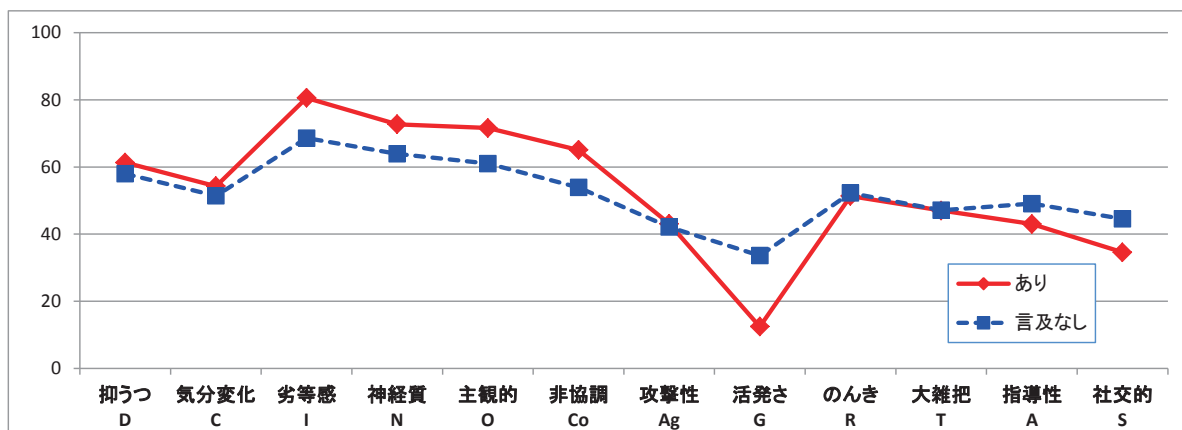
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、運動共応（K）を除く全ての適性能で、両群間の有意差は得られなかった。運動共応（K）について、段取りをうまくつけられない個人は、適性能得点が若干低く、有意差を生じるに近い傾向が得られた。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	24	61.33	54.29	80.60	72.71	71.63	65.08
言及なし	256	57.99	51.42	68.60	63.93	61.05	53.93
有意差		n.s.	n.s.	**	n.s.	†	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	43.08	12.42	51.33	47.00	43.00	34.56
言及なし	42.10	33.61	52.28	47.11	49.07	44.57
有意差	n.s.	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、劣等感 (I)、主観的 (O)、活発さ (G) の 3 尺度で有意差や、有意差に近い傾向（有意傾向）がみられた。

具体的には、段取りをうまくつけられなかった経験が語られた個人の場合、そうでない個人と比べて、劣等感を抱きやすく、ありそうにないことを空想する過敏な性質を示し、身体を動かすことに抵抗があり、自信のない消極的な態度を示す可能性がある。

21. 凡ミス、うっかりミス

概要

職業相談の中で、職場で単純なミスやうっかりミスが多かった話が語られた場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 29 名（男性 17、女性 12）、言及なし群 332 名（男性 191、女性 134、不明 7）であった。

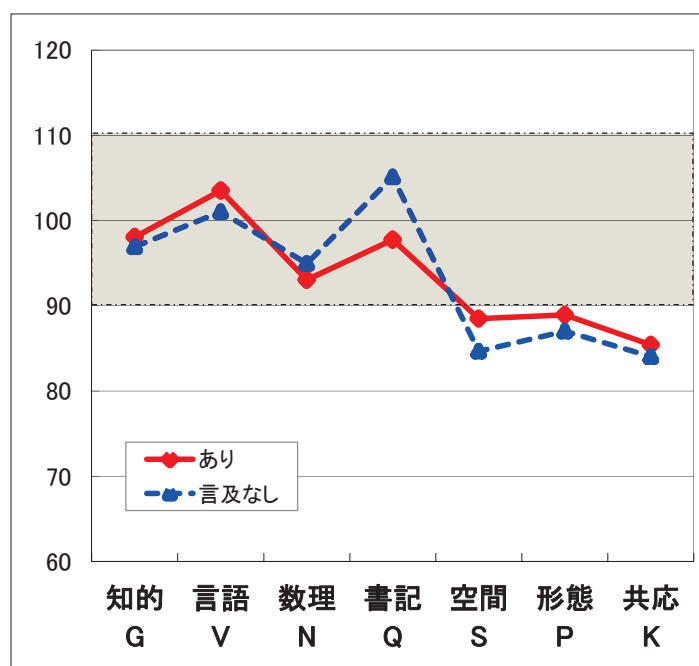
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	29	98.07	103.52	93.03	97.76	88.48	88.93	85.41	51.76
言及なし	332	96.92	101.03	94.96	105.12	84.66	87.01	84.03	50.77
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

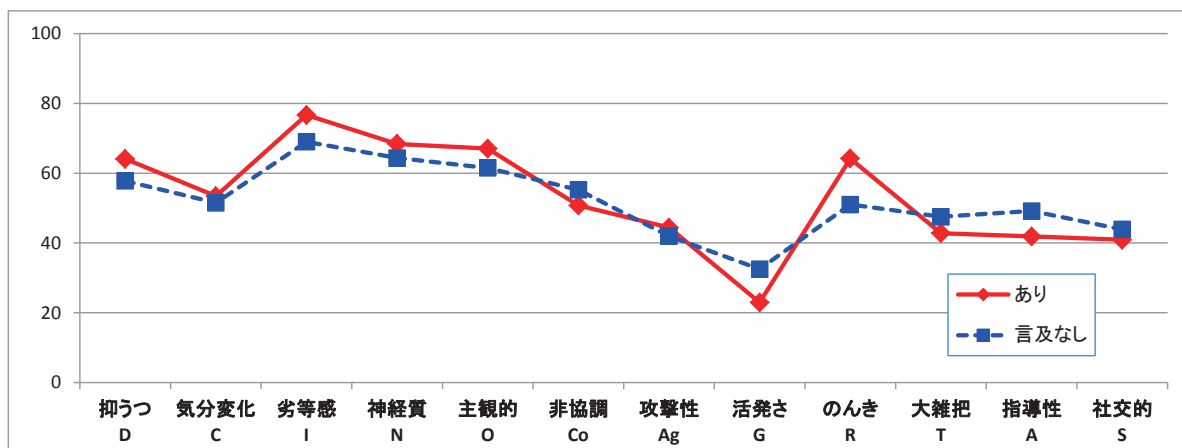
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、どの適性能においても、両群間の有意差は得られなかった。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	22	64.09	53.41	76.67	68.39	67.05	50.74
言及なし	258	57.78	51.52	69.01	64.35	61.52	55.25
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	44.43	22.96	64.19	42.79	41.87	40.91
言及なし	41.97	32.53	51.00	47.50	49.15	43.91
有意差	n.s.	†	*	n.s.	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果 (平均値) を比較したところ、活発さ (G)、のんきさ (R) の 2 尺度で有意差や、有意差に近い傾向 (有意傾向) がみられた。

具体的には、職場で単純なミスやうっかりミスが多い個人の場合、そうでない個人と比べて、身体を動かすことに抵抗があり、自信がなく消極的な態度であったり、気軽に刺激を求めたりしても、調子に乗りすぎて軽率な行動に走りがちな性質として現れる可能性がある。

22. マニュアル等を覚えられない

概要

職業相談の中で、作業の流れを示すマニュアル等を覚えられずにうまく対応できなかった経験が語られたり、支援者からみてその兆候があった場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 11 名（男性 6、女性 5）、言及なし群 344 名（男性 202、女性 142）であった。

適性検査結果の特徴について

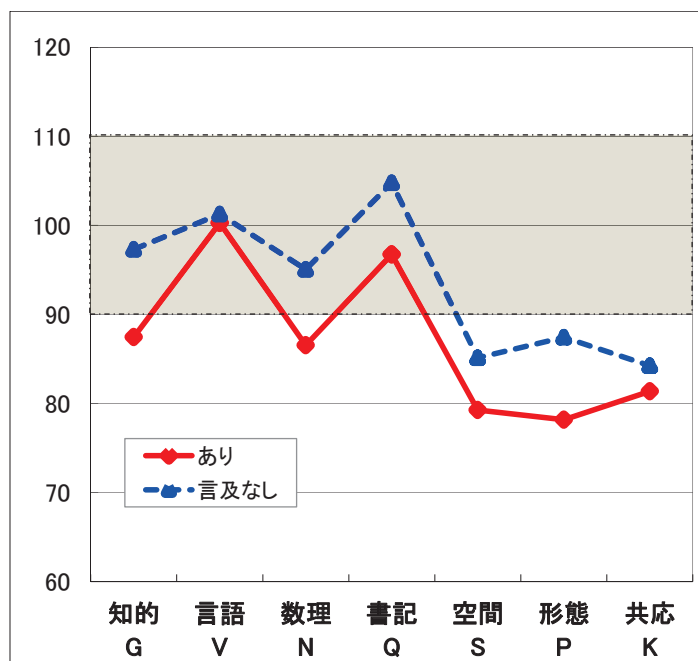
■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	11	87.45	100.27	86.55	96.73	79.27	78.18	81.36	51.27
言及なし	350	97.32	101.26	95.07	104.78	85.14	87.44	84.23	50.84
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、どの適性能において、両群間の有意差は得られなかった。

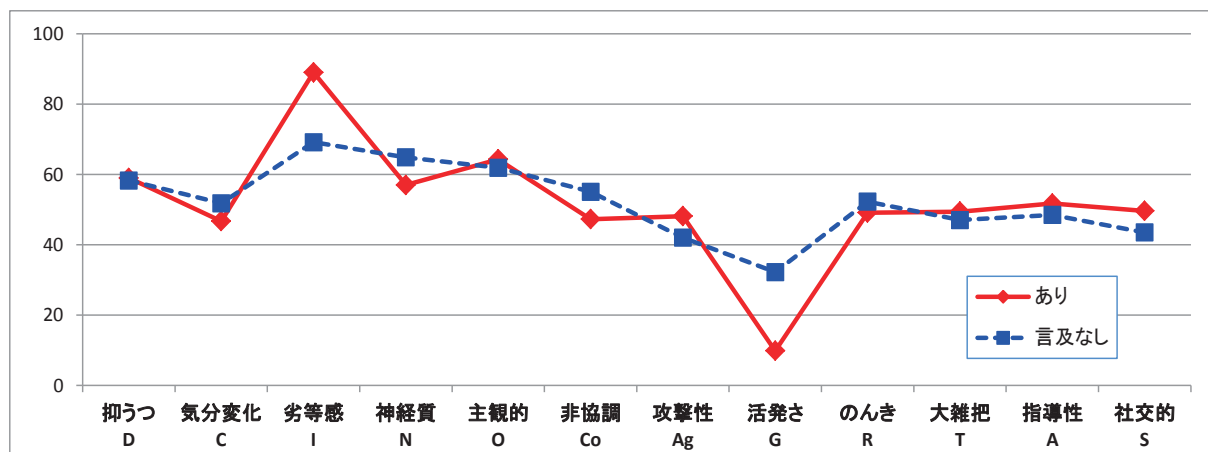
グラフを一見すると、差が大きい部分も見受けられるが、「言及・兆候あり」の観測数が非常に少なかった（11 件）ことによる影響であり、統計的な有意差も得られていないことから、解釈の深読みは避けるべきだと考える。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	7	59.00	46.71	89.00	57.00	64.29	47.29
言及なし	273	58.26	51.79	69.17	64.87	61.88	55.07
有意差		n.s.	n.s.	**	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	48.13	9.86	49.14	49.43	51.71	49.63
言及なし	42.02	32.24	52.27	47.04	48.47	43.49
有意差	n.s.	**	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、劣等感 (I)、活発さ (G) の 2 尺度で有意差が得られた。

具体的には、マニュアル等を覚えられずにうまく対応できなかった経験を語る個人の場合、そうでない個人と比べて、劣等感に悩まされるなど、内気で、自己を過小評価する傾向や、身体を動かすこと自体に抵抗があり、自信がなく、消極的な態度を示す傾向がある。

グラフを見ると各群の差異が非常に大きい部分もあるが、「言及・兆候あり」の観測数が 7 件のみと非常に限られていることから、今後観測数が増えた場合に、統計的な傾向が変わる可能性もある。そのため、解釈の深読みは現段階では避けるべきと思われる。

23. 将来（職業選択等）に対し混乱状態

概要

職業相談の中で、将来の職業選択等に対して混乱を訴えたり、支援者からみてその兆候があった場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 66 名（男性 31、女性 32、不明 3）、言及なし群 295 名（男性 177、女性 115、不明 3）であった。

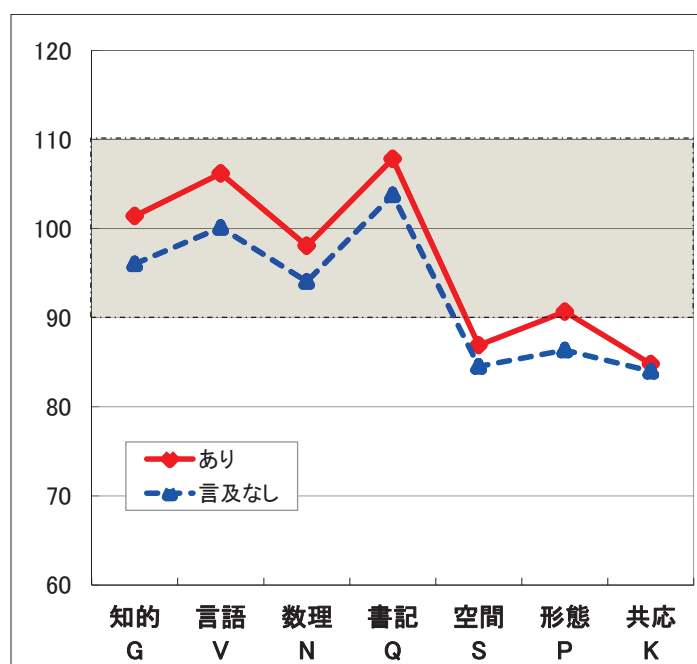
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	66	101.41	106.20	98.08	107.82	86.91	90.67	84.82	51.88
言及なし	295	96.03	100.12	94.07	103.80	84.53	86.38	83.99	50.62
有意差		n.s.	†	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

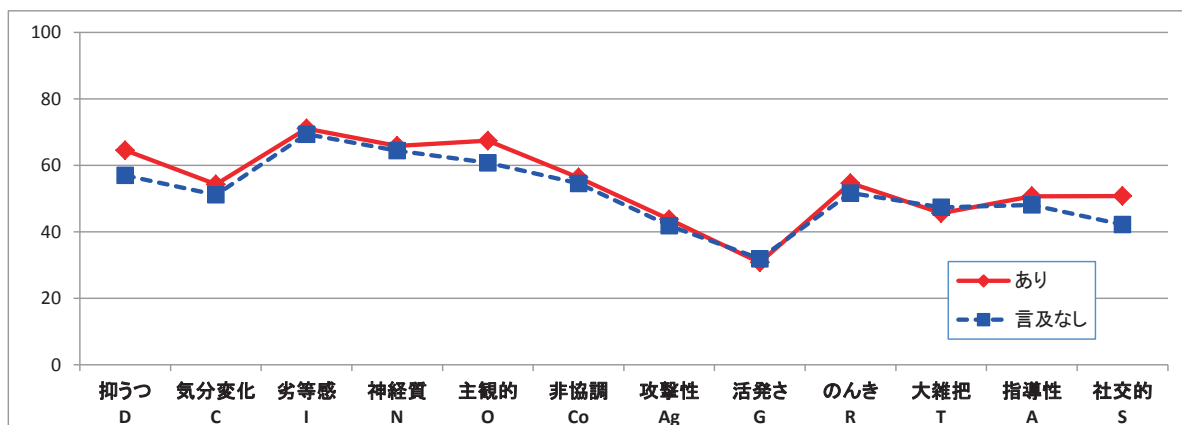
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、言語能力（V）を除く全ての適性能で、両群間の有意差は得られなかった。言語能力（V）について、将来の職業選択等に対して混乱を訴える個人は、適性能得点が若干高く、有意差を生じるに近い傾向が得られた。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	48	64.54	54.30	71.07	65.87	67.43	56.34
言及なし	232	56.98	51.13	69.38	64.43	60.80	54.58
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	43.73	30.78	54.63	45.63	50.71	50.79
言及なし	41.85	31.88	51.69	47.40	48.10	42.18
有意差	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	†



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、社交的 (S) の 1 尺度で有意差に近い傾向（有意傾向）がみられた。

具体的には、将来の職業選択等に対して混乱を訴えるような個人の場合、そうでない個人と比べて、誰とでもよく話すなど、対人的接触を好む性質を持つ可能性がある。

24. マイペースな態度に叱責を受ける

概要

職業相談の中で、職場での仕事等において、本人なりの判断でマイペースな態度をとったことで、上司や先輩から叱責を受けた経験が語られた場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 86 名（男性 48、女性 36、不明 2）、言及なし群 275 名（男性 160、女性 111、不明 4）であった。

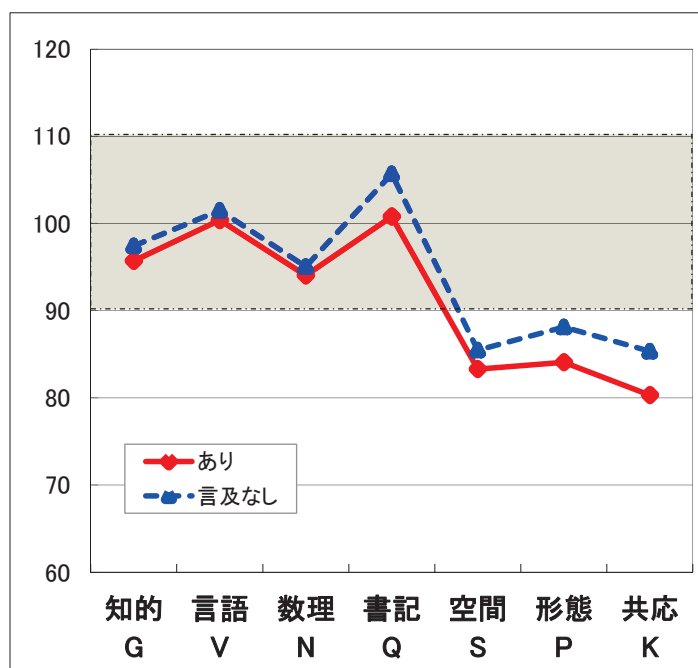
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	86	95.72	100.38	94.05	100.79	83.30	84.08	80.30	50.28
言及なし	275	97.42	101.49	95.04	105.70	85.48	88.12	85.35	51.03
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	†	n.s.	n.s.	†	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

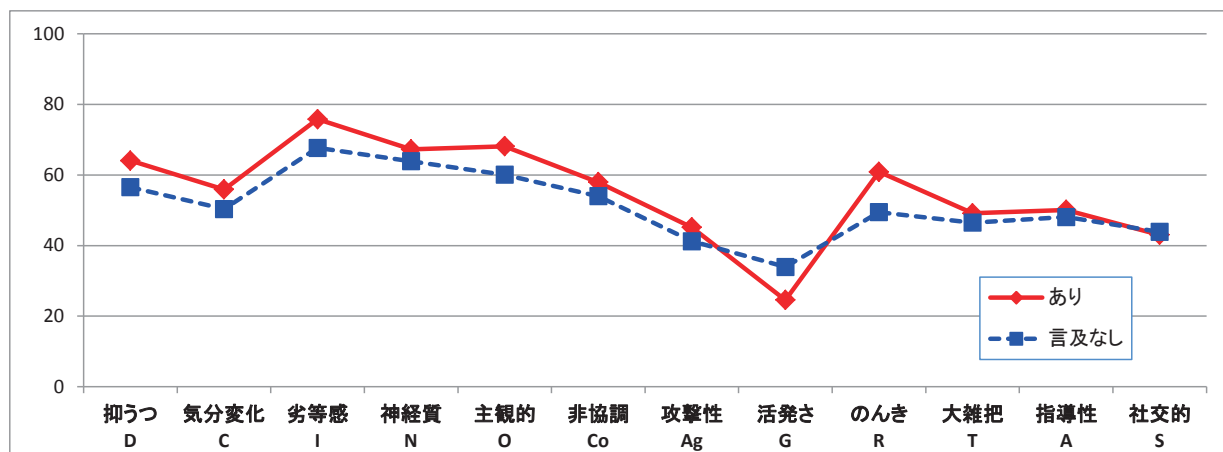
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、書記的知覚 (Q) と運動共応 (K) を除く全ての適性能で、両群間の有意差は得られなかった。書記的知覚 (Q) と運動共応 (K) について、マイペースな態度に叱責を受けた経験を語った個人は、双方とも適性能得点が若干低く、有意差を生じるに近い傾向が得られた。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	65	64.06	55.89	75.83	67.25	68.14	57.97
言及なし	215	56.53	50.36	67.67	63.91	60.07	53.97
有意差		n.s.	n.s.	**	n.s.	†	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	45.14	24.57	60.88	49.13	50.11	43.03
言及なし	41.20	33.95	49.46	46.48	48.08	43.86
有意差	n.s.	*	**	n.s.	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、劣等感（I）、主観的（O）、活発さ（G）、のんきさ（R）の 4 尺度で有意差や、有意差に近い傾向（有意傾向）がみられた。

具体的には、マイペースな態度に叱責を受けた経験を語った個人の場合、そうでない個人と比べて、劣等感を抱きやすく、ありそうにないことを空想する過敏な性質を示し、身体を動かすことに抵抗があり、消極的な態度であったり、気軽に刺激を求める場合があっても、調子に乗りすぎて軽率な行動に走りがちな性質として現れる可能性がある。

25. TPO・場にあった言動の苦手さの有無

概要

相談場面での支援者とのやりとりや受け答えの状況がスムーズであったり、服装や態度に問題がないと確認できた場合を、TPO・場にあった言動の苦手さ「なし」群とした。逆に、受け答えや服装、態度に問題があると支援者側から確認できた場合を、TPO・場にあった言動の苦手さ「あり」群、そのような言及が相談記録に残されていなかった場合を言及なし群とする3群に分け、GATB適性能得点平均値とY-G性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、TPO・場にあった言動の苦手さがないと確認できた群62名（男性32、女性28、不明2）、言及なし群234名（男性128、女性101、不明5）、TPO・場にあった言動の苦手さが確認された群65名（男性48、女性17）であった。

適性検査結果の特徴について

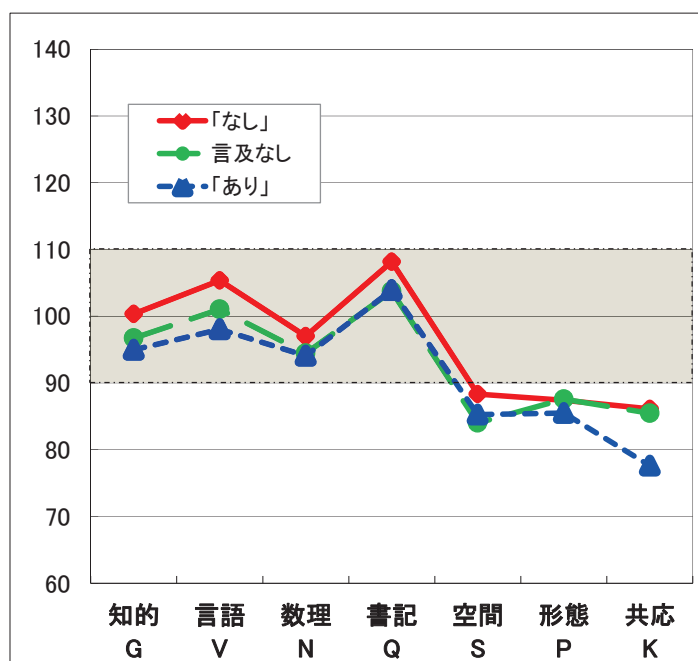
■特徴有無別のGATB平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
「なし」	62	100.35	105.37	97.00	108.15	88.32	87.40	86.11	48.03
言及なし	234	96.71	101.02	94.43	103.75	84.00	87.56	85.44	51.02
「あり」	65	94.95	98.03	94.06	103.91	85.25	85.48	77.60	52.92
群間有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	†	n.s.

n.s.	有意差なし
†	p<.10の有意傾向
*	p<.05の有意差あり
**	p<.01の有意差あり

凡例

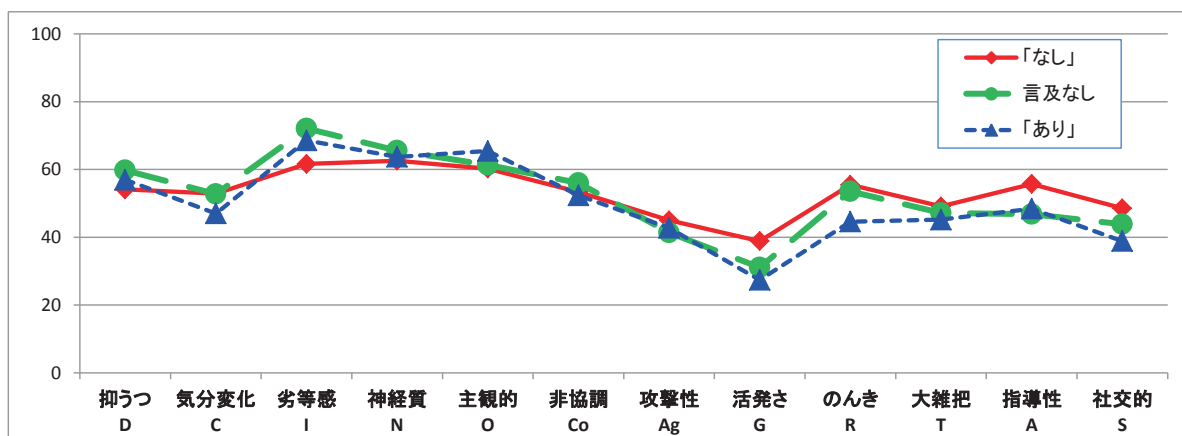
相談特徴の有無別にGATB平均値を比較したところ、運動共応（K）に有意に近い傾向（有意傾向）が確認された以外には、両群間の差は得られなかった。運動共応（K）について、TPO・場にあった言動の苦手さが確認された個人は、そうでない個人と比べて得点が低くなるという弱い傾向があった。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
「なし」	48	54.13	52.88	61.63	62.58	60.24	53.39
言及なし	178	59.79	52.75	72.12	65.54	61.33	56.01
「あり」	54	56.96	47.02	68.58	63.70	65.45	52.35
群間有意差		n.s.	n.s.	*	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社交的 S
「なし」	44.98	38.85	55.48	49.11	55.72	48.52
言及なし	41.32	31.09	53.52	47.15	46.78	43.84
「あり」	42.77	27.41	44.59	45.19	48.41	38.87
群間有意差	n.s.	n.s.	†	n.s.	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、劣等感 (I)、のんきさ (R) の 2 尺度において、有意差または有意に近い傾向（有意傾向）が得られた。

具体的には、相談場面で TPO・場にあった言動の苦手さがなかった個人は、相談記録にそのような言及がなかった個人と比べて、劣等感が低い傾向が確認された。一方、TPO・場にあった言動の苦手さがある個人との比較に関しては有意な傾向は得られていない。

また、相談場面において TPO・場にあった言動の苦手さが確認された個人は、他の群と比べて、気軽で活動的な様子がなく、慎重であるという弱い傾向が確認された。

(3) 相談特徴の有無と適性検査結果との関連性に関する分析

<小括>

○行動・現状面：③精神疾患等の有無、活発さ、客観的状况等

- 「うつ、精神疾患」について語られた相談特徴を持つ個人は、GATB の運動共応 (K) が低く、YG 検査において抑うつ性、活動性、社交性が低いという結果が得られた。
- 社会的な接触が少なかったり、不登校、ひきこもりの経験を語った個人については、YG 検査との関連性は確認されなかったが、GATB において知的能力 (G)、空間判断力 (S)、運動共応 (K) が低いという結果が得られており、制限時間内でのパワー検査における不得意な様子が推察された。
- 「職を転々」とする個人については、GATB との関連性は得られなかったが、YG 検査において劣等感が低い等の結果が得られた。

○行動・現状面：③精神疾患等の有無、活発さ、客観的状況等

26. うつ、精神疾患等

概要

職業相談の中で、うつ病やその他の精神疾患等の具体的な病名が本人の言葉で語られた場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 81名（男性 55、女性 24、不明 2）、言及なし群 280名（男性 153、女性 123、不明 4）であった。

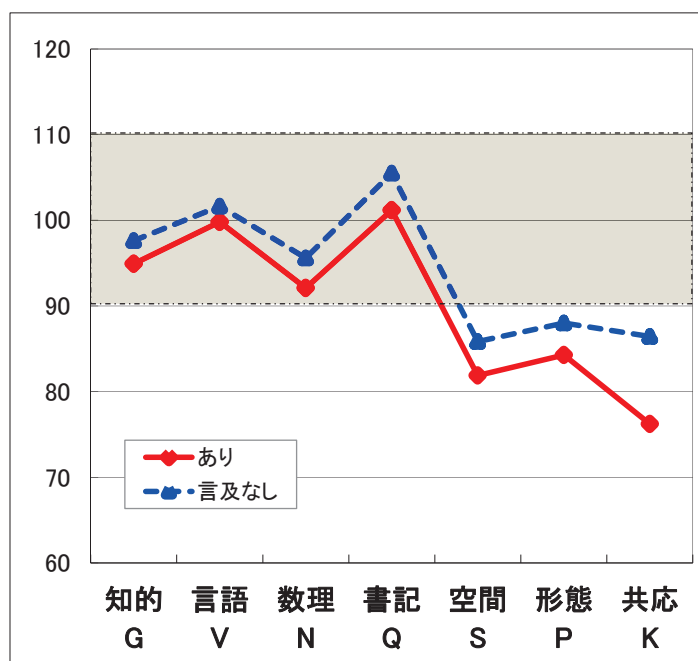
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	81	94.91	99.81	92.10	101.19	81.88	84.27	76.23	51.93
言及なし	280	97.63	101.64	95.59	105.50	85.86	88.00	86.43	50.54
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	**	n.s.

n.s.	有意差なし
†	p<.10の有意傾向
*	p<.05の有意差あり
**	p<.01の有意差あり

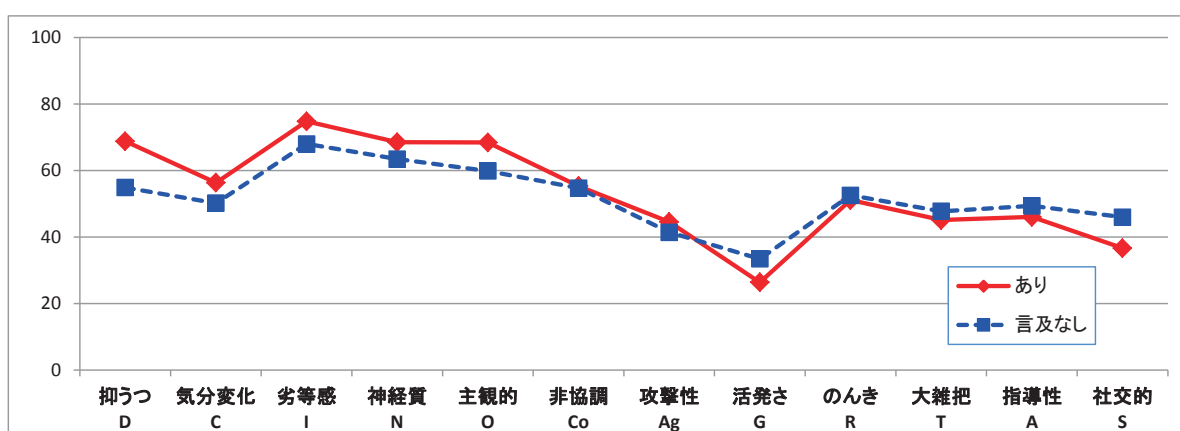
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、運動共応（K）を除く全ての適性能で、両群間の有意差は得られなかった。運動共応（K）について、うつ病やその他の精神疾患等に言及した個人は、適性能得点が有意に低い傾向にあった。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	68	68.79	56.33	74.81	68.51	68.44	55.35
言及なし	212	54.90	50.20	68.00	63.47	59.90	54.73
有意差		**	n.s.	†	n.s.	*	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社交的 S
言及・兆候あり	44.53	26.35	51.10	45.13	46.06	36.65
言及なし	41.42	33.45	52.55	47.74	49.38	45.98
有意差	n.s.	*	n.s.	n.s.	n.s.	*



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、抑うつ（D）、劣等感（I）、主観的（O）、活発さ（G）、社交的（S）の 5 尺度で有意差や、有意差に近い傾向（有意傾向）がみられた。

具体的には、うつ病やその他の精神疾患等に言及した個人の場合、そうでない個人と比べて、憂うつさを持ち、劣等感を抱きやすく、ありそうにないことを空想する過敏な性質を示し、身体を動かすことに抵抗があり、地味で引っ込み思案な性質を示す可能性がある。

27. 不登校/ひきこもり、不活発

概要

職業相談の中で、本人が不登校やひきこもりの経験について語ったり、社会への接触を避けるような不活発さの兆候が支援者からみてとれた場合と、そのような言及や兆候がなかった場合とで2群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、言及・兆候あり群 39 名（男性 25、女性 14）、言及なし群 322 名（男性 183、女性 133、不明 6）であった。

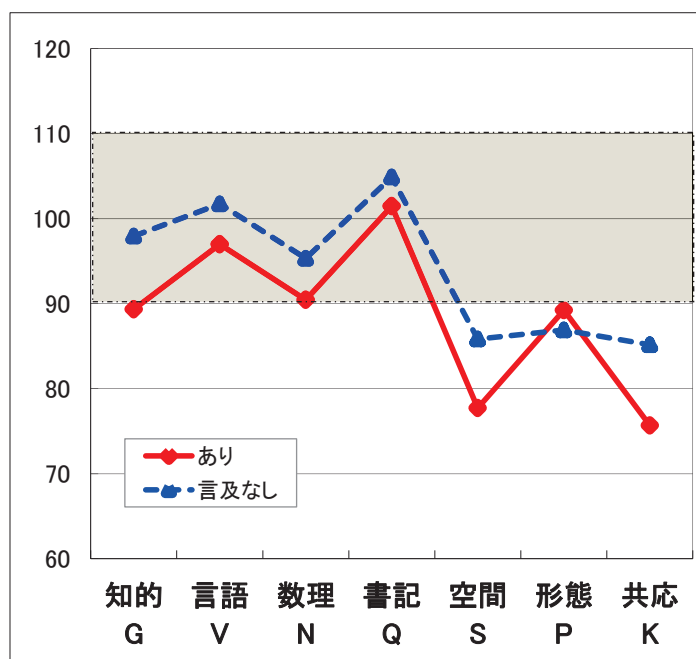
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
言及・兆候あり	39	89.36	97.00	90.46	101.49	77.74	89.23	75.69	54.49
言及なし	322	97.94	101.74	95.33	104.90	85.84	86.91	85.17	50.41
有意差		*	n.s.	n.s.	n.s.	*	n.s.	*	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

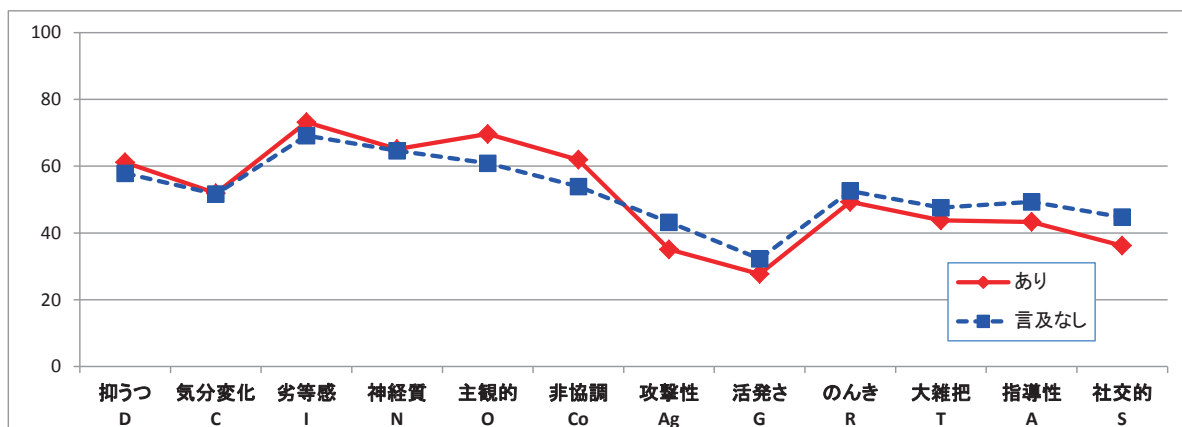
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、知的能力 (G)、空間判断力 (S)、運動共応 (K) において、不登校や不活発な経験を持つ個人は適性能得点が有意に低い傾向が確認された。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
言及・兆候あり	35	61.11	51.89	73.17	65.11	69.63	61.91
言及なし	245	57.87	51.63	69.15	64.61	60.86	53.88
有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社会的 S
言及・兆候あり	35.06	27.69	49.29	43.77	43.29	36.17
言及なし	43.18	32.25	52.59	47.57	49.30	44.74
有意差	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、どの尺度においても、両群間の有意差や有意差に近い傾向（有意傾向）はみられなかった。

28. 職を転々とするかどうか

概要

相談場面で聞かれた本人の主訴や行動特徴から、過去に職を転々としてきた個人を、職を転々とする傾向「あり」群とし、逆に、職を転々とせず勤務先を変えずに長年勤め上げていることが相談の中で語られた場合を、職を転々とする傾向「なし」群、そのような言及が相談記録に残されていなかった場合を言及なし群として3群に分け、GATB 適性能得点平均値と Y-G 性格検査の各尺度の平均値を比較した。各群の人数と性別の内訳は、職を転々とする傾向がない群 41 名（男性 23、女性 17、不明 1）、言及なし群 296 名（男性 169、女性 122、不明 5）、職を転々とする傾向がある群 24 名（男性 16、女性 8）であった。

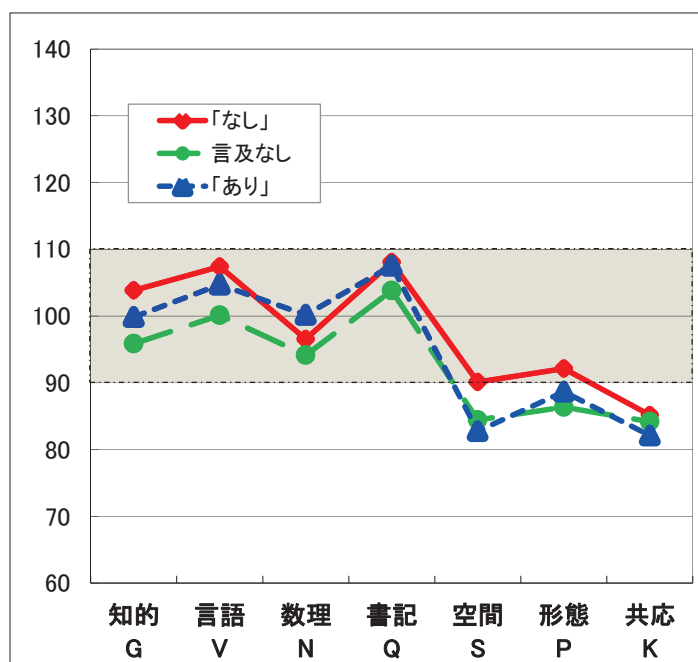
適性検査結果の特徴について

■特徴有無別の GATB 平均値

	観測数(N)	知的 G	言語 V	数理 N	書記 Q	空間 S	形態 P	共応 K	高低差の 平均値
「なし」	41	103.83	107.39	96.54	108.05	90.12	92.12	85.15	49.59
言及なし	296	95.84	100.09	94.13	103.80	84.43	86.35	84.17	50.86
「あり」	24	99.83	104.71	100.17	107.54	82.75	88.67	82.08	52.92
群間有意差		n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.

凡例	n.s.	有意差なし
	†	p<.10の有意傾向
	*	p<.05の有意差あり
	**	p<.01の有意差あり

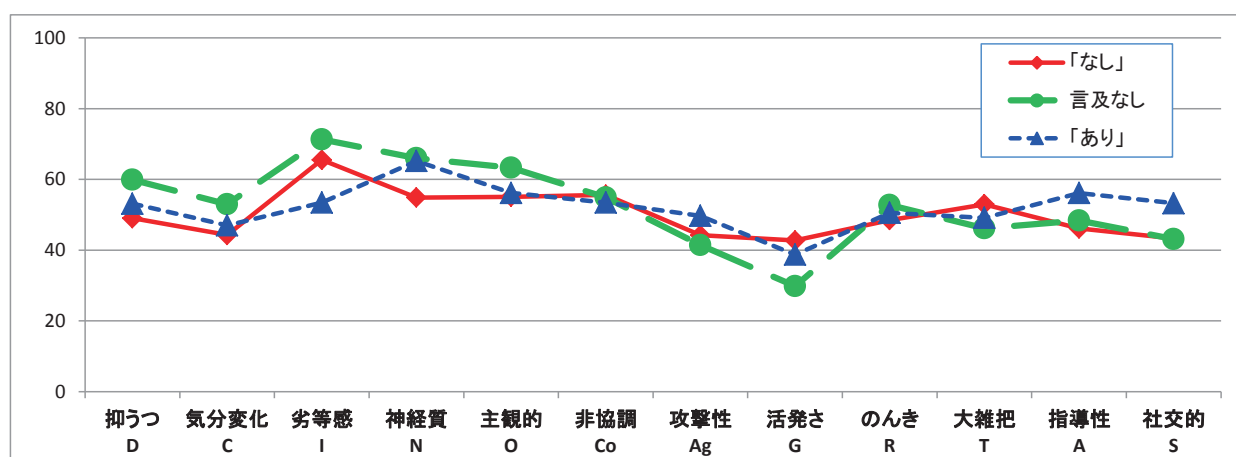
相談特徴の有無別に GATB 平均値を比較したところ、どの適性能においても、両群間の有意差は得られなかった。



■特徴有無別の Y-G 性格検査平均値

	観測数(N)	抑うつ D	気分変化 C	劣等感 I	神経質 N	主観的 O	非協調 Co
「なし」	33	49.03	44.28	65.53	54.88	55.09	55.66
言及なし	232	59.92	52.98	71.33	66.01	63.30	54.88
「あり」	15	53.13	47.00	53.44	65.19	56.19	53.44
群間有意差		n.s.	n.s.	*	n.s.	n.s.	n.s.

	攻撃性 Ag	活発さ G	のんき R	大雑把 T	指導性 A	社交的 S
「なし」	44.19	42.72	48.50	52.94	46.13	43.28
言及なし	41.41	29.78	52.79	46.18	48.36	43.10
「あり」	49.71	38.73	50.56	49.13	56.13	53.27
群間有意差	n.s.	*	n.s.	n.s.	n.s.	n.s.



相談特徴の有無別に YG 検査結果（平均値）を比較したところ、劣等感（I）、活発さ（G）の2尺度において、有意差が得られた。

具体的には、過去に職を転々としてきた個人は、相談記録にそのような言及のなかった個人と比べて、劣等感が低い傾向が示された。

また、職を転々とせずに長年勤め上げていることが相談の中で語られた個人は、相談記録にそのような言及のなかった個人と比べて、動作がテキパキしており、活動的だという傾向が示された。一方で、職を転々とする個人も、有意差はないが活発さ（G）がやや高めに現れており、今後観測数が増えることで結果の解釈が可能になるとと思われる。

JILPT 資料シリーズ No.175

適性検査を活用した相談ケース記録の分析と考察

発行年月日 2016年5月31日

編集・発行 独立行政法人 労働政策研究・研修機構

〒177-8502 東京都練馬区上石神井 4-8-23

(照会先) 研究調整部研究調整課 TEL:03-5991-5104

印刷・製本 有限会社 太平印刷

©2016 JILPT Printed in Japan

* 資料シリーズ全文はホームページで提供しております。(URL:<http://www.jil.go.jp/>)